
カテキヨ怪談

えつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カテキヨ怪談

【NNコード】

N4345U

【作者名】

えつ

【あらすじ】

靈感もちの家庭教師に聞いた怪談。

高校受験をひかえた中学一年生の夏。進学校めざしてゐるくせに成績がどん底だった私に、親が家庭教師をつけた。

「よろしく」

「……よろしくお願ひします」

人見知りするから少し不安だったけれど、初めての授業の日、玄関で母の肩^{ごし}に目が合つたとたん「あ、なんか大丈夫かも」と力が抜けた。

上手くいえないが、第一印象で気が合つかどうかわかる時つてあると思う。

あとから「思つてたのとぜんぜん違う！」となることもあるから、あまりアテにはならないが、話しやすく優しそうな人に見えた。

名前は高橋さん。

教え上手でおしゃべりな爽やかイケメン大学生。

背は平均より少し高いくらいで、家庭教師だけあって真面目そうな外見。少々ミスしようが宿題をやり残していようが、嫌な顔一つせず優しく教えてくれる。そのせいか、私はすぐになつた。漫画や動物が好きなど、いくつか共通点があつたのも大きいかもしれない。

おかげで、勉強がほんのり面白くなつてきたある日の夜。

私はいつものように自分の部屋で高橋さんとイスを並べ、机に向かつていた。

窓からは生ぬるい風が入つてきて、じんわりと暑い。

めずらしくセミの声がしないせいか静かで、扇風機とシャーペンを走らせる音だけが室内に響いている。

そんなとき、ふわりとフローラル系の香水の匂いがした。

男物にしては甘すぎるし、たまに高橋さんがつけているものとは

系統が違う。

移り番つてやつかな、なんて下世話なことを考へていたら、「え
しつ」とだれかが背後のベッドに座つた気配がした。

え？

室内には私と高橋さん以外だれもいない。

そして彼はずっと左に座つている。

さつき確かにベッドが人の体重できしんだ音がしたと思つたが、

ふり返つてもそこにはなにもない。

なんだか背筋がぞわぞわした。

ただの気のせい、かな。

気をとり直してテキストの続きを解いていると、頭のすぐ上で「
はあ……」とため息が聞こえた。

まるでだれかにノートをのぞきこまれたような距離だと思つてしまつて、ぞわつと全身に鳥肌が立つ。

明らかに女性の声だった。

幻聴にしては嫌に生々しく、隣家の声にしては近すぎる。
ため息がした辺りや部屋中をみわたすが、やっぱり他にだれもない。

恐怖にかられて高橋さんをふり返ると、彼はひからを見てニヤニヤ笑つていた。

「わかる？」

「え？」

「わかる？」

あまりに落ちつきはらつた態度なので、解いている最中の問題の
ことを聞かれているのだと思つた。

「あ、まだ考え方中」

我に返つてみれば、下の階には家族もいるし、同じ部屋に高橋さんもいるのに幽靈だなんだと騒ぐのは恥ずかしい気がした。
勉強が嫌だからボイコットするつもりだと思われるかもしけない。
あわててテキストに向き直ると、意味不明なことを言われた。

「大丈夫。ちゃんと連れて帰るから」

何のことだと思ったが、「30分で」と言われた問題の制限時間がせまっていたので、その日は聞き流した。

後日、同じく家庭教師の時間。

高橋さんが軽く告げた。

「実はあのとき、肩に女が乗つてたんだ。大学からついてきちゃつてさ」

「女?」

冗談めかした口調だったのでツツコミまちかと思ったが、「電波あつかいされたらヤだな」という保険のようにも見えたので、私は普通にしていた。

第一、オカルトは大好きだ。

「そう、悪いもんじやないんだけど。ずっと服ひっぱつてくるし寒いし肩こるし、まいった」

こんな感じ、とつんつん服をひっぱつてくる。

風がそよぐ程度の力だが、さすがにちょっと氣味が悪い。「変なの連れてこないでよ

つい身を固くすると、高橋さんが笑つた。

「大丈夫、もういなから」

自分が怖い目にあうのは嫌だけど、怪談を聞いたり話したりするのは大好きだ。

そんな私が靈感もちの家庭教師に怪談をせがむのは自然の摂理と、いうか、レンジに卵を入れたら爆発するのと同じくらい当然で、これはその内の一つ。

「大学にでる教室があるんだ」

授業の合間、たくさんテキストを広げた机の前で高橋さんがいつた。

「黒い人影、白目がない女、普通の人。見るやつによつて証言はバラバラだけど、田が合うと家までずーつとついてくるつてのが共通点で。もう一度その教室に行くまで毎晩金縛りにあつんだつてさ。面白そつだろ?」

「聞くだけならね」

「私だつたら絶対行かないが、彼はぐだんの教室をのぞいてみたらしい。」

夏休み中のオープンキャンパスで人はざつた返していたが、その教室は使われておらず、がらんとしていた。

その中に、ぽつんと席に座る女。

ここ的学生だつたんだろう、二十歳くらいで、黒髪のショートカット。ニットの長そでにジーンズと明らかな冬服で、憂鬱そうに頬杖をついている。

田が合うと、これまた無愛想についてきた。

「自分の家も、どうしてずっと教室にいるのかも思い出せないから、とりあえず田が合つたやつについて行つてるんだつてさ」

「それつてまさかこの前の」

顔を引きつらせると、彼は笑顔でうなずいた。

「そ。この家にいる間とか、俺の家についた時とか”ちがう、ちがう、こじじゃない”って俺の服ひつぱりながらずーつとぶつぶついつてた」

「それで、その人どうしたの?」

まだこの部屋にいるとかいうんじゃないだろうな。

「ん? 教室に戻したから、まだそこにいるんじゃない? 昼も

夜もずーつと。それか、別のやつにくつついてるよ」

「ついてこられたら嫌だけど、ちょっと可哀想だね」

うちわで扇ぎながら告げると、意味深な瞳がこぢらを見た。

「同情すると憑かれるよ」

「その大学には行かないから平氣」

高橋さんがけらけら笑う。

「あんなの怖くないって。前もいつたけどそんな悪い奴じゃないから。あれより下の階のほうがよっぽど怖い」

「何があるの？」

「ベタだけど、トイレ。掃除してあって清潔感はあるし、ちゃんと電気ついてんのになーんか全体的に暗い。ふと顔上げたら個室にでっかい顔がすんごい形相で浮かんでてさー。それからあそこは使つてない。見えてない奴でもなんか怖いってすぐ出てくるし」

その話を聞いて、私はある事を思い出した。

一時期よく通っていたデパートがあるのだが、そこのトイレが高橋さんの話と同じように『電気がついているのにとても暗い感じがして、不気味で背筋が寒くなる』トイレだつたのだ。

他に人がいなければ怖くて入れない不気味さだったのだが、そのデパートには他のトイレがなかつたため、我慢して何度も使つていた。

とはいっても、怖いだけで害はなかつたけれど。

高橋さんが帰つてから、パソコンでそのデパートの名前、トイレ、などのキーワードで検索してみる。

適当にクリックした記事にはこう書かれていた。

「デパートのトイレには逆さづりの女の幽霊が出る」

夏の盛。

じつとりした熱気に包まれたある晩、私は友達と五人で花火大会へ出かけた。

駅でまち合わせして、河川敷へ歩く。

花火が始まる前に晩ご飯と飲み物を買いに行こうという話になつたのだが、全国的に有名な花火大会だからかどこの露店もすごい人混みで、並ぶだけでも苦労しそうだった。友達の一人が靴ずれをして足が痛いと訴えたこともあり、買いに行くものと残るもので分か

れることにした。

私は買い出し組になり、明里という友達と一人で人混みへ入った。アイドルみたいな雰囲気のある、華やかでお洒落な子だ。この日も大きな髪飾りがピンクの浴衣によく似合っていた。

花火を観るポイントと露店は離れており、けつこう歩く。やがて、ものすごい渋滞に入ってしまった。
道が満員電車みたいなのだ。

視界がすべて人で埋まつていて進む速度も遅いが、ここを抜けないと露店へ行けない。

早く座つて花火を観たかった私はちょっとでも先へ進もうと躍起になつていた。

前方へ進めそうなスペースができたので、「あそこへ行こう」と明里をふり返る。

同時に彼女に手をつかまれた。

「引き返そう」

「えっ」

せっかくここまで来たのに。お腹も空いたしのども乾いたし。

そう思つたが、次の言で頭が冷えた。

「こんな所にいたら将棋倒しになる」

いわれてみれば。

周囲は満員電車もかくやと言わんばかりだし、彼らは前へ進みたくてイライラしている。

私も彼らと同じだったわけだが、こいつの状況で理性的に物事を考えられる彼女は賢いなあ、とちょっと尊敬したのを覚えている。

普段から明里は賢いが。

私は友達に手を引かれるまま、元来た道を引き返していった。
しばらく歩いて、

「晩ご飯どうしようか。遠くの夜店に行つてみる?」

他の友達の分も頼まれてひとつぶやくと、よつやく彼女が足をゆるめる。

「あたし、今から帰ろつかなあ」

「え？ なんで？」

いつの間にか、明里はひどく青ざめていた。

「ひなちゃん、今どこ通つてきたか覚えてる？」

「どこつて……」

ついふり返る。

後ろにさつき通つてきたばかりの道がある。
大きな鉄橋の下で、他の場所より一層うす暗い。
そこにはだれもいなかつた。

今の今までおぼろげに見えていたはずの露店の灯りや、上に飾ら
れていた提灯もない。

少し目を離したすきに、花火会場から外れたどこかへ迷いこんで
しまつたかのようだ。

「……さつきまで、いっぱい人がいたよね？」

ずっと人の川が続いているかのように、道の先まで人で埋まつて
いたはずだ。

「あたしにはみんな黒こげに見えたけど

背筋が寒くなつた。

その後、まつていた友達には「すごい人混みで買えなかつた」と
だけ告げ、花火を鑑賞してからファミレスで食事をして帰つた。

帰り道にはなにもおこらなかつた。

ただ、あのとき明里が「引き返そう」といわなかつたらどうなつ
ていたのかと考へると、しばらく夜に出歩く氣にはなれなかつた。

「変なとこ行つただる」

家庭教師の日、来るなり高橋さんが指摘した。
なにも話していないのに確信に満ちていて、「やーいやーい」と
はやしたてそうな笑顔だ。

「　　の花火大会に行つただけだよ。変な目にはあつたけど詳しく話すと、

「ハイハイ、あそこね。あの鉄橋の下のとこだり。俺も行つたことあるけどあそこよく出るよ。知らなかつた？」

そんな事をいわれて絶句する。

大学にトイレに河川敷までそつなんて。

「全国、心靈スポーツだらけじゃん……！」

「うん、幽霊なんてそこらにいるよ」

私の宿題をパラパラめぐりながら、高橋さんが笑う。

「ひなだけだつたら何もなかつただろうけど、たぶんその友達がひかれやすい体質なんだろうな。でもその子が引き返してくれたんだから、イイお友達じやん？」

「うん」

私の名前は”ひなた”だが、高橋さんは”ひな”と呼ぶ。呼びやすいのかわからないが、友達にもそう呼ばれることが多かった。

「次のカテキヨまで怪談はやめといた方がいいな。怖い話は読むのも聞くのも観るのも禁止。楽しいことだけ考えな」

バシ、と高橋さんに軽く背中をたたかれた。

「あとは……怖かつたら窓に塩盛つとけ

だんだん不安になつてくる。

あれからなにもないけれど、実は危なかつたりするんだろうか。

「自分の部屋だけでいいの？　ていうか何かいるの？」

「この部屋だけでいいよ

「なにかいるの？」

「次くる時まで怖い話は禁止つていつた」

そんなこといわれたら余計気になる。

不満げな視線を送ると、高橋さんはぽつりといつた。

「茶、飲みすぎ」

彼が来てから約30分。

その間に私はお徳用ペットボトル一本分の麦茶を消費していた。

「何かあつたら電話しておいで」
授業が終わつたあと、不吉な言葉とともに高橋さんは帰つて行つた。

「怖かつたら盛り塩」とこいつとは特にせりなくても問題ないだろうと判断して盛り塩はせず、楽しいことをじるといわれたので、その夜は友達に借りたDVDを観ていた。

あまり興味のないドラマだったが観てみると面白く、気づけば夜中の一時四十分になつていた。

部屋にテレビがないのでパソコンで観ていたのだが、いきなり部屋の電気だけがフッと消えた。

モニターの光だけが目に焼きつくる。

DVDは何事もないかのように再生されている。

反射的に肩がはねたものの、すぐに電気のスイッチを押す。

部屋の電気がついた。

電球の接触が悪いんだろうか。そもそも換え時かもしれない。

そんな事を考えて、その日は切りの良い所までDVDを観て寝つた。

「ン、ン。」

恐怖を覚えたのは翌日の中だった。

いつも眠ると朝まで起きないのだが、その日は「」からかノックの音がして夜中に目が覚めた。

まだ眠たいので構わずに目を閉じていたら、「ンー」とひときわ大きな音。

少しイラッととして目を開けると、暗い室内で時計の針だけがぼんやり光っていた。螢光塗料がぬられたそれは3時前くらいを示している。

辺りを見回すと、真横から「ン、ン」。

それはベッドの真横にある窓の外から聞こえてきていた。

「……」

背中がヒヤリとする。

私の部屋は一階にあるし、窓の下に足場もないから人間じゃない。ふと「幽霊的なものが外から窓をノックしていたらどうしよう」と嫌なことを考えてしまった。

でも、今は夏だ。カブトムシやカナブンが窓に体当たりしているだけかもしれない。

そうは思つてもカーテンを開けるのが怖かった。

まともに幽霊らしきものを見たのはあの花火大会が初めてだし、それすらもよく覚えていない。今までそんな感じだったんだから、これからも幽霊を叩きする可能性は低い……と思いたい。だいたい行きたくて心霊スポットに行つたわけじゃないんだし、祟られる覚えもない。

でも、万が一窓の向こうに嫌なものが見えたらい。それが虫じゃないことが確定してしまつたら。

「ン、ン。」

音はずつと続いている。

私はそつとベッドをぬけだし、壁にある部屋の電気のスイッチを押した。

つかない。

ぶわっと嫌な汗をかいた。

力チカチ、カチカチ、カチカチカチカチ。

何度も何度もスイッチを押すが、反応がない。

パニックになりそうになつて、昨夜のことを思い出す。

単に電球が切れただけだ。他の部屋の電気ならつくかもしれない。だが、この状況でドアを開けて真正面にあるトイレを見るのが怖かつた。

怖い話にトイレはつきものだ。

しかも、この前の「トイレに出るという逆さづりの女」が頭に浮かんでしまつて余計怖い。いくら何でも自宅のトイレには出ないことくらいわかつていてるが、怖いものは怖い。

かといって、窓のそばのベッドで寝直す度胸もない。

かなり迷い、ためらつたあげくにドアノブに手をかけた。廊下はまつ暗だが、すぐそばに両親や姉のいる部屋がある。姉をたたき起こして一緒に寝てもらおう。

そう思つていたのに、ドアは開かなかつた。

私の部屋にカギはついていない。

たてつけが悪いわけでもない。

ドアノブが動かないのだ。

それも奇妙な感触がする。力加減によつて動く範囲が違う。軽く手をかけただけだとぴくりともしないが、思い切り力をこめると一瞬ドアノブが動いて、その後すぐに戻されるのだ。

まるで、だれかが外からドアノブを押さえているみたいで気持ち悪い。

もう泣きそだつた。

大声で助けを呼ぼうか。でも夜中だし。緊急事態ということで。いやでも大声を出したら逆に窓やドアの外にいる何かからリアクシ

ヨンがあつて怖いかもしれない。

「……」

どうしようもなく、私は壁を背に座つて窓を見ながら朝をまつた。窓にはカギがかかっているが、ドアから入つてこられたら怖いのでドアの前にはイスを置いた。

やがて外が明るくなり、新聞配達の音が響いてくる。

気がつくと窓の音は消えていた。

おそるおそる電気のスイッチを押す。

普通に電気がついた。

電球も切れていないうらしく十分明るく、点滅するような様子もない。

イスをどかして部屋のドアノブに手をかける。

今度はちゃんと開いた。

もう、大丈夫だ。

部屋のカーテンを開けた。

窓はすすだか土だか、得体のしれない茶色いもので汚れていた。

それから姉のベッドにもぐりこんで眠り、昼^{ひる}高橋さんに昨夜の出来事をメールした。

「水とか線香とかお供えしたほうがいいかな？」

明里が「みんな黒こげに見えた」といつていたのと、あれからずつと異様にのどが渴くのは何か関係があるかもしれないと思つたからだ。窓についていた茶色い汚れも気になる。

火事か何かで亡くなつた人たちが憑いてきているのでは？　というのは考えすぎだろ？

高橋さんからの返信は。

「仮に水が欲しくてたまらない100人がいたとして、その内1人だけに水をあげたらどうなると思う？　一生そういうのとつき合いつ

たいなら別だけど、そういうのなら何もしない方がいい。全部た
だの気のせいだと思え」

との事だったのでお供えはやめておいた。

夜は姉に事情を話し、一緒に寝させてもらひつもりでいたのだが、
「今日から友達とキャンプ行くから。グッドラック!」

そんな一言で薄情者は午後にはいなくなってしまった。

こうなつたらお母さんと……と思つたものの、中学生になつてま
で母親と一緒に寝るのはいかがなものか。

結局、廊下で暑そうにのびていた愛猫チャロを拉致してリビング
にこすわった。

トライ模様のオス。おデブだがだれにでも愛想のいい、かわいいや
つである。

念のため、自分の部屋とリビングの窓には塩を盛つてある。

あられもない格好で眠るチャロを横目に、私は安心して「メディ
アドラマを観た。

深夜の2・3時が怖いと感じるようになつて、早く寝るつ
もりだったのだが、夏休みで少し体内時計が狂つていて寝つけず、
そのまま2時を過ぎてしまった。

軽く緊張しつつ、チャロの腹をなでる。

こちらの心境などお構いなしに笑うドラマの俳優の声と、時計の
音だけが室内に響いている。

……なにもおきない。

一応3時を過ぎてから眠るうか、とうとうとしていたとき、唐突
にテレビの電源が切れた。

もちろんリモコンには触つていない。

十歩くらい離れたテーブルに置いていたリモコンをとつてスイッ
チを押す。

テレビがついた。

が、リモコンをテーブルに戻したとたんにまた消えた。

だんだん背中がぞわぞわしていく。

電源のついていないテレビのまつ暗なブラウン管に幽霊が映っていた、なんて怪談でよく聞く話だ。嫌だぜつたい見たくない。

リモコンから電池をぬき、直接テレビをつける。

今度は消えなかつた。

が。

「ニヤアン」

床で万歳して転がつていたチャロが、リビングの窓に向かつて鳴いた。

この猫が家の外へ遊びに行くのは日常茶飯事だが、鳴くのは珍しい。外へ出して欲しい時は無言で足に身体をすり寄せるか、人の手に自分の鼻をタッチしてくる。そういう風に教えていた。

チャロはじいつと窓の外を見つめている。

今夜は一人じやないし、と勇気をだしてカーテンをめくるがそこにはなにもない。墨をぬつたよつた暗闇にうつすらと外の景色が映つていてるだけだ。

チャロを抱き寄せ、テレビをつけたまま毛布を被つた。

暑かつたせいかチャロはすぐ床に逃げたが、それから奇妙なことはおこらなかつた。

……そう思つていたが、朝日をさますと母が青ざめた顔つきでベルンダに塩をまいていた。

ベルンダはリビングの窓を開けてすぐの所にある。

「なにやつてんの？」

問うと、母がそそくさと中へ入つてくる。

「チャロを外に出そうとして窓を開けたら、一瞬ベルンダに黒い影がいたの」

あ、やつぱりいたんだ。

彼女には家庭教師に靈感があるらしいことも、我が家で怪奇現象がおこつていることも知らせていない。けれど、母は幽霊を見るのが嫌で毎晩電気をつけて寝るほどで、過去にも何度も幽霊を目撃したり予知夢らしいものを見たりして、いたので納得した。

その晩は怖いことはおこりず、翌日の方に高橋さんが授業にやつてきた。

「どうだつた？」

私の部屋に入るなり、面白がるよつて問う。

「ちょっとあせつた」

数日間の冷や汗体験を話すと、少しつまらなそつといふか、ひょうしぬけしたよつな顔をした。

「ひなはホント見えないんだな。一度ヤバめの心靈スポット行ってみるか？見えるようになるかもよ」

「ぜつたい行かない

そもそも見たくない。

速攻でお断りすると彼はおもむろに席を立ち、イスの後ろに回つて背もたれを片手でつかんだ。

「なに？」

「背もたれがひなの肩な。このまえ来たとき、こんな感じで黒こげの骸骨がひなをつかんでたわけ。で、それを」
もう一つの手でバシッとふり払う。

「こんな風にしたから怒つて微妙な出来事をおこすよつになつたと」
「そういえば、花火大会に行つた日の翌日は大丈夫だつたよつな」
…あと、昨日も平氣だつたけど

高橋さんが笑つた。

「お盆が終わつたからな。もうなにもないと思つ」
本当にしばらくなはそつだつた。

私には靈感もちつぽい知り合いが数人いる。

その内の一人、クラスメイトの戸和さんは「他人の守護靈とわが見える」と評判で、軽い占いや靈視もできるらしく、クラスメイト以外にもいろんな人が彼女に頼んでいる姿をたまに見かける。私も他の

子達のように守護霊を見てもらいたかったけれど、仲良くもないのにそんなミーハーな頼みごとをしたら嫌われそうで、頼んだことはなかつた。

ある日、学校の休み時間にクラスの女子だけでカラオケに行こうという話になつた。

友達が行くので私も行くと答え、近くにいた戸和さんはどうするかたずねると、

「私いそがしいから行かない」

愛想よく笑つて彼女はいい切つた。

靈感がある、というと暗い感じの子を想像しがちだが、戸和さんは高橋さんみたに明るくて社交的なタイプの子だ。態度もサバサバきびきびしていて、野球かサッカー部あたりのマネージャーにいそうなイメージがある。

オカルト関係の話題も自分から積極的に語ることはせず、知つている人から問われたときは正直に答えている。ひけらかさないが、かくしもしない。そんな彼女のスタンスがひそかに好きだった。

「そつか、残念」

「行かないほうがいいよ」

小声でささやかれてギョッとする。

「なんで？」

「奈緒美ちゃんが行くから」

奈緒美ちゃんはクラスのリーダーみたいな子だ。私はまだ話したことがない、好きでも嫌いでもない。

「嫌いなの？」

「ちらも小声でこそと問う。

「苦手かな」

それきり、彼女はさつと立ち上がりつてトイレに行つてしまつた。

カラオケ当日。

店内で一時間ほど過ごしたころ。

何回目かに奈緒美ちゃんが歌っていたら、だれかが「気持ち悪い声がする」といい出した。

「歌声が気持ち悪いなんて失礼な」と冷や汗をかいだが、明らかに奈緒美ちゃんではない声が曲に混じっているのに気づく。

「おおお」だか「あああ」だか知らないが、男とも女ともわからない奇妙なもの。

クラスメイトたちは小声でざわつき、友達の沙也は頭を押さえてうずくまってしまった。

明里は今日他に用事があつたので来ていないが、沙也は明里と同じくらいよく遊ぶ子だ。

ボーカルシユな外見でたまにきつい物いいをする」ともあるが、友達思いで面倒見がよく、サバサバしている。

「大丈夫？」

「……頭いたい」

それきり、黙りこんでしまう。

彼女を介抱、というかただ単に見守っていたら、他のクラスメイトが奈緒美ちゃんに声をかけて曲を止めた。

「なに？」

彼女が首をかしげると同時に、ハッキリ不気味な声がした。

「ナーオー、ナーオー、ナーオー、ナーオー、ナーオー」

奈緒美のナオ？

その野太い、間延びした声は彼女を愛称で呼んでいるように聞こえた。

私をふくめ、室内にいた全員がぞつとこおつづく。
声は一度かぎりではなく、ずっと続いている。

ふと、ネコのおたけびに似ていると思つた。つかのチャロもたまにこんな声をだす。

だれかが奈緒美を呼んでいるわけではなく、野良ネコが迷いこんでいるか、機械の故障かもしない。

他にもそう思つた者がいたらしく、9人のうち2・3人が声のするあたりへ寄つていつた。部屋の右隅あたりからのようだが、そこにはなにもない。私も後ろからのぞきこんだけれど、壁しかなかつた。

隣に部屋はないし、外にいるのかもしれない。

「ちょっと壁の反対側みてくる」

そう告げると、沙也がついてきた。

「大丈夫？」

「外のほうがマシ」

そういうものか。

壁の反対側はただの廊下で、ネコも何もいなかつた。

沙也が「このまま廊下でまつてゐる」というので荷物をとりに部屋へ戻ると、さらにパニックがおきていた。

「テレビに逆さまの女が映つた！」

”女幽霊は逆さまでなければならない”といつ法律でもあるんだろうか。

一人でいるときにこんな状況になつたら泣きわめくけれど、あいにくその場には私をふくめて八人もいたのでまつたく怖くなかった。ちなみに、すでにさつきの声は消えていた。

クラスのみんなが店員を呼び、部屋の前でさつきの怪異について説明する。

店員は「今までこの部屋でそんな現象がおこつたことはない」と責ざめて他の部屋を使うかどうか聞いてきたが、もちろん満場一致で否決され、そのまま帰宅することになつた。

今まで冷静でいられたが、そこからはとても落ちつけなかつた。バス停や駅で沙也やクラスメイトと別れ、ついには奈緒美ちゃん

と「入りきりの帰り道になってしまったからだ。

その頃には「戸和さんがいっていたのは奈緒美ちゃんの性格じゃなく、彼女に憑いてる変なものかもしれない」と思い始めていたので、何とも背中がぞわぞわする。

けれどクラスメイト相手にだんまりを決めこむわけにもいかず、口を開いた。

「今日なんか怖かったね～。お祓いとか行つたほうがいいかもね」

「は？」

「怖かつたね」

奈緒美ちゃんは嘲笑するように口元を歪めた。

「あんなのだれかのイタズラに決まつてんじやん」

保月さんつて騙されやすそー、と。

「……イタズラって、どうやって？」

「知らない」

それきり口を開かず。

まあ信じていらないなら放つておこうと、私も黙っていた。

しばらくして電車を乗り換えたあと、ホームで「じゃあね」と簡単な挨拶をして別れ、ほつと一息をつく。

同時に肩をたたかれて、心臓が飛びだしそうになつた。

「あの子、友達？」

バイク帰りだろうか、高橋さんが背後に立つていた。

まさか家庭教師の授業以外で会うとは思いもしなかつたが、考えてみれば彼は自宅から通勤しているのだから、そう遠くない場所に住んでいるだらつし、地元を歩けば遭遇する確率はそれなりにあるのだ。

「ぐ、クラスメイト」

「ふうん。仲いいの？」

「いや、全然。クラスで遊びに行つたら帰り道が一緒になつて……」

高橋さんが笑つた。

「ならいい。なにやらかしたか知らないけど、あの子ヤバイもんが

憑いてる。あんま関わるなよ

戸和さんと同じものを見たんだろうか。

「なにが見えたの?」

「え? 聞いちゃう? それ聞いた?」

高橋さんはたまに変なテンションになる。

「なんだろな……人じやないかも」

すつと片手で駅名が書かれた看板を指す。

天井からつらっているそれはだいたい2、3メートルくらいの高さだろうか。

「背があれくらいで、全身まっ黒で、首と手足が異様に細長くてボキボキしてんの。ヤバそうだつたから顔は見てない。それがこんなかがんで、三角座りするみたいにして電車のりこんで、あの子についてつた」

それと関係があるかどうかはわからないけれど、あのカラオケ屋の前で鳥の死骸が大量に発見されたり、奈緒美ちゃんが学校の階段から落ちて腕を骨折したりした。

彼女とは違う高校へ行ったので、その後どうなったかは知らない。

小学生のころ。

夏休みに祖母の家へ遊びに行き、近所の川で泳いでいたら、父がつけもの石くらいの大きさの石を持ってきた。

全体的に白っぽくてごつごつした横長の石で、そんなに重くはない。

「見てみろ、これ水晶だぞ!」

いわれて見てみると確かに石の一部に橢円形のくぼみがあり、その中にはガラスにも似た半透明の石ができている。

日本の川で水晶ができるのかは知らないが、確かにそれは限りなく水晶に似ていた。

父はウキウキとそれをもつて帰り、「満悦だつた。

その翌日。

親戚の結婚式に家族で出席したのだが、父と姉が食中毒で倒れた。ちなみに同じ料理を食べた私と母、祖母など他の出席者はなんともなかつた。

二人とも点滴をして一、三日くらいで回復したのだが、そのあと姉が川で溺れて岩にひつかかり、足から流血。父も夏風邪を引いて高熱を出した。

それなりに心配してはいたのだが、二人の看病は母と祖母がしているし、たまに様子を見るくらいしかやることもないのヒマをもてあまし、私はフォーティーワンゲームで遊んだり従兄弟と宿題を分担したりしていた。

さらに一日ほど経つた夜、部屋でたまたま荷物を整理している時にあの石を見つけた。

うちに持つて帰るつもりらしく、バケツの中に入れられている。私もこの石を気に入っていたので、なんの気なしにとり出してながめた。

これまでも川や移動中の車内などでうつとりとながめており、その度に綺麗な水晶だと思っていたのだが……どうしてか、その時はちつとも綺麗に見えなかつた。

まるで石に寄生虫の卵がくつついでいるみたいに気持ち悪い。

こんな不気味な色をしていただろうか？ まつ白で透明がかつているのは変わらないが、なんだかガラスに入ったクモの巣みたいにも思える。

これをまた車に載せて家まで持つて帰るなんて「冗談じやないと、こつそり近くの空き地に捨ててしまつた。

まつからで灯り一つない夜道を引き返す間、気のせいか草むらに置いてきたあの石に見られているような、あるいは石が追いかけてくるような妄想に襲われて、家まで走つて帰つた。

関係があるかは定かでないが、次の日ようやく父の熱が引き、だ

いぶ調子も良くなつたので自宅に帰ることになつた。

本当は念のためもう一日滞在したいところだが、仕事の都合でこれ以上いられないらしい。

荷物を車につめこむ最中、バケツからあの石が消えたことに気がついたはずなのに、父はなにもいわなかつた。

順調に成績が上がつて親に喜ばれたり、テストでケアレスミスをしてしごかれたりしていた9月。

いつも通り私の部屋に入り、授業をはじめるまえに高橋さんが「ごそごそとぬいぐるみをとり出した。

抱き枕にできそうな感じのでつかいやつで、ふわふわしている。別に誕生日でもなんでもないのだが、昨日たまたまゲーセンで貰たのでくれるそうだ。

「ありがとう」

かわいいやつだし嬉しいけど、ちょっと背のびした1年生の中学生としては子供あつかいは面白くない。

複雑な心境でぬいぐるみをいじつていると、高橋さんが意外そうに聞いた。

「趣味じゃなかつた?」

「趣味だけどね」

ぬいぐるみを本棚の上にかざつてみると、少々バランスが悪い。これは枕にしよう。

ベッドの上にぽんと置くと、高橋さんが爽やかに笑つた。

「じゃあ今日は人形の怖い話な!」

「やめて」

まさか「怖いわくつきじやないだらうなと身構えたが、「冗談だつたらしい。

代わりにチケットをわたされた。

「うちの大学で学園祭やるんだけど、良かつたら来る？」

大学の学園祭は思つていたより派手で盛大なものだつた。

客で賑わい、花火大会なみの人混みができる。

入り口でゲストシールとパンフレットをもらい、ぶらぶらまち合わせ場所へ行くと、高橋さんとその友達らしい青年が三人いた。

しまつた、友達誘つてくるんだつた。

後悔しつつ声をかけると、案の定四人ともこちらにやつてきた。

「けつこーこここの本格的だろ？」

と高橋さん。

他三人もほぼ同時に声をかけてくる。

「ちつちやいなー。うちの妹より可愛いわ」

「これが三年くらいしたらJKになるのか」

「暑かつたる。ジュース券をあげよう」

元々人見知りするタチだが、でつかい大人四人に囲まれると威圧感というか迫力があり、逃げ出したくなる。

高橋さんと三人のうち一人はわりと女顔というか、中性的な外見だからまだ平氣だけれど、他二人はけつこうゴツイので特に緊張する。

「カテキヨの生徒なんだつけ。こいつ、教え上手だろ。1聞いたら10も50も教えるからな。話長いんだ」

「わかりやすく教えてもらつて助かつてます。優しいし」

答えながら背中を冷や汗が伝う。

「正直に”あの人面倒くさい”つていつていいよ」

三人がどつと笑う。

「おまえらもう助けてやんねー」

高橋さんが笑つて私の背を押す。

「じゃあ、後でな」

ずっと五人で行動するのかとヒヤヒヤしたが、そうではないとわかつて内心胸をなで下ろした。

三人とはそこで別れ、たこ焼きをおごつてもらつたりミニゲーム

に参加したり、うつかり忘れていた例の幽霊がよく出る教室に連れて行かれたりと学園祭を満喫した。更に怖いというトイレは全力で拒否した。

和風喫茶で一息ついたとき、高橋さんがほほえんだ。

「次、お化け屋敷行こう」

行つたことがないので興味はある。

たぶん暗い部屋にいくつかハリボテが置いてあって、物陰にお化け役の人がかくれているとか、そんな感じだろう。

「うん、行く！」

貞子みたいな格好しても、人間なんか怖くない。と思ったが全然そんなことはなかつた。

お化け屋敷が本格的すぎたのだ。

わくわくと入り口の黒いすだれをくぐつて、足が固まる。

第一の部屋は、本物そつくりのお札で埋めつくされていた。

暗い室内が赤いライトで一部だけ照らされていて、よく見ると心霊写真まではつてある。マネキンの首や人形など不気味な小道具が転々と置かれ、BGMはお経で、気味の悪いDVDがえんえんと映されている。

進路の先にはお化け役の人間がすすり泣いてうずくまっているのだが、それが超怖い。なぜって、アレが人間なことはわかりきつているが、先へ進んだら確実に追いかけてくるのもわかるから怖いのだ。しかもその道がやたら細く、天井からも邪魔な障害物がぶら下がっている。一人連れの客の場合、後ろを歩く人間はアレに捕まるに違いない。

「私先行く」

「いいよ」

予想通りアレが奇声を上げながら猛ダッシュして追いかけてくる。

私もダッシュで逃げたが、高橋さんはお化けに捕まりながら「たしか何回か同じ講義受けたことあるよね」などと楽しそうに話しかけていた。その後も網をくぐつたとたん不気味な音声が流れる廊下とか、笑う人形など様々な難所をぬけ、5分後には足がガクガクし、大変すずしくなっていた。

お化け屋敷なんか一度と行かない。

そんな決意を新たにして先へ進むと、最後の部屋にあつたのはエレベーターだった。

特にこれといった装飾もなく、脅かす人もいない。

ただずつとドアが開かれている。

これに乗つて他の階へ移動していくださいといつ事だらうか。

「これに乗るのかな？」

高橋さんは「さあ？」としうだけで、進む気配がない。

先に見えている出口っぽい所へ行くかエレベーターで移動するか、私が決めていいようだ。

軽く前のめりになつてエレベーターの中をうかがうが、なんの変哲もない。それでもなにか仕掛けがありそうで怖くて、結局入らず出口へ向かつた。

が、出る前に高橋さんに呼び止められる。

「ひな、もう一度エレベーター見てみな」

ふり返つてギョッとした。

いつの間にか、エレベーターの扉が閉じている。

高橋さんはずつと真後ろにいたので、エレベーターのスイッチを押したりはしていない。

しかもその扉には『学園祭中使用禁止。このエレベーターを使用しないでください』と書かれた紙がはられていた。

「変なしけだね」

「これに繋がつてるエレベーターは他の階でも使用禁止になつてゐるんだ。汚いエレベーターを見られないようにするためと、あとチケット持つてない客がここからお化け屋敷に入らないために。……なのこじうしてドアが開いてたと思つ？」

嫌な予感。

「演出のためじゃないの？」

目の前でエレベーターのドアが開いた。

だれも乗つていない。

「じゃあ、今一人でにドアが開いたのはどうしてでしょう?」

エレベーターをずっと開けっぱなしにしておくことは簡単にできても、自動的に開けたり閉めたりするようになんて、まして遠隔操作なんてこの古いエレベーターができるとは思えない。

「……まさか」

「そ。このエレベーター、でるつて評判なんだ」

パキン、と天井が大きくきしむ。

私は走るようにしてお化け屋敷を出た。

出口でお清めの塩を受け取つて、周囲に人がいることに安心していたら、高橋さんがニヤニヤしながらやつてきた。

「大丈夫、あんなの全然ヤバくないから」

いわく、その筋でちょっと有名な人がここのお講師について、その人が監修したお化け屋敷なのもあって本物が3、4匹まぎれこんでいたという。だがどれも危険なものではないので大丈夫だ、と。

「心靈スポット嫌いだつていつたじゃん……」

「なんで? 怪談は好きだろ? 慣れれば樂しいって」

「楽しくない」

もちろん、この大学には一度と行かなかつた。

一時期、学校で”失神ごっこ”という遊びが流行つた。

一人の鼻と口をふさいで心臓の辺りを10～20回強打するという悪趣味なものだ。たいていはなにもないが、ごく稀に失神する者がいるのが面白いらしい。

私も友達もこの手の遊びは嫌いなので話題にもしなかつたのだが、運悪くそういうことが好きな連中に目をつけられ、一人で行動している間に空き教室に連れこまれ、一人がかりでやられてしまった。

「……っ」

床に座りこんだまま深呼吸する私の頭上で笑い声が響く。

「失神しないね」

「力がたりなかつたんじやない?」

「あたし握力あるんだけどなあ」

「ざんねーん。チャイム鳴つたし、いこ」

「ばたばたと楽しげに去つていく。

他人をオモチャとしか見ていない価値観が信じられなくて、ショックでしばらく呆然としてしまつた。

幸い一人とも女子だったので力が弱く、ちょっとと息苦しいだけですんだのでだれにも言わなかつたが、なぜか高橋さんにはバレてしまつた。

「なんか危ない事しなかつた?」

私の部屋で問題の解説をしている最中、なんの前触れもなくいきなりこれである。

靈感もち怖いとちょっとと思つた。

「してないよー」

正確にはされたわけだし。

いじめられたなんて恥ずかしくていえない。命に関わるような事ならいう決心もつくが、あれ以来たまに問題児一人が嫌味をいつてくるくらいで、特に害もない。放つておけばそのうち声をかけてくる事もなくなるだろ?と思われた。

「ならないけど」

高橋さんは心なしか私の背後を見つめて、つぶやいた。

それから一週間くらいしたころ。

私に失神ごっこをやらかした一人が一ヶ月の停学処分になつた。うちの学校は屋上が施錠されているが、屋上の扉までの階段は普通に登れるし、そこまでは滅多に人が来ない。

そこに他のクラスの生徒を連れこんでまた強制失神ごっこを行つたところ、よろけたその子が階段から落ち、鎖骨が折れたらしい。

そこまで被害が出たのは一人だけだが、他にも被害者がいるのでけつこう内申に響くのではとクラスで噂になつっていた。

私がすぐ先生にチクつておけば彼女は被害に遭わなかつたかもしない。

「……」

少し反省して「実は私も失神」ひこやられました」と担任にチクつたところ、通りすがりに立ち聞きした沙也が「なんていわなかつたの!? PTAにもチクつてあいつら退学に追いこんでやれ!」と怒つてくれた。

先生は、

「いや、退学は……人生変わっちゃうか?」
とかモゴモゴしていた。

次の家庭教師の日、

「よかつたな」

家に来るなり高橋さんがそういうつて、授業をはじめた。
まったく説明していないので、全部見透かされていたような気がする。

ある晩、夜中の3時ごろに崖から落ちたように全身がビクツンとなつて目が覚めた。

最近部活でいそがしいから疲れてるんだ、と氣にしなかつたけれど、次の夜は気持ち悪い夢を見て、その直後に同じようにしておきた。

内容はすぐ忘れてしまつたが、ハエが視界いっぱいに広がつていたような気がする。

次の日もまた3時ごろに飛びあきた。

夢はまた忘れてしまつたが、今度は拷問されたようなひどい恐怖感に襲われ、目が覚めてしまはくは肩が震え、あまりに怖かったのでそれからずつと電気をつけておきていた。

次の夜は泣きながら飛びあきて、自分の顔が涙でぐしょぐしょな

のが”漫画みたいだ”と思つた。

次は、夢の中でずっと悲鳴を上げていた。それでいて妙に息苦しくて、叫びながら口をパクパクしていたら現実で少し口が開いて目が覚めた。

そんな状態がだいたい一週間近く続いて、私は高橋さんに相談した。

「もつと早くいえばいいのに。俺はてっきりテスト前だから無理なつめこみ勉強してんのかと」

宿題を広げた机を前に腰かけ、彼が心配そうな視線を投げてくる。

「テスト前日なら徹夜するけど、一週間前から徹夜なんてしないよ」「……テスト前でも徹夜なんかしないといつて欲しかつたんだけど。俺が出した課題を毎日きちんとこなして学校の授業を真面目に受け予習復習宿題さえやっておけばテスト勉強なんてする必要はないんだからな？ テストってのは今までの総復習にすぎないんだから、もつとつきつめれば必要な公式覚えて応用解けるようになれば長いお説教が終わつたあと、高橋さんは目を細めた。

「なんか罰当たりなことしなかつたか？」「予想もしなかつた言葉だ。

「え……まったく心当たりないけど。神社もお寺もお正月くらいしか行かないし」

高橋さんがしかめるようにして目をこらす。

目が悪いのだが、ギリギリ眼鏡をかけなくてもいいレベルなので裸眼でがんばつていてるそうだ。

「でもこれ神様っぽいぞ。すげー見えにくいしその辺の靈じゃない神様！？ もしかして、うちの神棚にもお正月くらいしかお参りしないから？」

我が家にはささやかな神棚があるのだが、手入れは母が毎日していて、私はまったく手をつけていない。

「違う。でも神様ってのは神社でぼろつと悪口いっただけでも祟るからな。なんか、そういう些細な事したんだ」

「神様の悪口なんて……あ

「いったのか」

高橋さんがニヤリとした。

「あー……いや、悪口じゃないけど、心当たりが……」

非常にいいにくい。

が、相談しておいて打ち明けないわけにもいかず、白状した。当時私は友達数人と交換日記のような要領でノートに漫画を描いていたのだが、適当に考えたキャラの名前が日本神話にでてくるとある神様の名前と被っていたのだ。友達にそう教えてもらつたが、かえつて箱がついて良いかもとそのまま使つていた。基本的にカツコイイキャラとして扱つてはいたが、ノリツツ「ミミの描写でそのキャラを「ウザイ」と描いたりもした。

高橋さんはしばらくお腹を抱えて大爆笑していた。

「なんだコレ、交換日記は聞いたことあるけど、今の子つて交換で漫画描いたりすんの!? コレか、ひなが描いたのコレか!?」

某幼女向けアニメが好きな大学生にそこまで笑われるすじあいはないと思う。

散々からかわれた後、しびれを切らして私はたずねた。

「……あの、それでコレ、どうすればいいの?」

「ん

ひょいと消しゴムをわたされる。

「これで神様の名前書いたとこ全部消して当たり障りない名前に書き換えな。あとは寝る前にゴメンナサイしとけば十分」

「神社に持つて行つたりしなくていいの?」

「うん。へーきへーき」

本当に、たつたそれだけで悪夢を見なくなつた。

宝石商の育て方

少し肌寒い季節になつたころ。

「宝石商の育て方つて知つてる?」

家庭教師の授業中、高橋さんが妙なことをいい出した。

「知らない」

「商人の中でも特に宝石を専門にあつかうやつを宝石商つていうのはわかるよな? 宝石商は本物と偽物の宝石の見分けがつかなきやいけない。だから商人が後継者を育てるときは、小さじころから本物の宝石だけ見せて育てるんだ。そうして大きくなると、偽物を見たときに”これは違う”と一目でわかるようになる」

「へー、面白い」

偽物を見分けるにはまず本物を知れ。

これはどの業界にもいえそうだ。

「そうそう、今度の土日空いてる?」

「空いてるけど、なにすんの?」

高橋さんがにっこり笑う。

そういう顔をされると某男性アイドルによく似ていて、なんでもいうことを聞いてしまいそうになる。

「知り合いと車で出かけるんだけど、ひなも来る?」

が、このまえ痛い目にあつたばかりだ。

「やめとく。心靈スポットだつたら嫌だし」

「あーたーりー。じゃあ土曜日の昼な。昼間なら大丈夫だろ」

「嫌だつつてんじやん! 知り合いさんと楽しんでおいでよ」

「俺、そいつ嫌いなんだよね。一人っきりとかありえねー。なんの拷問だよ」

高橋さんから笑顔がひつじんぢよつと驚いたが、流されるわけにもいかない。

「なんで嫌いな人と出かけるの。断るか、他の人誘えばいいじゃん。

高橋さん友達多めだし

「ひながいい。このまえふるふるしてて面白かったし」

「こつちは笑い事じやなかつたとこ。」

高橋さんはからかうように笑う。

「いつも助けてあげてるだろ?」

土曜日の昼すぎ。

お守りやパワーストーンをカバンに忍ばせて渋々まつていると、

知らない車が迎えに来た。

いつも高橋さんは車でうちに来るので、てっきり彼の車で行くのかと思っていたが違うらしい。

運転手は高橋さんの知人遠藤さん、助手席に一人と同じ大学の山田さん、後部座席に高橋さんと私が乗った。遠藤さんはチャラくて筋肉質だけどモテそうな感じの男性で、山田さんは”美人秘書”というイメージがぴったり似合いそうなスタイル抜群のセクシー美女だった。

「四人で行くことになつたんだね

こつそり聞くと、

「俺も聞いてなかつた」

俺と二人でなんておかしいと思つたけど、と高橋さん。

どうやら遠藤さんはオカルト好きの山田さんをぐぞくのが目的のようだが、万が一怖い目に遭つたら嫌なので高橋さんを強引に呼んだらしい。

「それで、今日はどこ行くの?」

「トンネル」

心霊特集などでよく聞く場所だ。

「必ず心霊写真が撮れるらしいよ」

今までに撮つたやつ見せてあげようか、と山田さん。

「山田さん俺とツーショットで心霊写真とり山田さん
家宝にするから、と遠藤さん。

「いいねー」

メンバーの中では高橋さんだけがそこに行つた事があるらしく、たまに遠藤さんが高橋さんに道を聞いたり、高橋さんが指した行き先の地図を見て山田さんがナビしたりして、だいたい一時間後くらいに到着した。

山道に繋がる古びたトンネルがあり、左右には木が生い茂つていて、少し手前の歩道に緑の公衆電話ボックスが設置されている。車の交通量はかなり少ないので昼間なのに薄暗く、カビ臭い雰囲気の場所だ。

「それじゃ、歩いて中まで行つてみつか

高橋さんがいって、車を降りる。

一人だけ車に残つていようかとも考えたが、昼間だし思つたより怖くないので私も続いた。

直後、

「痛つ

遠藤さんが肩を押されて顔をしかめる。

「大丈夫ですか？」

「ああ、俺つかれやすいからさ～。こつこくるともう、入る前から肩重くなつたり頭痛くなつたりするんだ」

「……そんな体質なのによくきましたね」

ちょっと呆れていると、遠藤さんが笑つた。

「だつて、面白いじやん」

トンネル内では先頭が遠藤さんと山田さん、その後ろを私、そのまた後ろに少し遅れて高橋さんという順番に歩いた。

テレビでたまに見るくらいであまり知らないのだが、もしかして今は使われていないトンネルなんだろうか。

トンネルの中には灯りが一切なく、まづくらというよりまづ黒だ。かすかに見える出口からの光だけがうすすら不気味にさしこみ、

湧き水なのか雨水が残っていたのかわからない、得体のしれない液体が天井の一部からしたたつていて、そのせいか空気も少しひんやりしている。じぶのような匂いが漂つていて、軽く鼻を押さえた。

「怖い？」

追いついて隣にならんだ高橋さんが問う。

「意外と平気。昼間だとあんま怖くないね」

以前友達と行つたカラオケの事を思い出しながら、「周囲に人がいれば結構大丈夫かも」なんて考えていた。

「じゃ、また今度昼間に心霊スポット行くか」「絶対イヤ」

それとこれとは別である。

不意に前方から一人分の悲鳴が響いた。

遠藤さんがなにかを指さして、山田さんはその背にしがみついている。

「どうした？」

高橋さんがゆっくり歩み寄ると、

「そこに変な黒い影が！」

確かに黒い影がいた。

らんらんと緑に光る一つの田で警戒するよつこちらをにらみ、いつでも逃げ出せるように身構えている。

なんていうか……ネコだ。

「ネコだよ」

高橋さんが近づくと、怖がつて出口へ走つて逃げていく。

しつぽをボワボワにふくらませた黒ネコで、とても可愛かつた。

「え、でも今確かにうめき声したよな。男の野太い声で」

「私には聞こえなかつたけど、もつ出よ。怖い」

二人がかけ足でトンネルを出る。

私たちも後を追うと、車の前でまた悲鳴が上がつていた。

窓、ボンネット、ミラーなど、車の大部分に人の手形がつきまくつていたのだ。少しなら気のせいですむが、こんなにおびただしい

量だとなにもいえない。

「すげー！ やっぱ本物だ トンネル」

引きつった顔で写メを撮る遠藤さん。

トンネル内で撮った写メも心靈写真だつたそうで、見せてもらつたのだが、そつちの方はただの光の屈折にしか見えなかつた。

「さすがにコレは光の加減じやないですか？」

「ここ見てみ。顔が映つてるじゃん」

いわれてみれば、ギリギリそう見えなくもないような

コメントに困つて高橋さんに渡すと、チラツと見ただけで遠藤さんへ返した。

「高橋、なんか俺頭と肩がすげー寒いんだけど大丈夫かな？」

「高橋さんつてそういうの詳しい人なの？」

遠藤さんの腕をつかんだまま山田さんが問う。

わざわざこんな所に連れて来なくても両想いなのは。

「ああ、こいつちょっと大学で有名なんだ。親戚が神社やつてるんだつて。山田さんも何かあつたらいいえればいいよ。俺にいつてもいいけど」

「へー、カツコイー。ひなたちゃんも靈感あるの？」

「私はただのつきそいなんで、全然」

苦笑すると、高橋さんが皮肉っぽく口元を歪めた。

「いいふらさないでね。あと俺、金とるから」

何回か相談した気がするが、私の相談料はカテキヨ代に含まれているんだろうか。単に遠藤さんと関わりたくないから、牽制としていつただけのような気もする。

その後はファミレスに寄つて帰宅した。

帰り道私は眠り、高橋さんはPSPで遊んでいた。

遠藤さんは「トンネルの話をしていたら急にコンビニ袋がフロントガラスにぶつかってきた！」と騒いでいた。

後日、家庭教師の時間に高橋さんがたずねた。

「「J」の前のトンネルだつた？」

「んー、昼間行つたからだと思つけど、テレビとかで有名なわりにあんま怖くなかった。でも遠藤さんは大変そうだつたね」

「ああ、あれから三日間”微熱がでた”って大学休んでる」

「へー。靈感ある人は大変だね」

高橋さんがじとりとこちらを見た。

「……なーんで氣づかないかな」

「え？」

物いいたげな視線を送られて考えてみるが、なんのことだかわからぬ。

やがて、盛大なため息とともに頭をなでられた。

「まあ、ひなはいいよ。まだ中坊だし、アレに比べりや現実的だ。でも、他人の話をうのみにしやすいのはちょっと問題だからそこは気をつけような」

「意味がわからないんだけど」

「あんな、この前行つたトンネルは心靈スポットなんかじゃない。ふつつのトンネルなんだ。靈なんかいなかつた」

耳を疑つた。

「え！？ でも、トンネルは本当にヤバいってよく聞くよ？」

怪談好きじゃない人も知つてゐるくらいだし」

「この前行つたのは トンネルの何個か手前にあつた別のトンネル。どういう反応するか見てみたくて、わざと違う場所に誘導したんだ」

おまえだまされやすいぞ、と高橋さん。

「でも、遠藤さんは肩が痛くなつたり変な声聞いたりしたつて、なにか色々いってたよ？ それにさつき熱がでて学校休んでるつて「全部ただの思いこみ。あいつはなんでもかんでも心靈現象に結びつけすぎなんだよ。そりゃ肩に靈しょつて肩が痛くなるやつもいる

よ。でもこの前のはただの肩こり。だいたい、普段からひょっと転んだくらいで幽靈幽靈いつてるやつなんだ」

絶句してしまった。

靈感がある人を何人か知っているので、彼もきっと本当にそういうんだろ?と思つていた。

「じゃ、じゃあ車についてた手形は? 私も見たけど、来たときはあそこまでついてなかつたよ?」

不機嫌そうに眉根を寄せていた彼がようやく笑つた。

「手形なんてさ、だれにでもつけられると思わないか?」

「まさか……」

「皆が先にトンネル入ったすきにパパーッと。あの馬鹿、自分の車汚されて大喜びで写メ撮つてやんの。笑えるだろ?」

「そういえばあの時、高橋さんは少し遅れて入つてきたっけ。

「笑えないよ」

「いいじゃん喜んでたし」

「それより、と高橋さん。

「宝石商の話覚えてるか?」

「覚えてるけど」

「もし、本物と偽物の区別がつかない宝石商がいたらどうなると思つ?」

「店がつぶれるか、クビじゃない?」

現実にはけつこう偽ブランドのバッグや時計が出回つてこるらしいけど。

「じゃあ宝石商じゃなくて、靈能者だつたら?」

「え?」

「本物と偽物の区別がつかない靈能者」

「えーと……やっぱり売れなかつたり、倒産したり

違う違う、と高橋さんが笑う。

「ただのキガイになるんだ」

車おばさん

その日、雨が降っていたせいか髪がうまくまとまらなくて、私は少し家を出るのが遅れた。
けれど走るほどでもないし、ギリギリ遅刻にならないくらいの時間だ。

だからのんびり通学路を歩いていたら、田の前に車が停まって驚いた。

「遅刻するよ！ 乗つて行きなさい」

お母さんくらいの年ごろの、普通のおばさんだ。
知らない顔だけど、近所の人だろうか？

別に急いでないし、少し人見知りの気があるので「どう断れば角が立たないか」と考えながらおばさんを見返して、気づいた。

後部座席に同じ学校の生徒が乗っているなら、声をかけられるのもわかる。自分の子供を送るついでに、というなら。でも車にはおばさん一人だけだ。親切すぎる、と考えるのは勘ぐり過ぎだろうか。
「歩いていいんで大丈夫です」

なんだかうすら寒くて、それだけいつて先を急いだ。

とても親切なだけのおばさんだつたら「めんなさい」と思つたもの、学校についてから「断つて良かつた」と息をついた。

そのおばさんは学校で有名な人だつた。

うちの学校の生徒のお母さんで、たまに遅刻しそうな生徒を見かけると送つてくれる優しい人……だつたらしいのだが、一年前にその生徒が亡くなつてからおかしくなつてしまつた。

毎朝のように通学路に出没して、だれかかれまわす生徒を車に乗せようとする。

乗つても危害を加えられるわけではないのだが、その亡くなつた生徒の名前で呼ばれ、自分の子供のように話しかけられるので気味が悪い。

同じクラスにも5・6人、声をかけられた子がいるそうだ。

……なんともいえない。

それからも何度もそのおばさんに声をかけられたけれど、私は毎回断つた。

そうして、いつの間にかその人を見なくなつたこと。

こんな噂を聞いた。

一ヶ月くらいまえ、あのおばさんが交差点で対向車と衝突して亡くなつた。

なのに、まだあのおばさんが現れる。

けれど、現れるのはおばさんではなくおじさんで、時間帯も朝ではなく夕方なので別人だという噂もある。

共通点は車に乗せようとしていることで、おじさんの車に乗ると帰つてこれないそうだ。

「つていう話が最近学校で流行つてるんだけど、知ってる?」

家庭教師の時に話してみたら、高橋さんが顔を引きつらせた。

「知らない。つてかそれふつーに誘拐犯だろ。乗るなよ? 声かけられても絶対に乗るなよ?」

「の、乗らないよ。おばさんでもちよつと怖いのにおじさんなんて怪しそぎるし」

「おばさんでも乗るな! 防犯ブザーもつて友達と一緒に帰れよ。その話、ちゃんと家の人にしたか?」

「あ、うん。学校で”不審者に注意”ってプリントもらつたから」怪談のつもりでいつたのに真面目に反応されて申し訳なくなり、その話はそれで打ち切つた。

それから一週間くらいあと。

委員会の集まりで遅くなつてしまい、暗い空の下を歩いていた。友達と一緒にたけれど、家が離れているので途中からは一人に

なってしまった。

どうして昼と夜ではこんなに雰囲気が違つんだらう。

まつ黒な夜道がときおり街灯で黄色く照らされるたまは、なかなかコントラストが効いて美しいと思つ。

古くてうす汚れた道路や蛍光灯も退廃的で、異世界に迷いこんだよつな錯覚をおこす。

アリスみたいなメルヘンじやなくて、ダンボールの中に閉じ込められたネズミのごく閉鎖的で、狂氣の匂いがする異世界だ。

「暗いのに一人で歩いてたら危ないよ。送つてあげるから乗りなさい」

「いきなり声をかけられてつい、体が硬直する。

最初からそうだったのか、気がつかなかつたのかはわからないが、いつの間にか横に車が停まつていた。

噂のおじさんだ。

見るからに変質者風といつこともなく、ビニにでもこなつた感じの風体で、親切そうにほほえんでいる。

「家すぐそこなんで、大丈夫です」

本当はまだちょつと遠いけど。

先を急いでとすると、車のドアが開閉される音。

「子供が遠慮するんじやなこよ」

おじさんが車を降りてこちらに迫つていた。

うそ。おつかけてくるなんて、聞いてない。

今こそ防犯ブザーの出番? でも、実はただの近所のおじさんだつたりしたら。学校の先生のだれかという可能性もある。

「いえ、本当にいいです!」

「いいから、いいから」

走つて逃げようとしたら、先回りして通せんぼされてしまった。

40か50くらいいのおじさんが子供みたいに道端で両手を広げて迫つてくる。それがなんとも気持ち悪くて、もういいやブザー鳴らしちゃえとカバンに手をのばした。が、カバンの底でまぎれてしま

つているようでなかなか見つからない。必死でカバンをかき回していたら、うめき声と一緒に鈍い音がした。

おじさんが頭を押さえ、地面にひざをついている。それを高橋さんがスパンと平手打ちして上半身を足で踏みつけた。

「よし、落ちた」

「高橋さん！？」

どうしてここに。ああでもそれよりおじさんが気絶してしまった。

「きゅ、救急車？ それとも警察！？」

ケータイを手にあらあらしていたら、高橋さんが道端に転がっていた買い物袋をひろって手招きした。

「ほつといていいよ。行こう。送つてくから」

帰り道、歩きながら聞いたところ。

不審者の話をしていたから少し気になつて、あれからこっち方面を通りがかつた時は通学路の様子を見るようにしてくれていたし。不審者を通報できればもうけ、くらいの気持ちだったそうだが、私がいてとても驚いたとか。

「ありがとう。でも、あの人ほつといて良かつたの？」

「あのオッサンつかれてただけだから」

「疲れた？」

高橋さんが笑つた。

「学校で不審者に会つたつて子に聞いてみな。たぶん、最初のおばさん以外みんな別人だ」

この通学路にはあるおばさんの靈が漂つている。

朝は大丈夫だが、暗くなつてから靈感の強い人が子供のことを考えながらここを通りすると、おばさんの靈に同調してのうつな行動をとつてしまつ。憑かれた本人はなにも覚えていないので、あの人を通報しても仕方ない。

そう彼は語つた。

「じゃあ、あるおばさんこれからもずっとアレを続けるのかな」

つぶやくと、高橋さんが少し考えるような素振りをする。

「怖い？」

「……怖い」

彼が来なかつたら、いつたいどうなつていたんだろう。

帰つてこれなくなる、なんてのはただの噂だし、あのおばさんの靈ならたぶん自分の子供みたいに話しかけて送つてくれるだけだとは思うが、やつぱりゾッとする。

「仕方ないなー」

高橋さんが嬉しそうに笑つた。

「じゃ、タケシ君の家つてどこかわかる？」

「……亡くなつた生徒の名前、教えたつけ？」

男子なことも教えてなかつたはず。

問うと、彼は自分の肩をさして答えた。

「ああ、このおばちゃんずっと呼び続けるから」

それから少し歩いた所にあるタケシ君の家の前へ行き、

「これでもうあのおばちゃんの靈は出ないよ。でも普通の不審者はまだいるかもしないから、これからはこんな夜遅くに一人で歩くなよ」

と釘を刺された。

中学生にだつて部活とか委員会とか、いろいろ事情があるのだが、それはともかく。

おばさんの靈は通学路をウロウロしていたが、息子の靈はずつと家にいて行き違ひになつていたらしい。

それでおばさんを家の前まで連れてきたら息子の靈が出てきて、一人そろつて成仏していつたと。

けれど翌日。

学校のホームルームで新たなお知らせを聞いて、私は顔を引きつらせた。

「ゆうべ通学路で40代後半の男の人が暴行を受けて氣絶していたそうです。男の人は暴行を受けた前後の記憶がなく、通り魔の可能性が高いです。大人でも襲われるんですから、みなさんも十分気を

つけてくださいね。遅くまで学校に残る人は友達と一緒に帰るか、お家の人を迎えてもらつてください」

先生の言葉に他の生徒が「こわーい」などと口々にいひ。

真相はとてもいえなかつた。

休日の昼間。

家でじろじろとテレビを観ていたら、「高橋さんつてたまにすげにクマ作つてゐるけど、なにか夜遊びでもしてゐるの?」

母にそんな事をいわれて驚いた。

「え? クマなんかあつたつけ

母があんぐりと口を開ける。

「信じられない……あんた、毎週2回も会つてゐるくせに

「そんなしげしげ見ないからなあ

綺麗な顔だとは思うけれど。

人見知りのせいか、私は人の目を見て話すのが苦手だ。目が合つたままだと緊張してしまつてすぐそらす。あるいは、相手が目をそらしている間にちらつと顔を見る。この悪癖は学校の教師や沙也にさんざん注意されているのでさすがに自分でもまずいと思い、最近ようやく会話中に何回か目を合わせられるようになつってきたところだ。

「バイトかけ持ちしてるとか、大学がいそがしいんじゃない?」

「ああ、それはありそう」

高橋さんは髪を染めていないし、口を開かなければ真面目さつこ見える。性格も器用というか、世渡り上手なタイプだ。

そのおかげもあって、母はそれだけで納得したようだつた。

今度クマがあるか見てみよう、と思っていたのに、いつの間にかすっかり忘れて冬を迎えた。

高橋さんが一週間も家庭教師を休んだ。

インフルエンザが長引いているらしい。

家庭教師の会社から代理の教師を提案されたが、「じきに治るだろうし、まだ受験までだいぶ時間もあるので」と丁重に辞退した。彼以外の家庭教師なんて考えられない。

部屋で一人勉強していたら寂しくなつて、メールを送つてみた。

「大丈夫？ お見舞い行こうか？」

少し前にインフルエンザの予防接種を受けたし、たぶんうつらないだろう。

返信メールには住所と最寄駅だけが書かれていた。

来いということだろうか。

「じゃあ、ちょうど明日休みだから明日の暁ひる行くよ。なにか欲しいものある？」

「びわゼリー」

と珍しく短い返信があつた。

そこは高そうなマンションだった。

駅からも近くて清潔そうで、「将来ひとり暮らしするなら」いう所がいいな「なんて考えながら玄関に近づくと、ドブと排泄物が混ざったような異臭が鼻をついた。

「うつ？」

生ゴミか動物の死体でもあるのかと思った。
でも、それらしい物は見当たらない。

今たまたまゴミがないだけで、普段は玄関をゴミ捨て場にしているのかと疑いたくなる匂いだった。

綺麗な所なのにもつたない。

オートロックを解除してもらつてガラス張りの玄関に入り、エレベーターへのりこむ。

新しくはないが清潔なその密室で10階のボタンを押す直前、無意識に背後をふり返った。だれかが後ろにいたと思ったのだが、別にだれものつていな。影で黒くそまつたガラスが鏡と化し、私の後ろ姿だけが映っている。

気をとり直してボタンを押した。

部屋の前でインターホンを鳴らすと、フラフラの高橋さんが出てきた。

「よ。いらっしゃい

額に冷えピタをはつていてるが、それがなくても一日で病人だとわかる。

「……高橋さん、病院行つた？ 顔が青色とおりこして縁がかつてキモいんだけど

「キモイ！？ ……三日寝てないからな

ショックを受けたらしく、壁にかかった鏡をのぞきこむ。

「インフルエンザかかってる時に三日徹夜とか、死亡フラグにも程

があると思うよ」

「そりなんだけどなー……不眠症なんだ」

小さく苦笑した横顔を、つい凝視してしまった。

いつもは処方してもらつた睡眠薬を飲んで寝ているが、たまに薬が切れた時などはこうやって寝不足になり、どんなに疲れていても眠れないのだと彼はいった。

薬をもらいに行かなければと思っていた矢先にインフルエンザにかかり、しばらくはインフルエンザ用の薬で眠っていたのだが、それも切れてしまった。

「じゃ、また病院行つて薬もらいに行かなきゃ駄目じやん」

進められるままクッショוןに座り、買つてきたびわゼリーや栄養ドリンクなどをわたす。

部屋の中はわりと片づいていて、せんとくんクッショൺなどネタ系グッズがぽつぽつ置かれている。

さつそくゼリーを口にしながら、高橋さんがつぶやいた。

「面倒くさくつてなー。だから今日ひなが来ててくれて助かった」

「市販の風邪薬で、眠くなるやつ買つてこようか?」

「いるだけでいいよ。だれかいれば眠れる」

「……わかつた」

その言葉どおり、高橋さんはゼリーを食べ終えると床で眠つてしまつた。

畳の下には濃いクマが浮かんでいるし、少しやせたような気がする。

いつも笑つているから人生楽しくて仕方ないのかと思つていたけれど、そうでもないようだ。

彼に毛布をかけて冷えピタをとりかえて部屋を換気して、それでやる事がなくなってしまった。

お見舞いの品をわたしてすぐ帰るつもりだったけれど、人がいた方が眠れるというのならもう少し長居した方がいいんだろうか。迷つたあげくに台所を借りて、おかゆとゼリーを作つてみた。

味見をして「もつ少し料理の勉強しておくんだった」と軽く後悔したが、まあ……食べられなくはないし。ゼリーは普通の味だからOKという事にしておこつ。

外はまだ明るかったので、あとは部屋の本棚にあった漫画を読んでいた。

夕方が近づいてきたころ。

ちょうど玄関の方だらうか。ドオン、と窓の外で重たいものが落ちた音がした。

なんだろうと顔を上げ、ついでにそろそろ帰らうと立ち上がりたとき、急に身体が引きつった。

動かそうとすると激痛が走る。

足がこむら返りになつた時みたいに全身が引きつって、息苦しい。けいれん？

それとも、これが金縛りつてやつだらうか。立つたままなるつておかしくない？ 何で？

背中に氷がはりついたみたいに寒くて、だらだら嫌な汗が出る。するつ、と音がした。

スカートを引きずるみたいな、衣ずれの音。

それが背後から聞こえて、だんだん近づいてくる。高橋さんは目の前で眠っている。部屋には他にだれもいはずだ。靴もなかつたし、ひとり暮らしだといつていたし……それにこんな風にハアハアいながら近づいてくる人なんて、生きた人間でも嫌すぎる。

「……つ

高橋さん。

高橋さん、なんとかして。

助けを求めるようとするが、声が出ない。

口は動くのに声がかされて、まったく音が出なかつた。

だんだん息苦しくなつてくる。

ぱたぱたつ、と液体がしたたる音がした。

「さわんな」

不意に高橋さんが低くうなつた。

悪夢から覚めたように唐突に息ができるようになる。やつと体が動いて、私はしばらくゼーハーゼーハーと深呼吸を繰り返した。

室内には私たち以外だれもいない。

液体が落ちたあたりの床を調べても、ぬれた形跡は見当たらなかつた。

息を整えてふり返ると、高橋さんはすでに身をおこし、上着を羽織つていた。

「送つてく」

「いいよ、病人だし。ていうか今の」

「平氣平氣。寝たら調子よくなつた。熱も下がつたし」

「こつちこそ大丈夫だつて」

「じゃあ玄関まで」

一度目に通つた玄関は血の匂いがした。

辺りに匂いの元はない。通行人も気にしていないようだつた。

「絶対ふり返るなよ。少し寄り道して帰れ」

そういつて高橋さんに背中を押される。

とつさにふり返りそうになつて、そのまま小走りになつた。

「う、うん。じゃあまた」

あそこは幽靈マンションかもしれない、と帰りの電車でゆられながら考えた。

高橋さんの部屋もおかしかつたが、よく考えるとエレベーターで気づくべきだつた。

ふり返つてガラスを見たなら、ガラスに映つた自分と目が合わなければおかしい。どうして自分の後頭部が映つていたのか。ぞつと悪寒が走つて、軽く首をふつた。

これ以上考えるのはよそつ。あそこにはもう行かない。それでいい。

駅まで眠りうつと座席で目を閉じていたら、近くにいた私服の女子高生が、

「なんか血の匂いしない？」

とヒソヒソ話を始めた。

高橋さんの言葉が脳裏に浮かぶ。

ふつう、暗くなる前にまっすぐ帰れといわないか。以前もあまり夜道を歩くなと忠告してくれた。

なのにどうして今日は「寄り道して帰れ」といったのか。ふり返つたらどうなるのか。

血の匂いの源が私についているから、それをどこかでまいてから帰れということ？

進行方向とは違う車窓の外を田で追いそうになつて、とつやにうつむく。

いたたまれなくなつて車両を移り、駅からは本屋に寄つて帰つた。

その次の週。

高橋さんが家庭教師に復帰した。

クマは消えているし、血色もいい。

「治つたんだ。良かつたね」

「ああ、この前はありがと。ゼリー美味しかった」

おかゆの味については聞かないでおこう。

お礼にもらったミスドのドーナツを机の前でかじつていると、この前の説明をしてくれた。

あのマンションは半年に一度くらい、飛びおり自殺がおこるらしい。

今まで5人くらい飛びおりたのだが、みんななぜか10階のわたり廊下から玄関の前へ落ちていくのだそうだ。

怪奇現象にあう人も多く、窓の外でだれかが飛びおりたのを目撃してあわてて下をのぞくとだれもいなかつたり、エレベーターの中でミンチみたいに潰れた肉塊を見たり、部屋で金縛りにあつたりす

るので空室も多い。

そんなわけで家賃が安いので住んでいるらしい。

特に高橋さんの部屋は去年飛びおりた人が住んでいた部屋で、クローゼットから骨や脳みそがはみ出た女が出てきたり、勝手にシャワーから水が出たり、夜中に首をしめられたりする。

普段はそういう悪さをしないように押さえこめるので時間をかけて浄化していたそうなのだが、この前は高橋さんが弱っていたので出てきてしまったそうだ。

「……行くんじゃなかつた」

高橋さんが笑う。

「また来いよ。もう部屋には出ないから

「成仏したの？」

「いや、ムカついたから消した。だから他のはともかく、俺の部屋にはもう出ない」

「他の場所には出るの？ 玄関とか」

「でるよ」

「じゃあ行かない

「いふと、高橋さんが不服そう顔をした。

「友達みんなそういうんだよなー」

「引っ越せばいいのに。」

高橋さんが変になつた。

毎週のように遊びに誘つてくる。買い物とかカラオケとか、オカルトと関係ない所だからそれはいいけれど、さりげなく「かわいい」とかいつてくる。以前は手にふれるのも躊躇して気を使つている節があつたのに、軽めのスキンシップが増えた。気のせいか、たまに女を見るような熱っぽい目でこちらを見つめている。トドメはこの前の家庭教師の口。

いつも通り私の部屋でおやつにショークリームを食べていたら、カスター豆がはみ出て左手がべたべたになってしまった。

人前でなめるのもお行儀が悪いかなと思つたので手を洗いに行こ

くわぐつた一陣れのよつば感覚とともに、熱くて墨つたものが手

のひらを何度もなぞる。

一言でいうと、犬みたいにペロペロなめられた。

もう石化状態というか思考停止状態というか、声も出せずにいたら、高橋さんが疑惑的な目でこちらをまっすぐ見つめたまま、私の

指先にちゅつと口づけた。

ハハヤあああああああああああああああ

氣障すぎてクサすぎて鳥肌が立つ。同時になぜか、心臓がきゅうきゅう跳ねる。なぜか、胸が熱くなる。

「次のカテキヨの日、ビーすればいいと思う……？」

後田、人気のない学校の裏庭で友達の明里と沙也に小声で相談し

ながら、私は軽くうむいた。

明里がニヤリとした表情で目を輝かせる。

少也。對照的工類在引言中已指出。

あつねは一。教子リサビトキハ。アリハアリハ。

「沙也だつて、大学生の彼氏がいるくせに」

「七年生のことはなーつになーでしょ!! 光一ちゃんは連出だし! そ

んな変なことしない」「

「……クビにはしたくないな。高橋さんの授業も怪談も好きだし。ふつーにこのままの関係でいたいっていうか。スキンシップ過剰な

つぶやくと、二人はまた対照的な顔をした。

「 もう少し、様子みてみれば？ ヤバいと思つたらいつでもクビに
できるでしょ 」

と明里。

その言葉でちょっとと気分が軽くなつた。

「 そうだね。 そうする 」

沙也がじとりとにらんでくる。

「 ひなた、隣のクラスの鈴木君好きつていつてなかつた？ 」

「 うん、 そうだけど。 鈴木君、最近林さんとつき合ひ始めたんだつ
て。 だからもう一かなーつて。 ほとんど話したこともなかつたし
軽く笑つて 『 うど、なぜか盛大にため息をつかれた。 』
そういうえば、と明里がいう。

「 あたしも相談があるんだ 」

首つり

家族で買い物に出かけた、帰り道。すっかり日も落ちて暗くなり、一田の疲れがでて明里は後部座席で眠っていた。

家まであと少し」ということ。

突然、車の窓にバンッとなにかがぶつかる音がして田が覚めた。父が鳥でもねたのかと思った。

けれど父は平然と車を運転しているし、助手席の母も音に気づいていないような顔で前を見ている。

気のせいだったのかな、とまたうとうとしたとき。明里の真横、後部座席の窓からなにかをたたきつけるような激しい音がバンバンバンバンバン連続で響く。

まっくらな窓の外に首にロープを巻きつけた腐った男がいて、後部座席の窓を激しく両手でたたき続けていた。全身縁がかつていて口からはだらりと長い舌をはみ出し、首が異様にのびている。身体にはびっしりとうじが湧いていた。

停車中も走行中もそれはずっと張りついたようについてきて、今も近くの木の影にいるという。ずつと明里についてきていたのだ。

「どうしたらしいと思つ?..」

彼女は困ったように笑つた。

「戸和さんに相談してみたら? あの子にうつつの得意でしょ

戸和さんはクラスで評判の靈感少女だ。沙也の言葉に明里はほおづえをついた。

「戸和さん苦手。……ひなちゃん

なんとなーく田をそらしていたら、明里がしゃがみこんでかわいく視線を合わせてきた。

「高橋さんに相談してくれないかな

「お礼になにしてくれる?」

次の家庭教師の日、「ヤーヤーしながら高橋さんがいった。

「……お金はちょっとしかない」

「私のお小遣いは月千円だ。

バイトしようにも、中学生を雇つてくれる所なんてほとんどない。「けつこううさ、そういう相談は多いんだ。オカルトで飯食つてくつもりはないけど、無償で引き受けたたらこっちの身がもたない。どうしても引き受けるものと、断るものとの基準を作らざるを得ないんだよ。なぜかっていうと、そういう相談事を持つてくるやつはたいでい靈媒体質で祓つても祓つても靈を拾つてきたりする。俺が一生守つてあげるわけにはいかないだろ? 嫌だし。拾わないように気をつけるとか自分で祓えるようになるとか、その人自身がなんとかするのが一番いいんだよ」

「でも、困つてるんだよ」

「だから、なんかしてくれるなら引き受けてもいいよ。例えば俺の家に遊びにくるとか」

「え」

ぎしり、と鎧びたロボットみたいに身体が硬直する。

この前は知らなかつたが、姉情報によると一人暮らしの男の部屋に行くというのは「やらしーことされても文句いえない」的な意味があつたりするらしい。

まさか、そういう意味で誘われているのか? いやいやまさか。

勘違いだろう。友達と違つて私はモテないし。

「でるからヤダ」

「部屋にはでないよ」

イスに座つたまま、高橋さんが軽く身をのりだす。

「マンション全部どこにもでないならいいけど

「それはちょっと無理かな。バツチリ靈道通つてるし。だいたい靈なんて、まつたくでない所の方が珍しい」
また行きたくない要素が増えた。

「ま、嫌ならいいよ」

高橋さんが私の髪をなでて、テキストの採点を再開した。
その横顔を見ながら少し考えて、答えた。

「いいよ、行くよ」

やらしーことされる覚悟を決めたわけじゃない。
彼の田のトにクマが浮かんでいたからだ。
変な」としたら、囁みついてやる。

学校帰り。

通学路の途中のファミレスで私たち四人はおちあつた。

「カツコイイじゃーん」

面白がるよ^ううに明里がさわやか、

「腹黒そ^う」

沙也は鋭い視線を注いでいる。

沙也の好みはがっしりした男らしい人、平たくいえばマッチョなので高橋さんは真逆だが、なにも敵視しなくてもいいと思つ。

「ろりハーレムだな」

なんだと。

高橋さんはなんかゼリー系のデザートを食べていた。
ゼリーばかり食べて飽きないんだろうかこの人は。

一同が注文を済ませて店員さんが下がつたあと、おもむろに高橋さんが口を開いた。

「明里ちゃんさあ、お父さんこのこと話した?」

「え、ううん。うちのお父さん」^ううの信じないから

「俺にいわれたつてこ^ううのは伏せて欲しいんだけど、聞いてみな。

あ「」にホクロがある三十歳くらいの、Tシャツ姿の男の「」となにか知らないかって

「す「」ーい。本当に見えるんだあ」

喜ぶ明里。

沙也はあからさまに渋い顔をしている。

「明里のお父さんがなにかしたっていうんですか」

高橋さんがくすっと笑った。

「そつはいつてない。お父さんが家に連れて帰つてきたものだけど、明里ちゃんのそばが居心地よくつづいてるんだ。これは今日俺が持つて帰るから、もう明里ちゃんの所には出ない。それでいい?」

明里と私の方を見る。

ケーキに夢中になりかけていたのがバレたのだろうか。

「ありがとう「」ぞ」こます」

二人でうなずくと、高橋さんがこの前のよつな話をした。やたら長くて丁寧な説明だったが、要約すると「今後は自分でなんとかしなさい」ということ。

明里は靈を引き寄せやすい体質で、おそらくそれは治らないらしい。今回の靈はそんなに厄介なものではないし、徹底的に無視するだけでいつの間にかいなくなるものもいるからそうしろ。今回は特別にお金はとらないが、靈能者なんでものに頼めば法外なお金を請求されたりむやみに脅されたり、逆に変な靈をつけられたりするともある、とかその他もろもろ。

あんまり長いので私は途中から聞いていなかつた。

ちなみにファミレスの代金は全員分、高橋さんがおじつてくれた。高橋さんと別れてから、げつそり疲れたような顔つきで沙也がいつた。

「……そんな悪い人でもないかもね、あの人」

「うん。怒られちゃつた」

同じような表情で明里がうなだれる。

当事者だけあってあの長い話を上の空で聞くわけにもいかず、全部まじめに聞いて疲れたのだろう。私も家庭教師のときたまに同じ日にあづ。

「幽霊、いなくなつた?」

話題を変えようと思つて問うと、明里がにっこり微笑んだ。

「うん。ありがと!」

後日。

明里の父は「デパートの設備管理の仕事をしているのだが、そのパートのトイレで首つりがあつたのだと教えてくれた。

発見し、遺体をロープから降ろしたのは明里の父で、首をつったのは三十一歳の男。あごにホクロがあり、汚れたTシャツを着ていたといつた。

その週の土曜日。

お守りとパワーストーンと、防犯ブザーをカバンに入れて高橋さんのマンションを訪れた。

ちなみに、今日の玄関はゲロの匂いがした。

怖くて上は見れなかつた。

そしてエレベーターの後ろガラスも見れなかつた。

のつてから気づいたけれど、もし次があればエレベーターまで迎えにきもらおう。さりげなく天井にお札がはつてあるのが怖すぎる。

「よく来たな

「約束だから」

上機嫌の高橋さんにうながされて奥へ入る。

部屋にはプレイステーション3が設置されていた。そばにはソフトが何本か転がっており、DSやDVDもある。ナナシノゲエム曰く「こうゲームが非常に面白そうだった」。

「好きなので遊んでいいよ。俺は寝る」
なんだ、やっぱり勘違いだつたんだ。彼はただ睡眠不足を解消したいだけだつた。

恥ずかしいようなまつとしたような、複雑な心境で胸をなで下ろす。

「また薬切れたの？」

「いや、わざと飲んでない。少しづつ薬なしでも眠れるみたいにしていつもと思って慣らしてるんだ」

「……それはえらいと想つけど、それで寝不足で困つてたら意味なきない？」

「ヤバいと思つたら飲んでるよ」

家で作つてきた桃とりんごのゼリーをわたすと、喜んで食べ始めた。

「高橋さんつて偏つた食生活してそう」

「心外だなー。俺は料理上手いよ。あんま作らなければ、作る時はけつこう本格的にやるし。今度作つてやるよ」

「ふーん」

だれか人がいれば眠れるんなら、家族と同居すれば困らないんじやないかな、とふと思つた。

でも、それはいつはいけないような気もした。

「なんで眠れないの？」

高橋さんがスプーンを置いて、じちらへ寄つてきた。

「寝たら殺されるような気がするから」

息がかかりそうなくらい顔が近くてドキリとする。

高橋さんはふつと笑つて、私のひざで眠つてしまつた。

「またゲームしこおりで」

そんな言葉につられたわけではないが、別に変なことはされなか

つたし、共同玄関から異臭がしたり変な音が聞こえるくらいであります怖くなかったので、あれからたまに遊びに行くようになつた。

やがて、私は中学二年生になつた。

「この調子なら志望校のランク上げれますよ」と高橋さんがうちの親に余計なことを吹きこんだり、そのおかげで進路についての家族会議が開かれたりしたが、それなりに平穏な日々を送つていた。そんな時期に彼のマンションで聞いたのだが、高橋さんは小学校低学年のとき母親に殺されかけたそうだ。

家でうたた寝をしていたらいきなりクツションを顔に押しつけられ、泣いても暴れてもやめてくれない。もう駄目かと思ったとき、物音を不審に思った弟がドアを開けて入ってきて、ようやく母は手を止めた。

「今はふつーに仲いいんだけどな。当時はいろいろ大変で、精神的にキてたらしいんだ」

父の仕事の都合で転勤を繰り返していたのだが、そのころはちょうど幽霊アパートに住んでいたと彼は語る。

夜中にだれかがドアをかきむしる。だれも来ていらないのにピンポンが連續で鳴る。壁に人形のシミが浮いている。寝苦しくて目を覚ますと、腹の上に不気味な影が乗つていて。その他いろいろな心霊現象に高橋さん一家は悩まされたが、彼の母を精神的に追いつめたのは、子供の高橋さんが人形のシミと楽しげに会話する光景だった。しかも、ふとした瞬間に人形のシミの部分に変な女を見たり、高橋さんと会話する知らない男の声が聞こえてくる。彼を叱るとラッピ音が響き、窓が割れた。

そのうえ高橋さんは外でも幽霊が見えるなどといつので小学校に呼び出され、近所からずいぶん不気味がられた。

「ほんと限界だつたんだろうな」

夜中におきると母が包丁を手にじつとこちらを見つめていたり、突然知らない土地に一人置き去りにされ、考えなおしたように翌朝迎えに来たりされたこともあった、と彼は苦笑した。

「俺が幽霊幽霊いわなくなつて、アパートも引っ越した後はそんなことまったくなくなつたけど」

「……」

それでずーっと不眠症をわざらつてゐるのか。

幽霊に殺されるから眠れないのかと思っていたのに、想像以上のヘビーな話に私はなにもいえなくなつた。

とりあえず、彼にクッション投げは厳禁だ。

「ごめん、引いた？」

高橋さんが顔をのぞきこんでくる。

「深刻そうに聞こえたかもしけないけど、俺はただの怪談レパートリーの一つくらいにしか思つてないから

気にすんな、とほおをペタペタ触られた。

「あ、うん。眠れるように……なるといいね」

気の利いた言葉が浮かばず、高橋さんの頭を両手でなでると、彼はくすぐつたそうに笑つた。

「ちゅーしていい？」

「嫌だ」

春先のある日。

いつものように高橋さんのマンションでゲームに熱中していたら、チャイムが鳴った。

来客なんて初めてだ。

高橋さんをおこそうかどうしようか迷つたあげく、インターフォンに出てる。

カメラには大学生くらいの男の人が写っている。

金に近い茶髪で目つきが悪くてしかめつ面で、背が高い。普通体型なのに筋肉質で、なにかスポーツというか暴力をたしなんでいうただならぬ雰囲気がただよっている。服は普通のシンプルなものだ、いかんせん眼光がするどすぎる。

高橋さんにこんな友達がいるとは信じがたいが、ひとり暮らしの彼を訪ねてきたんだからやつぱり友達だらう。……危ない知り合いでないことを祈る。

なんか怖そのので居留守を決めこみたいが、あいにく部屋の主は私ではないのでそもそも行かない。

「ど、どうぞ」

マンションの入り口はオートロックになつていて、中の住人にそれを解除してもらわないと玄関にも入れない。なので一言つげて玄関の力ギを開けると、少しだけ驚いたような顔をして入ってきた。しばらくして、さつきの人気がやつてきたらしく部屋の方のチャイムが鳴る。

「すいません、高橋さん今寝てて」

ドアを開けて伝えると、ギロリと睨まれた。

「妹？」

「えつ」

「高橋の妹？」

「いや、ただの生徒です。家庭教師の」
勧めるまでもなく靴を脱ぎ、中へ上がつていた男がつと足を止めた。

「まさか今シャワー浴びるとか?」
嫌そうなつぶやきに、一いちらも思わず嫌そうな顔をしてしまつた。
「いや、寝ますって」
「裸で?」

「違います!」

ただの生徒だといったのになにを考えているのか。

ソファでだらしなく寝転がる家主を見せると、男が目を鋭くした。

「おこせ」

自分でおこせばいいのに。えらそーに。

内心少しムツとしたが、怖いので大人しく高橋さんをゆさぶつた。

「高橋さん、高橋さん。お客様きてるよー。」

ところが彼はなかなか起きない。

いつも夕方ぐらこまで熟睡しているから、それが癖になつてしまつていてるのだねつ。

しばらくゆさぶつたのち諦めてふり返ると、男は放置されたままのゲーム機をじっと睨んでいた。

「あのー、起きないんで、自分で」

ずいと紙袋をつきつけられる。

「そこのロリコンにわたしとけ。中身は見るなよ。18禁だから」

「冗談なのか本気なのか、男は嘲笑するよつに口をつり上げた。

「はあ」

とりあえず受け取ると、意外とけつこつ重かつた。見下ろすと、箱のようなものが入つていて。

男はすぐにきびすを返し、さつと帰つて行つた。

夕方、田を覚ました高橋さんに伝えると、

「あー、斎藤かな。バイト仲間だよ」
と軽く笑つていた。

「バイトって、カテキョの？」

「そー、カテキョ」

あんな濃い茶髪に仏頂面で家庭教師がつとまるのか。よく見たらヒゲも生えていてピアスまでしていたけど。実はヤクザとかだつたりして。

「つそり思つたが、さすがにいわないでおいた。

「一度目の遭遇はそれから一月もしない内におこつた。

「またおまえか」

「保月ひなたです。斎藤さん」

例によつて高橋さんのマンションで、おきない家主を前にして斎藤さんとやうが睨んでくる。

「こいつといつて気味悪くないのか？」

幽靈が見えることだらうか。

知らないふりをした方がいいかなと迷つたけれど、高橋さんの友達なら平氣だらう。

「高橋さんは変だけど面白いし、私もオカルト好きだし、他にも靈感ある人知つてるから、別に」

「あつそ」

斎藤さんは小さな紙袋を置くと、その辺にあつたメモ帳になにかを書いてこちらに押しつけた。

「ロリコンにはいづな」

それきり帰つてしまつ。

来年には高校生になるし、そんなロリロリいわれる歳じやないんだけど。だいたい、高橋さんはからかわれているだけだと思つ。複雑な心境でメモを見ると、そこにはこう書かれていた。

「5月10日PM2時 駅」

ちょうど休みだったので来てしまつた。

なんとなく、高橋さんのことで話があるんじゃないかと思つたのだ。

が、そこには話どころか本人がいた。

「ひな。どうか行くの？」

改札前で驚いたように問われて返事に困つたら、

「俺が呼んだ」

後ろにいたらしい斎藤さんが答えた。

「は？」

高橋さんが今まで見たこともないような形相でキレて、血の気が引く。

「こいつも連れてく」

「意味わからんねーんだけど」

よくわからないけれど、来てはいけなかつたみたいだ。

冷え冷えした声音が怖すぎて、私はいつた。

「ごめん、帰る」

「いいから来い」

斎藤さんに射殺すような目で睨まれる。

「どーしろ」というのか。

高橋さんは珍しく厳しい顔で押し黙つてしまつた。

でも、もうここまで来ちゃつたし。

どうにでもなれと切符を受け取り、電車に乗つた。

移動中、高橋さんは一言も口を利かなかつた。斎藤さんも無口だし私もそんなに話す方ではないので、やけに静かだつた。

駅からはバスになり、市民病院で降りた。

初めて来た所だがけつこう大きくて古い病院だ。壁が黒ずんでいて、所々ひび割れも見える。それでも患者は多いようで、駐車場はそこそこ車で埋まつていた。

「病院で何するの？ お見舞い？」

「見ればわかる」

「……ひな。そのお店で一時間くらいお茶してまつてくれない

か?」

ようやく喋った高橋さんが猫なで声を出し、斎藤さんがそれをさえぎる。

「往生際が悪い」

二人の間に火花を見た気がした。

病院の受付で高橋さんが名乗ると、ほどなく白衣姿の男の人人がやつてきた。

たぶんお医者さんの一人だろう。

少しおどおどしていて、こうとした体型がなんだかハムスターに似ている。失礼かもしねないが、ちょっと可愛い印象のおじさんだ。年上の年齢はよくわからぬけれど、三十代後半くらいだろうか。

「遠くから来てもらつて悪いね」

「いえ。こいつが前に話した斎藤です。この子は……まあ、邪魔はしないんで気にしないでください」

さつきまでの不機嫌はどこ吹く風といった様子で高橋さんがいう。名札を見たところ、お医者さんは東山さんとこうよつだ。東山さんがきょとんとする。

「この子もなにかできるの? 除霊とか」

除霊。

その単語を聞いてつい高橋さんを見る。

もしかして、心霊関係の用事でここに来たんだろうか。ちょっと前、山田さんに「心霊相談するなら金どるよ」とかってたけど、もしかして本当にお金もらって靈能者みたいなことしてるのかな。

悪霊退治とか……ん?

おそらく東山さんは依頼人で、ここはいかにも出でうな病院で。つまり。

怖い話は好きでも怖い目にあつのは嫌いなくせに、自分で墓穴を掘ってしまったと気づいて私はひそかに頭を抱えた。

事前にそう説明してくれれば、頼まれてもついて行かなかつたの

に。体験談を聞くだけで十分なのに……！

激しい後悔にさいなまれたが、もうここまで来てしまつたら腹をくくるしかないだろう。

色々あきらめてため息をついた。

「いや、ちょっと勘がいいだけです」

「へえー。すごいなあ」

高橋さんの言葉に東山さんが笑う。

いやホントなにもできないんですといおうとしたら、東山さんが斎藤さんに「君背高いねー」とか話しかけたタイミングと同時に高橋さんが私の耳元でささやいた。

「病院でるまでしゃべるなよ」

笑顔なのに声が不機嫌なのが非常に恐ろしい。

テストで回答欄を間違えた時だってこんなじやなかつたのに。

……そういえば、こんな風に高橋さんに逆らつたり怒られたりしたのは初めてかもしぬれなかつた。

灯りはきちんとついていて清潔なはずなのに、病院の廊下というのはどうしてこんなに薄暗く、不気味な感じがするんだろう。

ぴかぴかに磨かれた床に蛍光灯の光が反射して鏡と化しているからだろうか。あるいは、死人、病人、怪我人が集うところというイメージがそう感じさせているだけかもしれない。赤ん坊だつて病院で生まれてくるはずなのに、このつんとした消毒薬の匂いが誕生よりもそちらを連想させるのだ。

東山さんに先導されて到着したのは、だれも患者が入っていない空部屋だつた。

外壁と違つて特に不潔でもボロくもないし、普通の部屋のよう見える。強いていうなら窓ガラスが曇りぎみなくらいだろうか。おびえる小動物のように、東山さんがぎこちなく室内を指さす。

「ここに看護士が何人も変な影を見てるんだ。それに、あのベッドを使った患者はなぜか容態が急変して亡くなってしまう」

同時にキンと耳鳴りがして、内心飛び上がりそうになつた。

非常に嫌すぎるタイミングだ。

昔だれかが「耳鳴りは幽霊と田が合つた合図」なんてエグイこといつたのを思い出す。やめて勘弁してただの生理現象だよこんなのそーいうことにしといて。

目の前にあつた高橋さんの背中あたりの服をつかむと、彼はふとふり返り、私にデコポンを食らわせた。

絶妙な手加減でまったく痛くないが、びっくりしている間に無情にもすたすた室内に入つてしまつ。いつの間にか斎藤さんも入つていて、私は東山さんと一人で部屋の前に立ちつくした。

「ベッドの下だ」

高橋さんの言葉に、斎藤さんがベッドの下にもぐる。

なぜか、ほこりを被つたクマのぬいぐるみをもつて出でてきた。

手のひらサイズくらいの小さなもんで、ガムテープがへばりついている。

「ベッドの裏に貼りつけられてた。……看護士の女だな。瘦せ型で歳は三十路くらい、髪を後ろで一つにしばつて、胸ポケットにギャルソンのシャーペン差してゐる

「さん？　さんがどうしたの？」

東山さんが驚いたように部屋をのぞきこみ、高橋さんが補足した。「そのせんつて人がこのぬいぐるみを使って呪いをかけてたんですよ。このベッドを使った人が死ぬように

「え……!?　なんで彼女が」

高橋さんはちらつと斎藤さんを見る。

「そこまでは。とにかく、これでもう大丈夫だと思います。このぬいぐるみどうします？　良ければ処分しますけど」

処分してくれと即答して、東山さんが信じられないといった顔でぬいぐるみを凝視した。

「……そんな、ただのぬいぐるみで呪いなんかかけられるもんなの？」

「藁人形なんか使わなくても呪いはかけられますよ。人形やぬいぐるみとか、生き物の形をしてるものが使いやすいのは確かですけど。自分や呪いをかけたい相手がよく使つてる愛用の品とかでもいいし」説明は高橋に任せる、といった様子で斎藤さんは黙々とぬいぐるみを紙袋につつこんでいた。

その後、東山さんに許可をもらつて駐車場の隅でぬいぐるみに酒と油をかけて燃やし、私たちは病院を去つた。

帰りぎわ東山さんが二人に封筒をわたし、私にどこからか持つてきたワッフルを1個くれた。

「高橋さんと斎藤さんって、靈能者だつたんだね」

バスをまつっている間ワッフルを食べつついつと、高橋さんが複雑
そうな表情をした。

「ああ、まあ。……たまに知り合いに頼まれるんだ。こいつと会つ
たのも友達の紹介なんだけど、俺は人間の幽靈が得意で斎藤は人形
とか物が得意だから、今日みたいに協力することもある」

「普段は一人なんだ」

高橋さんはともかく、斎藤さんが一人でやつてたら依頼人に怖が
られそうだ。

ただ、斎藤さんつて終始ブチキレているように見えるけど、顔と
態度が怖いだけで根は普通かもしれない。

いかにも女慣れしてますつて感じの高橋さんはいつもの事なのが
が、さりげなく私のとろとろした歩調に合わせてくれるのだ。同一
年の従兄弟でさえ、一緒に歩くとたつたかたつたか私を置いていつ
てしまふのに。成人男性が女子中学生の歩きに合わせるのはさぞイ
ライラするだろうと思うのだが。

「今日は交通費込で一人十万。いつもは平均で8万くらいだな」

斎藤さんの言葉に耳を疑う。

「高っ！？」

交通費なんて、500円くらいしかかっていないはずだが。

病院にいた時間もせいぜい一時間程度だし、使つたお酒と油だつ
てどんなに高くても2万もしないだろ？

「なんでそんな高いの？」

「ぼつたくつてるに決まつてんだる」

斎藤さんが皮肉っぽく笑い、高橋さんが眉をひそめた。

「わざと高くとつて、依頼もつてこないようにしてんだよ。前にも
いつたけど俺はコレで食つてく気なんてないし、依頼がなくなつて

も構わないんだ。……なのに、高い金とつても泣いて頼んでくるんだから馬鹿馬鹿しい。俺だつてまだまだ素人みたいなもんなのにさ。有名な寺にでも行つたほうがマシだつつても聞きやしねえ」

以前明里に「靈能者なんて口クなもんじゃない」と諭していた彼が靈能力でぼつたくつている。

それを知られたくないで、高橋さんは不機嫌だつたんだろうか。

「斎藤さんはどうして私を呼んだの？」

彼がなにかいいかけたとき、タイミング悪くバスが来た。駅について電車に乗つて、もつすぐ最初の駅につくといつとき、

高橋さんのケー・タイが鳴つた。

「はい」

電話ごしに叫び声のよつな、動搖したような声がかすかに届く。よく聞こえないけどトラブルだらうか。

「あー……東山さん。呪いつて、そういうもんなんです。人を呪わば穴二つつていうでしょ？ 彼女は自業自得です。あのベッドで何人死にました？ 東山さんが気に病むことないですよ。それともあのベッドでまだれか死んだほうが良かつたですか？」ぞくりと背筋に悪寒が走つた。

そのいい方じやまるで、 さんといつ人が。

「はい、それで終わりです。あのベッドも使って大丈夫ですから。それじや」

高橋さんが通話を切る。

「今つて」

「 さんが脳梗塞で死んだつて」

「あのぬいぐるみを燃やしたから？」

平然としている一人を前に、乗り物酔いをしたみたいに気分が悪くなつた。

駅について、ここで解散かと思つたらなぜか一人ともつこてきて、歩きながら斎藤さんがいつた。

「俺やこいつみたいなのとつるんとると、靈感がなくともとばっちりを食うときがある。俺の妹はおかしくなつて死んじまつたし、このいつの友達も一人行方不明になつてゐる。……なのに、他人を平氣で巻きこむこいつの気がしれない」

それを聞いて、彼は私に警告するために呼んでくれたんだと、ようやく気づいた。

マンションで金縛りにあつたときを思い出す。

あれは怖かつた。苦しかつたし、死んでしまうかと思つた。

あれよりもつと怖い目にたくさんあつたから、高橋さんのお母さんは精神的に追いつめられたんだろう。

「俺は友達も彼女も作んないなんて無理だ」

冷めた口調で高橋さんがいつて、斎藤さんも淡々と返す。

「線引きくらいできるだろ」

その日はそれで解散した。

色々なことがあつたからゆっくり考えたくて、それからしばらくプライベートでは高橋さんと会わなかつた。

家庭教師の日には会つてちゃんと会話もするけれど、内容は勉強やたわいもない雑談だけで、なんだか気持ちは上滑りしていく。

不思議と、高橋さんも私を誘わなかつた。

毎週のようく遊んでいたのがウソみたいだ。

こちらから「週末遊びに行つてもいい?」と一言聞けば済む話なのに、なぜかそれがいえない。

正直、途中から「誘われるまでは行くものか」と意地になつていた。

認めたくないけれど、高橋さんが好きみたいだ。

すやすや眠る彼のそばでゲームするのが楽しくて、仕事以外の時間に優しくしてもらえるのが嬉しかつた。彼の怪談は好奇心をそそられるし、怖い目にあつたときも助けてくれた。

正当防衛っぽいし、合法の範囲内とはいえ彼らのせいで人が死んだり、おかしくなってしまった人や行方不明になつた人がいることも忘れたわけではないけれど、それらを差し引いても距離を置きたいと思えない。

会えないと寂しい。

土曜日のお昼過ぎ。

気がつけば、高橋さんのマンションまで来てしまつていた。

……約束もしてないのになにやつてんだろう。留守かもしれないのに。

チャイム押して出なかつたら大人しく帰ろう、と一大決心でインターフォンを押すと、無言で玄関のロックが外れた。

いる、みたいだ。

恐ろしいことになってしまったのか、はたまた浮き足立つていてそれどころではないからか、今日はもう怪異すら気にならず、一人でエレベーターにのつて部屋の前までたどりついた。

緊張しつつ部屋のチャイムを押すと、

「忠告してやつたのに」

相変わらず怖い顔の斎藤さんがドアを開けてくれた。

「ごめんなさい」

眉尻を下げると、斎藤さんは自分の腕にはめていたパワーストーンのブレスレットを外して私の手にかけた。

「つけてろ」

「……自分のパワーストーン持つてるけど、それじゃ駄目なの？」

ついタメ口になつてしまつたが、彼は気にした様子もない。

「念がこもつてないと意味ない」

「へー。ありがとう」

奥へ入ると、高橋さんはカーペットの上で寝ていた。

確かにそろそろ暑くなりはじめてきたけれど、なぜベッドで寝ないのか。そばにソファーもあるのに。

「じゃあな」

いつも通り荷物と紙袋を手に斎藤さんは帰ってしまった。
あの紙袋には、以前のぬいぐるみみたいな怪しいものが入つてい
たりするんだろうか。

「高橋さん、遊びにきたよ」

声をかけると、まぶたが少しだけ動いた。

話がしたいけれど、おきるまでまた方がいいだろう。今日もや
っぱり寝不足みたいで泥のように眠っている。

寝顔を見ながらぼーっと考えごとをしていたら、昨日あまり眠れ
なかつたせいか、いつのまにか私まで寝てしまった。

ぼんやりまどろんで目を開じていたら、ふと汗の匂いがした。

さらりと、だれかの髪が顔にかかる。

くすぐつたいなと思つていたら、温かくてやわらかいものが唇に
ふれて、息が止まりそうになつた。というか止まつた。

ちよつちよつとなにしてんのなにしてんのうあああああああ。
顔から火が出そうだつたけれど、身動きしたらおきてているのがバ
レてしまつ。

どんな顔していいかわからなくて、必死に寝たふりを続けた。

されたのはほんの一瞬だつたけれど、ものすごく重いようにも感
じた。

やがて、軽く息がかかつて離れる気配がする。

じーっと見られている気がしてしばらく目を開じていたら、本当
にまた眠つてしまつた。

だから、本当に夢だつたのかもしれない。

おきたとき、不気味なくらいに高橋さんの機嫌が良かつたけど…

…。

告白するつもりだつたのに、しそびれてしまった。

でも、あれからまた高橋さんが遊びに誘つてくれるよくなつた

から結果オーライかもしれない。……セクハラが増えたのは困惑したけど。

それと悩みも増えた。

以前からそうなのだが、高橋さんと遊ぶと食事代などをいつも全部出してくれるのだ。悪いからと断つても出してくれるし、お菓子やらアクセサリーやらぬいぐるみやらくれる。さらに先日、彼のマジックショーンの最寄り駅までの定期券までわたされてしまった。

嬉しいけど、もはやばかりでいいんだろうか。睡眠不足解消くらいしかしてあげられないのに。

なんてひそかに考えていたころ。

夏休みに入ったので、友達の明里と沙也と一緒に海へ出かけた。食べて泳いで、夕方。

オレンジ色に染まった空を見上げながら、駅をめざしてぶらぶらと歩いていたはずなのに、いつのまにか人気のない海岸沿いに出てしまった。

「迷ったね」

「うん、迷った」

「やつぱりさつきの道、右だつたかな」

ああでもない、こうでもないと道端で相談していたら、

「あ、あの子に聞いてみようか」

と明里が海を指さした。

そこには小さな人影が一つ。

近寄つてみるとそれは小学5・6年生くらいの女の子で、黄色い水着に浮き輪姿でぷかぷか浮いている。

一いつくくりのかわいい子だ。

地元の子なのか周囲に親はない。一人で海なんて、危なくないんだろうか。

浜辺まで歩いて、沙也が手をふった。

「ねえ、お姉ちゃんたち迷っちゃったの。駅までの道教えてくれないかな?」

女の子はこっちに気がつくと笑って手をふり返し、沖から「ひりへすーと泳いできた。

やがて、浜から上がつてこよつとする。

ほぼ同時に、一人がじわじわと後ずさる。

どうしたんだろとふり返ると、沙也が叫んだ。

「ひなた、早く！」

「え？」

「こっち来て！」

明里まで。

この子に道を聞かないといけないのに、どうしてそんな遠くにいるのだろう。

疑問に思いつつ小走りで一人の方へ寄つて行くと、

「走るよー。」

直後走りだし、私もつられて駆けた。

「道、聞かないの？」

「いいから走れ！」

沙也が怒鳴った。

やがて、海から離れた道路まで来てようやく一人は足を止め、事情を話してくれた。

あの女の子が浜から上がつてこよつとしたとき、明らかに足がつく浅瀬にも関わらず座高が変わらず、腰から下が見えなかつたのだという。

「それに、両手で砂をはうみたにしてこっちに来ようとしてた」
ぱつりと明里がいう。

夕方になつても暑くてじめじめしていたのに、ひんやりと背筋に悪寒が走つた。

「とにかく早く帰る。駅、あつちみたい」

沙也が標識を見上げてうながす。

「うん」

返事をして、なんの気なしにふり返つた。

視線を感じた、なんて明確なものではなく、手がかゆかったから
かいたとかそんな無意識のものだ。

下り坂の先にさつきの女の子がいた。

浮き輪をしたまま、腰から下が存在しないみたいに道路から生え
ている。

目が合ひつと、嬉しそうにこちらへ手をふつてきた。

「つ、ついて来てるんだけど……！」

「え！？」

「はあ！？」

それから三人で駅まで走り続けた。

電車にのりこんで、「なにあれ」だの「夜の海は怖い」だのとや
れぞれ愚痴りまくつて、ようやく一息つく。

けれど、私たちは同時に見てしまった。

ほとんど乗客のいない電車の中。向かいの窓の外に広くて暗い海
が映つている。

そこに、小さな人影と見覚えのある浮き輪が浮かんでいた。

とても遠くにいるはずなのになぜか表情までがくっきりわかる。
恨めしそうな顔をして、あの女の子がじいじいと睨んでい
た。

次の週の頭。

「ていうことがあつたんだけど……！」

高橋さんの部屋で私は頭を下げていた。

今日は寝不足ではないので一緒に遊ぶつもりしつく
ゲーム機をセットしながらぶつくさいつていてる。

「俺といても見えないのに、なんで明里ちゃんといふ時は見えるか
なー。つか俺も海行きたかったのに」

女子中学生三人の中に混ざる気が。

「で、なんで土下座？」

「だつて、心靈相談嫌いでしょ？」

「え？ 僕そんなこといつてないけど」

私の顔を両手で持ち上げ、高橋さんが驚いた顔をした。

「このまえオカルトで食つてく気ないのに増えて困るとか、馬鹿馬鹿しいとかいつてたし。それに私お金もってないし」

「まてまてまて。いろいろ間違つてるけどまづ、ひながら金とつたりしねーから」

どうこうことだらうと見つめると、ちょっと顔が近づいてくる。かすかにシャンプーの香りがしてドキリとした。

「えーと、1個ずつ説明するからな？ 僕はオカルト好きだから。怪談も心霊スポットもコックリさんの類もオッケー。大好き。ここまでいいか？」

「う、うん」

なんとなく腰が引けてしまうと顔から手がはなれて、つづーっとほおやあご、首筋をなぞってきた。

「次に、心霊相談も嫌いじゃない」

「え？」

「面倒くさいのや、俺の手に負えないよーなやつ以外ならな。でも仕事にはしたくない」

「好きだけど仕事にはしたくない、と」

そこはいまいちよくわからないので復唱してみる。

「そ。友達と心霊スポット行つたり、友達の心霊相談にのるのはいい。でも友達の友達とか、ろくに話したこともないやつの相談はごめんだから金とつてんのだ。いくら好きでもそこまでやつたらキリないし、こっちだつてつかれる。馬鹿馬鹿しいつていつたのは、ろくに知りもしない俺に高い金積んででも頼んでくる連中のこと。ひなならいぐらでも相談していいから。……あ、明里ちゃんや沙也ちゃんの相談は却下な」

「なんで？ 私も会つて一年くらいしか経つてないけど」

高橋さんがなにかいいかけて私の手をつかみ、もう一度顔を寄せてニヤリとした。

「わかんない？」

だから、そんな目で見られたら困るんだつてば。ドキドキしそぎて変になる。

カツと顔が熱くなつて、あわてて目をそらした。

「たか、高橋さんつて口リコンなの？」

「さあ。年下は好きだけど、こんな歳はなれるのは初めてかな
ぎゅう、と手に力をこめられる。

そこまでいって、肝心な言葉は口にしてくれないんだ。

「そ、それで、どうしたらいいかな？ その女の子がまだついて来て、一人になつた時とかに出てくるんだけど」

高橋さんが笑つて、

「かわいーなー、ひな」

軽くほおに口づけてきた。

「！？」

思考回路が停止する。

そのままのポーズで置物みたいになつていたら、あっさり離れて高橋さんがいづ。

「ひなはあまり幽霊に好かれるタイプじゃない。それもつけてるし、あの三人で遭遇したんなら明里ちゃんにつくだる。明里ちゃんの相談を却下にしたからつて自分のことにしてもバレバレだから」

それ、の所で斎藤さんにもらつてつけていたパワーストーンのブレスレットを指した。

斎藤さんにもらつた物だとバレたときは「あのムツツリ野郎」とか毒づいていたが、どうやらこれが守つてくれたようだ。

「明里ちゃんと縁切る気ない？」

「本気でいつてたら怒るよ」

「ごめん[冗談]。……でも俺、あの子に次から自分で解決しろつていつたんだけどな」

「あ、違う。明里が頼んでつていつたわけじゃないよ。明里は私と沙也に愚痴つただけだから」

彼女はそんな子じやない。ちゃんと自分で解決しようと試行錯誤していたのだ。

「無視は難しいみたいだけど、できるだけ一人にならないようになり塩を持ち歩いたりしてるんだよ」

「ふーん。じゃあ、俺がアドバイスしたことは内緒にしてくれよ」

「ありがとう」「

喜んでいたら、高橋さんが愛想よくほほえんだ。

「一番、俺とプールに行く。一一番、キス。二番、二二に泊まる。どれにする?」

五秒くらい、時が止まった。

「冗談だよね?」

「嫌ならいいよ」

「まつて、せめてどれか難易度おとにして! レベル高すぎるよラスボス並だよ」

「なにいつてんだひな、こんなのまだまだスタート地点だ。プールなんてだんぜん気軽だろ」

「気軽じゃない」

以前ミニスカをはいたら堂々とガン見しまくってきたのはこの男だ。

妙にまとわりつくな、あんなばさかしい視線の前で水着なんか着れるものか。こちとら手にふれるだけでいっぱいぱいの状態なのだ。

それを考えると。

「……三番」

たぶん、ゲームやDVDを観るくらいでいつもとそんなに変わらないだろ?。

高橋さんが子供みたいな笑顔を浮かべた。

「今日?」

「また今度。それで、どうすればいい?」

「幽霊に好かれるやつって何種類があるけど、多いのは不健康と優しいやつなんだよね」

高橋さんは両方っぽい。

「こいつなら助けてくれそう、同情してくれそう、あるいは簡単にこっち側に来そうだと思ってついてくるわけだ。だから時にはキレるものいこよ」

「そんなことしたら逆ギレしてこない？」

「してくるのもいるけどさー。幽霊って別にホラー映画に出てくるような最強の存在なんかじゃないから。人間の影みたいなもんだから、生きてる人間の方が強い。あつかい間違えたら死ぬようなのなんて俺も一回くらいしか見たことないし。あ、でも神仏関係だけは絶対に怒らせるなよ」

やつぱりヤバいのもいるんじやん。

冷や汗が出たが、話が進まないのでそこはスルーしておく。

「うん。じゃあ、明里には怒つてみたらうっていってみる」

「いや、今のはただの今後の助言。明里ちゃんて人形とかぬいぐるみもつてる？ 生き物の形のキー ホルダーとか。できるだけ長くもつてかわいがつてる古いやつ」

「もつてるとと思つ」

彼女はかわいいもの好きだし、家にぬいぐるみもたくさんあつた。 「それに”助けてください”とか”身代わりになつてください”とかつて頼んで、ついて来てるやつに投げつけな。その後はふり返らずダッショ。お盆が終わるまで、できるだけ水には近づかないこと」

ホラー雑誌に載つていた除霊方法ということにして明里にそれを伝え、さつそく三人で実践した。

人目のない林の中へ行き、ぬいぐるみを投げて走る。

私にはあの時の女の子は見えなかつたけれど、逃げる最中なにかが水に落ちたような、じやぶんという音がした。

それ以来、あの女の子は出なくなつたそうだ。
けれど少し困つたことがある。

明里と遊んでいると昼夜とわず、変なものが見えるようになつたのだ。

約束どおり泊まりがけで遊びに行くと、

「晩飯好きなの作つてやるよ。なにがいい？」

とのことで、荷物を置いて材料の買い出しに出かけた。

なんか本当に料理上手やでたまーいめぐせー

とか思いつつも、手を恋人つなぎされて私は内心デレデレだった。周りに変な目で見られないか気にはなつたけれど来年は高校生だし、高校生と大学生ならそんな変じやないからいいやという事にしておいた。

いつもこれくらいのスキンシップなら歓迎なのに。

ず
、
い
て
、
た
ら、

「やつぱ車で行くか

「え？」

高橋さんは手を引かれ、早足で馬のホースを引き返した。

「アーマーの魔導士がいるから、」

わけがわからないまま一緒に階段をおりる。

直後

部屋にしみたれに少しぐぐせた悲鳴

不可解で、又色悪いケチヤッ、という言ひ

着する気配。短く息を飲むような悲鳴。急ブレーキ音。

星様は空氣一全身の髪几び立つ。

つかのま、身動きどころか息すら忘れた。

「今」

かすかにのぞく頭上の空はまぶしいくらい青く晴れわたつてゐるのに、駅の中は影で黒くぬりつぶされ、立つてゐる人の顔も判別できない。

騒ぎ始める。

「きやあああああああ！」

ホームの方から悲鳴やだれかが吐瀉する音が響く。とつさに足を止めてふり返つてしまつていた私の手を、もう一度高橋さんが引いた。

「行こう。飛びおりだよ。グロいもん見たくないだろ？」

どうしてそんなに平然としていられるのか。

数分前に通つた改札を再びくぐつていく。

「なんで電車がくる前にわかつたの？」

「あのおっさん、すでに顔が死んでたから」

向かい側のホームにサラリーマンのおじさんがぐつたりして座つていたらしい。

顔を見たら、「ああこりや飛びこむな」と思つたので引き返してきたとか。

「……全然わからなかつた」

呆然としていたら、高橋さんが苦笑する。

「こりいうのは俺より隼人の方が得意だつたんだけどな」

後ろの方で「ただいま人身事故が発生いたしました」というアナ

ウンスが響いた。

西崎隼人西崎隼人という高橋さんの友人は、第六感だけで生きているような人だつたらしい。

実生活や社会で役に立つようなことはほとんどできない。

「すつげー馬鹿だし、どん臭かつた」

けれどおそらく勘がよくて、いつも当たり前に幽霊を見ていた。失せ物探しもできだし、天気予報は百発百中。5万くらいの宝くじも数回当てていた。

特に死やケガ、病気の予知が得意だった。

中学生のころ、あんまり彼の成績が悪いので「このままじゃ留年だ」とテスト前に無理やり勉強させようとしたが、「テストは延期になるからまだやらなくていい」と教科書を見もしない。

「なんで延期になるんだよ?」

高橋さんの問いに彼はこういった。

「今日か明日くらいに校長が死ぬ。全校集会で葬式やるからテストは延期」

校長は50代。歳ではあるが元気で持病もない。

勉強したくないいい訳だらうと思つていたら、翌日。

朝のホームルームで校長が車に轢かれて亡くなつたと知られ、西崎さんのいつたとおりになつた。

ただ、延期されたテストの直前になつても彼は一度も勉強せず、赤点をとつまくつた。

本当に留年しかけたが担任教師が奮闘し、各教科の先生と交渉して学校を休みがちなことと授業で寝てることへの謝罪文、プラス課題を提出すれば単位をもらえるようにしてくれた。

「別に不良とかじやなく、ぼけーとしてるやつだつたんだ。休みがちなのも寝坊したから休むとかそんなだし」

と高橋さんは語る。

またあるとき、西崎さんがクラスメイトに向かつて、「今すぐ眼科行つたほうがいいよ」と告げた。

まつたく関係ない話をしていたので周囲はいつもの天然ボケだらうと思つたそうなのだが、いわれた本人にはすぐ通じた。

「やつぱり?」

最近、田の前に黒い点がたくさん浮いて虫のように動いて見えるとか。

後日、眼科で網膜剥離になりかかつていいといわれたそうだ。

そんなエピソードが山ほどあるらしい。

中学時代は西崎さんや他の友だちと馬鹿なことをいっぱいした。放課後、教室で「ツクリさんをしたら教室が黒い影と笑い声で満たされ、それ以来でると評判の教室になってしまった。

深夜、神社でかくれんぼをして肝試し。

投身自殺の名所と呼ばれる崖のある海にあえて泳ぎに行つたら、得たいの知れない黒い渦のようなものに飲みこまれ、危うく死ぬ所だった。

心靈スポットでわざとヤバそうな靈にひりつかいをかけて、無事に戻つてこれるかどうかで賭けをした。

その他、たくさん。

西崎さんは中卒でフリーターになつたので卒業後は会う頻度が減つてしまつたが、それでも楽しかつた。だが、別れは突然おどされた。

高橋さんが彼と最後に会ったのは、高校一年生の秋。じきりとするほど赤味がかつた、巨大な満月の夜に西崎さんがやつてきた。

アポイントなしに遊びにくるのはいつものことなので気にせず部屋に上げたが、彼は座らず、なにかいいたげにこちらをまつと見ている。

「どうした?」

妙に空気が重い。

西崎さんは少し気まずそうといふが、はじらうつむきに苦笑した。

「うん……実はさ、俺死んだんだ

「え?」

「おまえには最後に会つといふと思つて」

普通なら冗談いふなと怒る所だが幽霊は見慣れているし、彼は基本的にウソをつかない。

「マジで? いや、死ぬなよ。おまえ事故とか予知できるじやん。それで何人か助けたこともあるし、おまえだつてまだ」

西崎さんが困つたように笑う。

「それは、無理だなあ。事故でも病気でもないし……それに俺17で死ぬつてわかつてたから」

「わかつてたならもつと早くいえよ! そしたら死に直ぐりには会えたかもしけねーのに」「どーかなー……俺は変に同情されるより、普通に遊べて楽しかったよ」

そこで唐突に目が覚めた。

西崎さんの姿はなく、月明かりにてられた室内で時計の音だけが響いている。

時刻は4時まえ。

その日は疲れていて風呂上がりにソファで横になり、そのまま寝てしまっていたようだ。

けれどただの夢とはとても思えなくて、非常識を承知で彼のケータイに電話した。

でない。

寝ているんだろう。寝てるだけだ。

そう願いつつも高橋さんは着のみ着のままで西崎さんの家へ向かった。

西崎さんは両親がおらず、親戚とも不仲なので中学時代から仕送りでひとり暮らしをしている。

彼のアパートのドアは鍵がかかっていなかった。

暗い室内にはぬぎ散らかした衣服やカバン。物が散乱しているのはいつもどおりだが、心なしか生き物の気配がしない。

首つってるんじゃないかと思うと電気をつけるのが怖かった。

けれど、西崎さんはいなかつたそうだ。

遺書も書き置きも、なんの印もなく彼は行方不明になった。

そんな話を聞いて、出会ったばかりのころに高橋さんがやたらと私を心靈スポットに連れて行きたがったのは、西崎さんと遊んでいたころの名残かもしれないなどひそかに思った。

「前に斎藤さんがいってた、行方不明になった高橋さんの友達って西崎さんのこと?」

「そ。あいつの妹のことは俺も知らなかつたけど」

「西崎さんが行方不明になつたの、別に高橋さんのせいじゃないと思うんだけど」

あの時の斎藤さんは高橋さんのせいだとでもいいたげな口ぶりだった。

「ひなに警告したかつたんだろー。あいつ、ひなのこと自分の妹に

重ねてるみたいだし」

話している間に買い物も終わり、マンションに戻つて料理しながら高橋さんがいった。

なんだかやたら丁寧に作つてゐる気がする。見習つべきか。

「妹さんに？ 中学生なんて他にもいっぱいいるのに」

「……ま、嘘はいつてないし。俺にかかつた呪いや靈障が俺じゃなくて家族や友達に行つたこともあるから、斎藤が警告する気持ちもわからなくはないよ」

呪いかけられたりすんの？

それは怖いなあと考えていたら、なぜか高橋さんが真顔で一いつ見つめていた。

なんなんだ。

「高橋さんはいなくならないでね」

キッチンの隅で立つたまま告げると、高橋さんがぱりっと包丁を落とした。

危なつ！？

見てるこいつちがぎやつと飛びはねそうになつたが、彼はまつかな顔をして叫んだ。

「ワンモア！ もつかいって

「え……し、失踪しないでね？」

「うわ、デレた！ ひながデレた！ すばー、やべー、もう一回いつてもう一回！ 録音する！」

鍋も包丁も放置し、謎のテンションでケータイをとつに行く。まさか本当に録音する気じゃなかろうな。

「デレた、つて」

心外だ。

私つてそんなんに普段ツンツンしてる？

毎週通つて態度で示してゐるつもりなんだけど、もう少し考えてることを口にしたほうがいいのかもしれない。

包丁をひろつて鍋の火を止めると、笑顔全開の高橋さんがケータ

イを手にこちらへやつてきた。

ちよつとムカつくのはなぜだろつ。

ケータイを没収して、口を開いた。

「あの、伝わつてなかつたみたいだからいうけど、毎週高橋さんに会つての楽しみにしてるよ。休みの日も週1で遊んでるけど、普段は友達と遊ぶのだって月1くらいだし。返信しようがない内容のメールはたまに放置したりしてるけど、ちゃんと全部読んでるし。こんなしそつちゅうやりとりするの高橋さんくらいだし、男友達は高橋さんと斎藤さんくらいしかいないし……だから……別に私ツンツンしてなこよ」

むしろ「テレテレのつもつだよ！」

少しは伝わつただろつかと様子をうかがうと、

「すげー嬉しい」

くくつと笑いながら高橋さんが抱きついてきた。

ぎゅーと力をこめられて、苦しいやらはずかしいやら。ほんのちよつと気持ちよくて、胸が熱くなる。

そわそわと視線をただよわせていたら、せつときとつ上げた彼のケータイが田に映つた。

録音しようとしていたので、画面が開いたままになつていま、まち受け画面には、私の寝顔が登録されていた。

「はー？」

がばつと体をはなそつとするが、はがい絞めにされていてぬけ出せない。

「ちよつと、なにこのまち受け。いつのまに撮つたの？」

「あー、それか。無防備な寝顔だつたから、つい」

ついつて、他人に見られたらどうしてくれるのだ。肖像権とかいうやつの侵害だ。

「写真フォルダ見るよ」

他にもこんな変な写真があつたうじよつ。

こわいわとフォルダを開こうとするとき、パスワードがかけられてい

た。

「パスワードは？」

「教えない」

「口口口口のどを鳴らすネ口のよくな仕草で私の頭に頬ずりしながら高橋さんがいう。

腕の中からぬけだすのに5分。

パスワード教える教えない戦争が停戦されるまで40分くらいかかり、結局、まち受け画像を変えるという妥協案で落ちついた。

夏休みの終わりごろ。

一人で街へ買い物に出かけ、ぶらぶらと服や靴をながめていたら、嫌いなクラスメイトと遭遇してしまった。

「あつ、姫！」

訂正、大嫌いだ。

ぐるっときびすを返して見なかつたことじょうとしたのに、すたすたと後をついてくる。

「姫、姫どこ行くの！？ 買い物！？ 一人！？」

でかい声で姫姫よぶなはずかしい。

茶髪にちょっと派手な服装。

いかにもチャラ男風の外見も苦手だが、なぜか私を姫よびしてくるのが一番気に食わない。鈴木君は教室でも外でもこんななので、できるだけ避けていた。

「……その、姫つてよぶのやめて。はずかしいから」

「じゃあジユリエット？ シンデレラ？」

ぎやああああやめる鳥肌が立つ！

美少女でモテモテの明里ならサマになるかもしれないが、私がそんな風によばれたら笑い者にしかならないだろうが。嫌がらせか厨二病か知らないが迷惑だ。

「普通に苗字でよんでも、あと声大きいからもつと小さこ声でしゃべつて」

「うん、姫」

「わかつてない。通じてない。

めまいを覚えたとき、

「嫌がつてゐからやめてやれ」

ぼすつとだれかの手が頭にのせられた。

ふり返つた先には茶髪とピアス。不良とこうよりヤクザ寄りの怖い顔。派手な外見でも、見慣れたせいかこつちはまつとする。

「斎藤さん」

「え……姫のお兄さん?」

ドン引きつて顔で鈴木君が問う。

地味で大人しい私にこんな知り合いがこよつとは、思いもよらなかつたんだろ?。

「保月」

訂正するよひひむと、

「……保円」

しぶしぶといった感じに訂正した。

ちょっと氣味がいし。

「じゃあね」

長題は無用、と斎藤さんとの場を去る。

「マセガキめ」

歩きながら斎藤さんが吐き出した。

「ありがとう。助かつたよ」

「ああいうのは相手にするな」

「する気なかつたんだけど目が合ひちやつたし、つこいくから……」

「うこつとなんか幽霊みたいだ、鈴木君。生きてるけど。

「そうだ。聞こうと思ってたんだけど、このプレスレッソットで浄化

？とかした方がいいのかな」

パワーストーン特集がのつた雑誌などを読むと、定期的に塩や日光で浄化したり水晶の上にのせたりした方がよいとよく書かれている。

斎藤さんはふと私の手首をもち上げると、そこにかかっているブレスレットを数秒見つめ、

「まだしなくていい」

とだけ答えた。

「したら良くない？」

「念も薄くなるからな。なにかあるのか？」

するどい。

「ううん、ちょっと気になつただけ」

夏休み明けに修学旅行へ行くのだが、色々とそういう噂の多い場所なのでお守りを強化しておきたかったのだ。

修学旅行の当口。

「5日間もひなに会えないなんて死ぬ。干からびて死ぬー」

大げさだ。

いつもカテキョも含めれば週3回くらい会つてているけど、5日間なんてあつとという間なのに。

高橋さんからのメールを見て、笑つてしまつた。

修学旅行自体は2泊3日だが、今週はカテキョがお休みなので会えるのは5日後の週末なのだ。

「お土産買つてくるね」

返信して、クラスのバスへ乗りこんだ。

すでに半数くらいが乗車していて、みんな眠い目をこすりながらも楽しそうに雑談している。

「おはよ」

「おはよ」

沙也と挨拶がてら両手をタッチして、隣に座る。

明里がまだ来ていないことを確認して、ちらりと視線を交わす。

「お守りもつてきた?」

「100円のために神社で買つてきた。600円だけどね」
沙也が財布からちらりとお守りをのぞかせる。

彼女は””で””所へ行くと頭痛や吐き気を覚える体質だが、靈を見る””こと””ない。私と同じように明里と””る時だけ見えてしまつたうだ。

そして旅行中はずつと明里も一緒に行動する。

お互””く””り、と息を飲む。

「楽しい修学旅行にしよつね」

「当然！」

沙也がいい切つた。

なに””ともないといいけど。

飛行機に乗りかえて沖縄へ到着し、そこからは観光バスで現地のガイドさんと共に各地を回った。

ガイドさんが歌つてくれた沖縄民謡が素敵でみんな明るい気分だつたけれど、途中からは慰霊塔や戦争記念館、防空壕といった所をめぐり、お年寄りの体験談を聞いたのでなんだか気が滅入つてしまつた。平和学習は必要だとは思うけど、好きになれない。

同時に、お守りをもつてくる必要はなかつたかもなど少し思つた。たぶん、こういう所は先祖の墓参りをするような気持ちでいれば大丈夫だ。

黒い影がたくさん見えたりしてものすごく怖かつたし、頭の中ではずつとお経を唱えていたけれど、むやみにおびえて騒ぐのは良くない気がした。

その後はホテルへ行き、晩ご飯を食べてお風呂に入つて、就寝前の自由時間になつた。

そこで私たち三人は固まつた。

クラスで集まつて怪談をしようというお誘いが来たからだ。

正直、興味はある。怪談は好きだ。でも明里もいるし、メンバーには変なのに憑かれてる奈緒美ちゃんも靈感少女の戸和さんもいるのだ。なにもおこらないはずがない。

「どうする?」

「面白そう」

と明里。

「クラスのみんなが集まつてるつていうなら」と沙也。

大部屋に割りふられた子の部屋で集合ひしいのでそこへ行くと、すでにみんな来ていてかなりの密集具合になつていて。女子部屋なのだが、男子までちやつかり集まつている。

「保月、保月！ 」しきしき！」

鈴木君がばしばしと自分の隣をしめす。そんな周りに男子しかいない場所へ行くわけがない。

困つていたら、

「いちいち相手しないの」

明里にぽんと肩をたたかれた。ついでに「嫌だつて」と鈴木君を追いはらうように手をふる。

沙也がいたわるような目をむけてくる。

「嫌なら嫌つてちゃんといわないと駄目だよ」

「うん。ありがと」

一人に感謝しつつ、三人で壁際にすわる。

ラッキーなことに戸和さんの近くだ。彼女のそばなら安心な気がする。

「じゃ、あたしから時計まわりでいい？」

奈緒美ちゃんがあたりを見回して、怪談を始めた。

語り上手でけつこう怖かつた。

その後も、聞いたことはあるけどなかなか面白い怪談が続く。

明里が沙也に抱きつき、私は明里に抱きついてきやあきやあ固まり、三人で毛布を被りながらも楽しんでいた。

そうして、戸和さんが語る番になつた。

しんと静まり返つた室内でカーテンが風でゆれる音だけがひびく。

「半年前の話なんだけど、毎晩夜中の一時に間違い電話がかかってきたの。非通知着信なんだけど、いつも同じ人だつてわかるんだ。なんでかつていうと、いつも”早く帰つてこい。こんな時間にでかけるてなに考えてんねん。飲酒運転になるやろが！”って録音を残すから。いつも怒つてておんなじこというんだ。それがちょっと面白かつたんだけど、一ヶ月くらい続いていい加減しつこかつたから電話にでたんだよね。そしたら」

無言。

だが、こんな時間に非通知でかけてくる知り合いなどいない。な

んてしきじらしい奴だとカチンときた。

「あの。いつも番号まちがえますよ。わづかけてこないでください
さい」

謝つてくるか、ブツ切りされるか。

そう思つていたが、

『間違うてへん』

男はいい切つて通話を終えた。

「それきり電話がかかつてこなくなつたから、ただの逆ギレだと思つてたんだけど。このまえ、留守録の容量がなくなつたから古いの消すついでにおじさんのやつを再生し」

コンコン。

戸和さんの怪談の最中、隣の部屋から壁をたたくような音が大きく響いた。

一同がびくつとそちらをふり返る。

静まり返つていた室内でそれはあまりにハッキリと聞こえた。

「なんか呼んでる?」

「イタズラじゃね」

クラスメイトたちが軽くざわめく。

いつもそろいの髪型で双子のように仲がいい二人組の少女が、こわばつた顔でつぶやいた。

「隣、あたしらの部屋だからだれもいはずなのに」

なんともいえない、不気味な沈黙が広がつた。

風かなにかで物がぶつかつた音だと考えるには生々しそぎる気配がしたからだ。

だれも動けず話せずにいたらふと、戸和さんが笑つた。

「お開きにしたほうが良さそうだね。私ついてつたげようか?なぜか代わりに奈緒美ちゃんが返事をする。

「ううん、ゆつこたちこの部屋に泊まるからいらない!」

「そう」

一人が心細そうな視線を送るが、戸和さんはあつさり引き下がつ

た。

一気に空気がゆるみ、すっかりお開きモードでみんなそれぞれ雑談しながら自分の部屋へ帰っていく。

明里たちと団子のように固まっていた状態からはなれ、私は戸和さんの後を追つた。

消灯時間がせまり、ぼんやりつす暗い廊下に彼女を見つけるが、「小林くん、昼間に防空壕でイタズラしたでしょ。修学旅行おわつたらすぐお祓い行つたほうがいいよ」

クラスの男子に小声でささやくそれを聞いてしまつて、声をかけられなくなる。

小林くんはびっくりしたような顔をして、

「し、してねえよ」

足早にさつて行つた。

いや、その顔はしたでしょ。

あんな洒落にならない場所でなんて怖いもの知らズな、とあきれていたら戸和さんがふり返つた。

「どしたの保用さん。なにか用?」

「あ、話の続きを気になつちやつて。留守録を再生したらどうなつたの?」

彼女は軽くふき出し、笑顔でバシバシ肩をたたいてきた。

「保用さんてばもー、あんなの留守録がぜんぶ気持ち悪いノイズに変わつてたつてだけのオチだよ!」

「え、それじゅうぶん怖」

「非通知拒否つても非通知でかかつてくるからイワツ」としたけどさー、私の電話番号に執着してただけみたいで。番号だけ変えたらかかつてこなくなつたんだ

「たまたまその番号になつちゃつたら怖いじゃん。何番だったの?」「えつとねー」

将来ケータイ番号を変えたときのためにそれを暗記しておぐ。ノイズが入つた留守録をまだとつてあるそ�で、「聞く?」と田を

輝かされたがお断りした。

怪談を聞くだけなら自分のセーフだが、そこまでしたら夢に出

そうだからアウトだ。

「じゃね。おやすみ！」

ひらひら手をふつて彼女がさつていく。

「おやすみー」

戸和さんってちょっと高橋さんに似てる。

明里と沙也のまつ部屋へもどつながら、そんなことを考えた。

じんわり暑い闇の中。

正確にはわからないけど、おわりく3時か4時くらい。耳元でぼ

そぼそと話し声がした。

「ダメ。連れていけないの」

明里の声だ。

「くうーん」

「こんな所にいないで早く成仏しなさい」

「きゅーん」

ぱわぱわ、と奇妙な音。

薄田を開けると、茶色のしつぽがゆれていくのが見えた。

犬？

ぼんやり視線を動かすと、しつぽの先が存在しない事に気がついた。

犬のしつぽのようなのだけが床に存在し、ぱたぱたとゆれてい
る。

え？ これ、幽霊？

ちょっとかわいいかも。

おきょうとしたが、身体が動かない。

「あか、り」

代わりに口を動かすと、かすれた声が出た。

とたん、しつぽの辺りから「ヴヴッ！」と獣の唸り声。今にむちらに飛びかかってきそうな殺氣に血の気が引く。

けれど、

「こりつー。」

明里が一喝すると氣配じとしつぽが消えた。

同時に身体が動くよくなつて、どつと冷や汗が出る。

「……あ、明里。なこと話してたの？」

彼女はジャージ姿のまま、疲れたよつに壁にもたれた。

「わかんない。犬かと思ったけどなんか凶暴だし……キツネじゃない？」

「茶色かつたよ？」

「なんだろうね？」

どこから来たのか知らないが、いきなり顔をなめられて目が覚めたといつ。

それから一度寝して起床時間におきると、隣の布団で寝ていた沙也がおきるなり顔をしかめた。

「獸くさい」

朝食を終えると、高橋さんからメールがきていた。

「おはよー。今日は授業だけでヒマ。そつちは夜這いとかされてない？」

「されるわけないでしょ」

「ひなは隙だらけだから」

そんなことはない……と思つ。高橋さんの前だとちょっとガードが緩くなつてしまつだけで。

昨夜と今朝のことを話すと長くなるので、簡潔に返信した。

一日目の午前中は海水浴をし、午後からは自由時間といつひとで、私たちは三人で街を歩きながらお土産を物色していた。

食べ物かキー・ホルダーか、アクセサリー系か。

どれにしようかと頭をひねつていたら、

「保月、ちょっとといい？」

めずらしく普通の声量で鈴木君が声をかけてきた。

沙也が私の肩をつかむ。

「ひなた。嫌なものは嫌つてハツキリいいな」

「ちょっと話したいつつただけだろ！」

顔を赤らめるクラスメイトを見て、冷や汗が伝つた。
え？ ……もしかして、鈴木君つてそうだったの？ 今までのつ
て完全にただの嫌がらせだと思ってたんだけど。

「えーと、じゃ、ちょっと行ってくる」

「ひなちゃん、勢いに負けちゃ駄目だよ」

と神妙な顔の明里。

どんだけ押しに弱いと思われてるの。

これでも訪問販売を断るのは得意だ。お母さんはいませんといつ
てやる。

「大丈夫だよ」

冗談はさておき、連れられるまま人気のない場所に移動すると、
おもむろに鈴木君がいった。

「もうわかつてると思うけど……好きだ！ 姫！」

姫つていうな。

なんて文句も出ないほどぽかんとしてしまつた。

いや、確かに数分前から気づいてた。気づいてたけど、生まれて
初めて告白されたよ私。

以前自分も告白しようとしたからわかるけど、告白するつてす
い勇気いるのに。すこいなあこの人。

「私なんかのどこがいいの？」

「や、姫つてけつこづ……アレだし」

アレつてなに。

「今度姫つてよんだら無視するから」

「じゃあ保月つてよぶから」

妙に真剣な目で見つめられて、ちょっとドキッとしてしまつた。

「「」、「めん。ありがと。気持ちは嬉しいけど」「嬉しいならいいじゃん」「良くない。

「好きな人いるから」

友達以外にこれを伝えるのはけつひはすかしい。

「えつこの前のヤクザ?」

「違う違う、別の人」

あとたぶんヤクザでもないと思つ。

「じゃ、カテキョとつき合つてるひマジ?」

とつやに言葉につまつてしまつた。

つき合つてるわけじゃないけど。

「だれに聞いたの?」

明里と沙也にしか話していないけど、二人は違う。

三人で話しているのをだれかに聞かれたが、高橋さんと遊んでいるのを見られたかだろ?」

「マジなんだ。えー、じゃあカテキョのたびに部屋でやらしこ」としてるわけ? それって犯罪じゃね? 援交みてーじゃん
「変なことなんかしてないよ」

……ちよつとしか。

思わず顔が熱くなる。

髪をなでられたり肩を抱かれたり、手なめられたりはしたけど。ちゃんといつも勉強している。私だつて受験生だ。

「じゃ、相手にされてないんだ」

距離をつめられてなんとなく後ずさる。

「それは……鈴木君には関係ない」

「今告つたじやん、関係ある」

「ない。片思いでも私は高橋さんが好きなの」
いつてしまつてから急に恥ずかしくなつた。
うあ。鈴木君も目が点になつている。
いたまれなくなつて、私は逃げ出した。

からつと晴れた空の下。

そばの土産物屋からはエキゾチックな三味線の音が響いている。二人と会流して、少し落ちついたあと。

道端で紅いもアイスを堪能していたら、明里がふらりと路地の方へ歩いて行ってしまった。

「明里？」

「ネコでもいた？」

「あれ」

彼女が指さした方を見て、私と沙也はぎょっと身をこわばらせる。人が立ちよりそうにない路地の奥に小さな古道具屋があった。学生のお土産に、という感じではなく、小金持ちの好事家やお年寄りが好きそうな感じの古くてひつそりした店だ。

日差しが強いので問題はないが店内に照明が灯っておらず、店員も客もいない。奥は影になつていてよく見えない。

その空間からまつ白な手が「おいでおいで」とこちらに手招きしている。

まつたく透けていなくてハツキリくつきりしているのに手の先に身体はなく、それは大きな鏡の中から生えていた。

「キモイ」

沙也が吐きすて、遠ざかさうとするが明里はぼうっと鏡を見つめて動かない。

「でも別に怖くないし。悪いものじゃないのかも。」私を買ってつていいてるみたい

正氣がと激しくつっこみたい。

靈に好かれる人つて靈に惹かれやすかつたりするんだろ？

「あんなの大きすぎてもつて帰れないでしょ。ぜつたい高いし」

引きつった顔で沙也が明里の腕をつかみ、大通りの方へずかずか

歩く。

その隣を歩いていたら、背中が急にヒヤッとして反射的にふり返つた。

視界のすみで、異様に長い白い手が明里の背中をつかんだ。
鏡からのびているので、約十メートルはあるだろうか。その尋常でない長さと友人の危機に泣きそうになつてとつさに彼女にしがみつく。沙也もつかんだままの明里の腕に入れてぐつと踏みとどまるうとするが、まるで止められずに三人そろつて引きずられていく。

店まであと五メートルもないというとき、犬が吠えた。

近所の犬みたいな生やさしいものじゃない。

まるで獵犬が獲物をかみ殺すために追いたてるよつた、聞いていふこつちまですくみあがるけたたましい声。

私たちを引っ張る力がやんだ。

白い手は消え、犬もどこにもいない。

しばらく呆然としていたら、沙也が顔をしかめた。

「犬の匂いがする」

明里は大丈夫だろうか。

様子をうかがうと、恐ろしいことに彼女はさつきずりこまれそうになつていて店の中に自ら入つて行つてしまつた。

「明里！？」

自殺行為にもほどがある。あんな目にあつてもあの手は悪いものじゃないというつもりだろうか。

あわてて後を追つと、いつのまにか中に店員さんがいた。

「いらっしゃい」

頑固そうなおじさんだ、

こちらを一瞥するなり、広げた新聞に視線を落とす。

私がびっくりしている間に、明里はいろんな物が雑多に飾られている棚からなにかをとり、おじさんにたずねた。

「これ、本物ですか？」

黒とこげ茶が混ざる、小さな毛皮のキー・ホルダー。見た瞬間にあつと声を上げそうになつた。

今朝のしつぽが小さくなつたみたいにそつくりだ。

「ああ、犬の毛だよ」

お爺さんの言葉に明里は少し眉をひそめたが、

「これください」

と財布を出した。

千円くらいだつた。

「キモイキモイキモイありえない！　返してきなよそんなの。犬殺して皮はいで作つたやつでしょ？　動物の死体なんてもち歩いてなにが楽しいの？　悪趣味じやん。呪われそう」

店の外でまつていた沙也が露骨に嫌な顔をする。

その意見には賛成だし、明里もきっとそうだらう。しかも怪しげな店で買つたものだし。

でも、今回に限り反対する気にならなかつた。

「それつて、もしかしてさつき吠えた犬？」

明里がうなずく。

「あそこで売つてるつて知つてたの？」

「ううん。でもきゅんきゅん鳴いてたからそつだと思つて……助けてくれたから、連れて帰つてあげることにしたの」

このキー・ホルダーは今朝の犬だと思う、と彼女はいつた。

「そいつさつきの手とグルなんじやないの？　泣いた赤鬼的な沙也が冷ややかなまなざしを向ける。

「そんなことないつて」

と明里。

「見てもいい？」

本当に犬の毛なのかと手をのばしたら、耳元で低い唸り声がした。

「それが嫌いみたい」

明里が私のブレスレットを指さした。

修学旅行から帰ってきた週末の昼下がり。

ミスドでお茶しつつ私は高橋さんに旅行中のことをかいづまんでも話した。

ひと通り聞き終えて、高橋さんがなぜか軽くふてくされたように問う。

「なんだミスド？」

「落ちつくし長話しやすいからだけど。嫌いだつたつけ？」

「どうか、主に怪奇体験を話したのにそれについての感想はないのか。

高橋さんは私のほおを軽くなだた。

「嫌いじゃないけど、ここにじゃ抱きつけないじゃん。5日ぶりなのに」

人前でそーいふことをいうんじゃない。

「だ、抱きつかなくていいの。会つて話せれば」

つい小声になってしまった。

高橋さんがほおづえをつき、なんとも意地悪そうな顔をする。

「本当に？　ひなは俺にさわりたくない？」

「……っ」

本当は、ちょっとだけ。

さらさらした黒髪をなでたいし、歩いてる間に手をつなぐのが嬉しい。

でも、鈴木君の言葉が脳裏によみがえつて胸がざわざわした。せめて、家庭教師の期間が終わるまではこれ以上のスキンシップを避けた方がいいんじゃないだろうか。

そもそも高橋さんのこういう態度がわからない。

好意は感じるが、教え子をからかっているだけなのか、一時の火遊び的感覚なのか、本気なのか。

「高橋さんって、私のことどう思つてるの？」

「かわいいーと思つてゐるよ。すつ」「へー

聞きたいのはその言葉じやない。

複雑な心境で口^ヒもると、

「なんかあつた?」

高橋さんが優しげにたずねた。

「カテキョとやらしーことしてゐるのかとか、相手にされてないんじやないかとかいわれた」

「へえ。なんでそんなこと言われたわけ」

「さあ。たぶん今日みたいに会つてゐる所を見られたんだと思つけど「そーじゃなくて。そもそもどうしてそんな話になつた?」「え」

それは非常にいいにくい。

思い出すと勝手に顔が熱をもつた。

「告白されてふつたら逆ギレされたとか?」「なんでわかるの。

驚いて高橋さんを見ると、彼は一瞬だけ不機嫌そうな表情を浮かべ、おだやかに微笑んだ。

「このまえ同じ年くらいの男にからまれてたらしこれど、そいつ?」チクつたな斎藤さん。

やましいことなんかないのに、妙な後ろめたさがこみ上げてきて視線をそらす。

「でももう断つたし。それよりカテキョの会社や親になにかいわれるほうが心配じやない?」「

「ひな本人が訴えたんじやなきやビリともなるよ。最悪ほかのバイト探すし」

それきりしばらく会話が途絶えた。

普段は高橋さんの方がよくしゃべるので、黙らざると困つてしま

う。

そわそわしたあげく、話を戻してみた。

「明里の所でたゞ、どう思つ?」

動物愛好家としては仲良くなつてみたいけれど、パワーストーンを嫌う所をみると、よくないものなんだうか。

「明里ちゃんの話は聞きたくない」

酷くつつけんどんにいわれて、おどろいた。

「じめん。別に明里の心靈相談をして欲しかったわけじゃなくて、高橋さんも怪談好きだから興味あるかと思つて」

「……」

はああ、と大げさにため息をつかれた。

「明里ちゃんの自己責任だよ」

「えつ」

「本人が望んでそばに置いてるならほつておけばいい。ただ、その犬が”守つてやるからいづれ”とかいい出したら赤信号かな

な

「……覚えとく」

おつかなびくづくなづくと、外へ出ようと示された。
無言。

ひたすら無言で街中を歩く。

気まずくて仕方ないが、そのまま帰つたらもつと気まずくなるんじやないかとヒヤヒヤして脳内で必死に話題を探した。けれど、滅多に見ない不機嫌な横顔に話しかける勇気が出でこない。

やがて駅につき、しぶしぶ改札に向かおうとしたらそちらではなく、ふだん通らない地下への階段を降りて、人気がない寂れた場所にきた。

「俺あの子嫌い」

高橋さんがつぶやく。

「あの子?」

「明里ちゃん。」あたし可愛い”オーラ出まくつてなんかムリ。

守つてもひつて当然女の子あつかい当然みたいな図々しい所とか。あのじびじびのネコなで声なんとかならないの? 学校にくそ派手な髪飾りつけてく神経も理解できないけど、なんか天狗つて勘違

「いしてね？ 本当にひなと友達なの？」

「彼がだれかの悪口をいうなんて珍しい。

どうしてこんなに不機嫌なんだらう。

緊張で裏返つた声がでる。

「友達の悪口は聞きたくないよ。それに明里は優しくて賢い、いい子だよ」

高橋さんが嫌そうな顔をする。

「賢いかもしないけど、優しさうには見えなかつたな」

「心靈相談になつちやつたのはじめんつてば。沙也のこともそんな風に思つてたの？」

「いや、沙也ちゃんは別に。興味ないつつ一かひなが明里ちゃんラブなのが一番ムカつく」

「なにそれ」

「このまにか壁際に追いつめられていて、正面から覆いかぶさるよつに抱きしめられた。

「ストレートに言わなきやわかんないだらうから言ひなさう。明里ちゃん明里ちゃんつて女同士でべたべたしすぎだらう」

顔は見えないけれどその声は嘘や冗談と思えないくらい感情的で、怖いのか抱きしめられてドキドキしているのかわからなくなつた。

「べたべたつて、女同士はこんなものじやない？ 別に明里だけじやなく沙也の話もしひやつ！？」

ぬれた舌が首筋をなぞる。

それは何度も皮膚をすべり、甘噛みするよつにつけばんできた。

「ぶつちやけさあ、俺より友達の方が好きでしょ？」

妙にくすぐつたくて、ぞくぞくするよつな痺れでふらつきやつくなる。

「い、この前いつたじやん。高橋さんの方が遊ぶ回数もメールも多いつて。ちょっと、やめて」

「その割に明里ちゃんの話ばっかだよな。告られたくらいで顔まつくなるし。そんな好みのタイプだつた？」

「そんなんじゃないって……」

とにかく離せと彼の口を手でふさぐと、指まで甘噛みされてついひるむ。

その一瞬の隙にキスされた。

なんの根拠もなく、拒んでいれば唇にキスだけはされないというか、無理強いはされないだろうと思いつこんでいたのでショックで放心してしまった。

好きな人にされて嬉しくないわけがない。

でも、それ以上に裏切られたという動搖のほうが大きかった。
せつかくあの夢はノーカウントについていたのに。

口をこじ開けて入ってきた舌がからみつく。

反射的に身を引くが、頭と腰に手が回されていて逃げられない。
彼の胸をばしばしたたくと、体と体を完全に密着するようにされて身動きできなくなつた。

さんざんキスされてわけがわからなくなつたこと、ようやく高橋さんがはなれる。

怒つているのか喜んでいるのかよくわからない、熱っぽい瞳が間近でこぢらを射る。

「好きだよ。俺の女にしたい。……これがさつきの答え。わかつた？」

妖艶で嗜虐的な気配に肩が震える。

「う

私は「じじ」と口をぬぐい、

「た、た、高橋さんの……アホッ！」

走つて逃げた。

家に帰つて部屋にこもつ、ベッドにひつぱして私はぼやいた。

「……友達に妬くことないじゃん」

嫌だつていつたのにやめてくれなかつた。

こつちも悪かつたとは思つけど、普段ふざけていて優しい人があんなに豹変するなんて信じられない。

ちょっと、いやかなり本氣で怖かつたじゃないか。あのままやられるかと思った。

「なに泣いてんの」

ふり返ると、ノックもせずに部屋に入ってきたらしい姉が立つていた。

姉妹だから顔は似ているらしいのだが、インドアの私と違つてかなりアウトドア派で体育会系。

部活で鍛えた体は筋肉で引きしまつているし、髪型もベリーショート。

くわえて表情もがははと豪快に笑うか真一文字に口を閉じていることが多いので、あんまり似ていないとよくいわれる。

世にいう姉御肌つてやつだらうか。

「お姉ちゃん」

怒るのも忘れてひしひと抱きつぐ。また友達とテニスでもしてきたのか、ちょっと汗臭い。

ふと、別の体温と汗の匂いを思い出してしまつて反射的に頭をぶんぶんぶつた。

好きだけど怖いし怖いけど好きだし、嬉しいのか悲しいのか、もうわけわかんない。

「だからなに？ いわなきやわかんないでしょ。だれかにいじめられたの？」

親には内緒でと頼んで相談したら、姉は奇妙な顔をした。

「好きなの？」

「うん」

「じゃ、やらせてやれば？ 何発かやればほとばりも冷めてがつつかなくなるでしょ」

ぎやああああああ信じられない。

「それが姉のいうこと！？」

姉があぐりをかいてふんぞり返る。

あ、ちょっと。そのどろどろ靴下で私のベッドに上がりないで。「むしろ好きなのに嫌がるあんたがわからん。何度も相手の家にまで行つてるくせに……ある意味かわいそうな男だな高橋。公私とも常に生殺し状態か」

「だつ、だつて、そういう理由で行つたんじゃないし。最初は全然そんな気配なかつたし。私が嫌がることはしないって信用してたのに

思い切り鼻で笑われた。

「アホくさ。ガキくさ。馬鹿馬鹿しい」

傷心の妹になんていい草だ。

「別に軽い女になれとはいってない。そんな事されても嫌いになれなくてウジウジウジウジかび臭く悩むくらい好きなら、後で傷ついたとしても後悔は少ないだろつつてんの。あ、避妊はしなさいよ。生理だつつても引き下がらない男と避妊しない男にはやらせちゃいかん」

私つてけつこうチョロイといつか、単純かもしけない。

さつきまでとても落ちこんでいたのに、姉のこんな一言であつという間に立ち直つてしまつた。

「そ…… そうかも」

重く考えすぎていたのかもしけない。台風が晴天になつた気分だ。

「お姉ちゃん好き」

くつづくと、彼女はますますふんぞり返つた。

「ふふん、敬え」

一時はどうなることかと思つたけれど、姉のおかげでわりと心おだやかに次の家庭教師の日を迎えた。

肌寒くなってきた夕方。

私の部屋で机の前にすわり、返つてきた期末テストの束をわたす。「最近、80点以下とつたことない」「以前では考えられない点数である。

「ん。このままでも合格圏内だけど、どうせだから全教科90点以上めざすか」

間違えた所だけに軽く目を通していくつたあと、高橋さんがまじまじとこちらを見る。

「怒つてたんじゃなかつたっけ?」

「まだ怒つてるよ」

「へー。なにかすんの?」

面白そうに高橋さんが問う。

「考え方かな」

まあ、その内に。

彼が笑つて私の髪に手をのばす。その手が届くより先にドアが開かれた。

「お茶もつてきたよー」

姉が軽いお茶菓子を机に置き、わしづと肩を抱いてくる。

「どおも初めましてえ。ひなたの姉の咲月です。よろしく」心配して様子を見に来てくれたんだろうか。

「どーも。……姉妹だけあつて、目が少し似てるね。雰囲気はぜんぜん違うけど」

爽やかにほほえむ高橋さんにほほえみ返しながら、姉はいった。

「こいつガキなんだから、あんま泣かさないでやつてね」

2歳しか違わないくせになにをいつ。といつか。

「お姉ちゃん」

泣いたつてバラすな!

非難の視線を送るが、遅かつたらしく。

「泣いたの？」

「無言でボロボロしくしくと」

「これでも優しくしてゐつもりなんだけどな……泣くほど嫌か」
高橋さんが低い声を出して、恐怖がうつすら蘇つた。

首に回された姉の手をそつとつかむと、彼女は死ぬほど面倒くさ
そうな顔を浮かべ、

「じゃー、あたしそこで見学してゐるから。気にしないでうつむけて
室内のソファに腰かけて漫画を読み始めた。

お姉さまありがとう。

「腹くくつたんじゃなかつたのー？」

高橋さんが帰つたあと、姉にこづかれた。

「怖気づいたな」

くくくと笑われたので、抗議の視線を送る。

「ムカついたから、なんかやり返してからこじょうと思つたの」

「……まあ、さつきのも十分嫌がりせにはなつただろうけど。そん
なんであたしがいなくなつたらどうするつもり？」

「えつ？」

不吉な言葉に目を開くと、彼女は意味深に苦笑した。

「世の中、なにが起こるかわからぬ」

姉がトラックに轢かれたのは、その一日後だつた。

よく交通事故があり、たまに車が横転していたりパトカーが停ま
つていてたりするのを見かける通学路のカーブのこと。

トラックの運転手によると、カーブを曲がつた先に姉がいて避け
きれなかつたらしい。

直撃はまぬがれたものの服が引っかかり、20メートルほど引き
ずつた所で止まつたのだそうだ。

病院から電話がきて車にのつて病院へむかうまではわりと冷静に
「あそここの道はよく事故があるから通るなつていつもいつてゐるのこ
と母とブツブツいつていていたのに、病院に到着していくつものチュー

ブに繋がれて横たわる姉の姿を見たとたん涙が止まらなくなつた。姉は全身にすり傷を作り、左足を二針ぬつた。頭部もぶつけてしまつたよつで、いまだに意識が戻つていない。

学校も家庭教師も休んで、病院に泊まりこんだ一日田。

一面まつしろな部屋でちよつと不気味だし、なれない所で寝泊まりするのも緊張するし、姉は目を覚まさないどころかうなされるとすらなく、心細くてたまらない。考えたくないがまるで植物のようというか、生きている気配が感じられないのだ。体温すらもヒヤリとして冷たい。

それでも確かに心臓はまだ動いていて、それを希望に母と一人、交代で寝ずの番をしながら見守つていた。

そんなとき、学校帰りに明里と沙也がお見舞いに来てくれた。二人の顔を見るだけでなんだかほつとする。

母は親戚に電話するために席を外しているが、もどつてきたら喜ぶだろ。」

「クマできてるじやん。辛いだろうけど寝なきゃダメだよ」と沙也。

「うん……でも、寝ると怖い夢ばかりみちゃつて」

「あるある、そういうとき。じゃあ、いつそメチャクチャ馬鹿馬鹿しい漫画や映画をみてみるとか」

「……ありがと」

実はそれももう試したあとだ。

昔ペツトロスになつたときはそれで回復したのだが、なぜか読んでいる最中にぽろぽろ涙が出てきてしまつて集中できなかつた。大好きな漫画も映画も小説も、人と会話しているときできさえ上の空になつてしまふなんて自分が自分じやないみたいだ。

必死になぐさめてくれる沙也をまえにただうなずいているとふと、

病室のドアの前で立つたままの明里が田に入つた。

「明里？」

どうしたんだろうと近寄ると、犬の低いうなり声がした。

「「めん。あたし入れない」

その顔はひどく青ざめ、冷や汗すら浮かんでいる。

彼女のぎこちない視線をたどつて、思わず部屋から逃げ出してしまつた。

「……シ

ベッドに横たわつたままの姉の、首から上がなくなつていた。
まるで心靈写真みたいだ。

血は流れていなが、布かなにかで覆いかくされたかのよつに綺麗に頭部が消え、首と胴体だけが残つている。
そんなバカな。さつきまで普通だつたのに。

見間違ひじゃないか。見間違ひのはずだ。

なんどもまばたきし、十秒でも二十秒でもじつと田をじりすが首から上が見当たらない。
どこへ消えてしまったのか。

「お姉ちゃん」

怖くてドアからうかがつようにしていたら、同じよつに青ざめた沙也が声もなく病室から出てきた。

彼女にも同じものが見えているのだろう。

もう頭がまつ白になつて、食に入るよつにそれを見つめるしかできないでいたら、背後から声をかけられた。

「友達がきてくれたの？」

「ひつ」

心臓が飛び出しそうになつたが、そこには母が立つていた。

「お、お母さんあれ」

指さすと、姉は普通に病室のベッドで横たわつていた。

相変わらず意識はなく、ぐつたりしていて呼吸があるかどうか不安になるよつな様子だがちゃんと頭もある。

ついまじまじとそれをながめ、一人と顔を見合せた。

「さつきは」

明里がぽんと肩をたたく。また犬のうなり声がするが、だんだん
気にならなくなってきた。

「気のせいだよ」

彼女は視線をあわせずつづむいている。沙也もかすかに震えている。

明らかに無理をしているが、

「……うん」

私もそう思つことにした。

一人が帰つたあと、私はおしゃるおしゃる姉の頭に手をのばした。顔にすり傷はあるが、頭部に重症になりそうなものはない。なのに彼女の額はゾツとするほどひんやりしていて、感触もまるで人形の肌を触つてているようだつた。土氣色とはこんなどろつか。「ひなた、そろそろ帰るよ。学校もあるし、ずっとここに泊まるわけにも行かないから……また明日こよつ」「

荷物をまとめて、すんと母が鼻をすする。

「うん」

ふと思いついて、腕にはめていたパワーストーンのブレスレットを姉の手首にかけた。

斎藤さんがくれたお守りだが、心靈的なものに効くらしい。

もしやつきの光景が靈的なものなら、これでなんとかならないだらうか。

姉の手首に通したとたん、ブレスレットはバラバラになつて床へ落ちた。

まるで彼女は助からないと言われたみたいで、嫌な汗が背中を伝う。

「ひなた？」

母がいぶかしげに呼ぶ。

あわててブレスレットを拾おうとしたとき、ひときわ強い耳鳴り

がして、ふつんとブレーカーが落ちたみたいに視界がまっ暗になった。停電にでもなったのかと辺りを見回していたら母が悲鳴を上げてナースコールを押し、私は失明したのだと知った。

それからしばらく大変だった。

姉の事でまいったいた両親がとり乱しまくり、眼科を5件くらいハシゴさせられた。

どの眼科も、また総合病院でも「異常はない」と診断され、原因がわからないため「実は生まれた時から問題があつたものが成長して出てきたのかもしれない」という医者もいた。

そんなこんなで、目が見えなくなつて早3日。

学校にも外にも行けず、家で退屈していたら高橋さんがお見舞いに来てくれた。

カギを開け、とりあえずリビングへ通してソファにすわる。

「良かつた。お父さんは仕事だし、お母さんはお姉ちゃんの様子みに行つてからすぐ暇で」

見えないといつてもそれ以外は健康だし、長年暮らしている自宅の中ならあまり不自由はない。

最初は食事、風呂、トイレ、階段の登り降り。なにをするにも人の助けがなければできなくて、小さな赤ん坊になつてしまつたみたいな気分だつたけれど、なにかを行つまえにまずべたべた触つてから行つようにしてみたらなんとかなつてきた。

家具の配置なども記憶できているし、外に出なければ大丈夫だろう。

そういう訳で留守番していたから助かつた。

「思つてたより元気そうで安心した」

軽く頭をなでられて苦笑する。

「周りがパニックになると、かえつて冷静になるよね。……ごめんね高橋さん。せつかく勉強教えてもらつたのに、もう高校行けないかも」

進学校へ行くのだと期待していた両親にも、ずっと勉強を教えて

くれていた高橋さんにも申し訳なくて呑ませる顔がなかつた。もう一生両親に養つてもらわなければ生きていけないのだろうかと考えると、顔には出さないが泣けてくる。

「……俺がもらつてあげようか?」

唇を指でなぞられて、この人相手に怒つていたのを思い出す。急にはずかしくなつて身をよじると、肩をつかまれ、

「いい加減にしろ」

ゴンシと鈍い音がした。

「ここつに何かされたらいえ。代わりに殴つてやる」

この声は斎藤さん。

「いたの!?」

無口だから気づかなかつた。

「そうだ、斎藤さん。あのブレスレット、お姉ちゃんにかけたらバラになつちゃつて」

事情を説明しようとしたが、

「んじゃこれやるよ」

舌打ちとともにブレスレットをかけられた。

「あ、ありがとう。でもそーじゃなくてお姉ちゃんが

「遊んでないでとつてやれ」

「ハイハイ。いわれなくてもやるつての」

高橋さんの氣だるげな声がして、近づいてくる気配がした。なんだろう。

頭の上で風が吹いた氣がして顔を上げると、目の前で高橋さんがほほえんでいた。

「え?」

「見える?」

信じられない。

「どうして!?」

「なんで? なんで急に? なんで!?」

常にまつ黒にぬりつぶされていた視界に光がある。色が映つてい

る。それがこんなに嬉しいなんて思わなかつた。

幻覚かと手をのばすと確かに感触がある。

医者でも治せなかつたのにと呆然としていたら、どつかりソファに腰かけている斎藤さんがいつた。

「運が良かつたな。えぐられてたら治らなかつた」

高橋さんの補足説明によると、小さな女の子の靈が私を回廊に迷いついたらしい。

それをとつてくれたから、見えるようになつたそうだ。

「ありがとう……！　もう一生このままかと思つてた！」

実は夜中に泣いたりもしたのだ。

感謝してもしきれない。この前のアレは忘れよう。

じんわり涙まで出てきて、ひたすら感激していたら、

「嬉しいか？　一度は見殺しにされたんだぞおまえ」

斎藤さんのそんな一言で涙がひつこんだ。

「人聞き悪いな。俺はひなには害がないと思つたから」「知つて放置したんだよな」

「……どういふこと？」

たずねると、いいにくそうに高橋さんが告げた。

「ごめん。咲月ちゃんのこと、わかつてたんだ」

このまえ会つたときから、姉が祟られていて、なにか良くないことがおきるだらうと気づいていた。

同時にそれは高橋さんの手に負えないものだということも。

そして、祟られているのは姉で私には影響がないと思つたので見ないふりをしていたらしい。

「うかつに手だしたら死にそだつたから」

何度か病院へ見舞いに行こうとしたが、急用の電話がかかってきたり、目の前で交通事故が発生したり、飛び降りで電車が止まつたり、車のエンジンがかからなくなつたり、タイヤがパンクしたりにもない道でスリップしたりと、色々な事がおきて行けなかつたそうだ。

「お姉ちゃんが祟られてるって、どうして」

「わかんねーけど、首がない人形が怒ってる。なんか悪さしたんだろ……てか、ひなは怒んないの?」

「命がけで赤の他人を助けるなんていえないよ。いつもして目も治してくれたし、気にしないで」

なぜか高橋さんが苦しそうな表情をした。

「あああ、ひなのそーいつとこが好き! 大好きなんだけどそれすげー皮肉!」

「いつてやれいつてやれ。赤の他人で冷血人間つて」

しかめつ面のまま斎藤さんがからかうように告げる。

「いや、嫌味でいつたわけじゃないから。気にしないでいいよ」

本当に、と伝えると高橋さんが眉根をよせる。

「祟られたのがひななら助けた」

それはフォローになつてない。

「……うちのお姉ちゃん、もう助からないの?」

しんと静寂が流れた。

つまりそういうことだらう。

医者も手をつくしてくれているし、神だのみでもするしかないか。

つづむくと、一人がつぶやいた。

「やるだけはやるよ。斎藤もよんだし」

「期待はすんなよ」

そういうしてくれただけで十分だった。

空は今にも降り出しそうにどんよつとしていて、たまに雷の音だけが小さく響いている。

風も湿氣をふくんで肌寒い。

まだ昼間なのに、嵐の夜みたいた。

「ひなは助手席で」

高橋さんの車の後部座席にのろうとしたら車主がいった。

「なんかこだわりもあるんだろうか。

助手席のドアに手をかけたとき。ロックがかかった音がしてつい

高橋さんを見た。

「なんでカギかけたの？」

彼が苦笑する。

「いや……俺はなにもしてない」

といいつつ車の屋根を見る。

斎藤さんがそこへ無造作に拳骨を落とした。痛そうな鈍い音がして、高橋さんがぼやく。

「へこんだらビースンだよ」

「事故るよりマシだろ」

もしかしてなにかいたのかな、と思ったが深く考えるのはやめておいた。

再びカギを開けて車内に入り、姉が入院している病院へついた。斎藤さんは人間の靈は苦手だが、人形やいわくつきの物には好かれやすく相性がいいらしい。

が、彼はぐつたり横たわる姉を一目見るなり、

「無理」

といい切った。

「危ないと思つたらいつでも逃げてね」といつたのは私だけど、すごく早かつた……。

「そ……そう」

「相手が悪いな。これ　　の人形塚だろ。人形と子供がうじゅうじや乗つかつてんぞ」

なんだか姉の方からねばつこい視線を感じた気がして、悪寒が走つた。

彼女はずつと眠つたままなのでそんなはずないのだが。

「とりあえず、気休めだけしてジジイに頼むか」

高橋さんが白い紙をとりだし、姉のベッドの下にぺたりと貼りつ

ける。

ちらつと見えただけだが手のひらサイズくらいで、人の形に切ったものに姉の名前とよくわからない文字が書かれていた。

まだ諦めたわけではないようだ。

うながされて廊下へ出ると、トイレから母が出てきた。

「ひなた！？」

視力が戻ったのを喜んでもらえたのはいいが、いい訳にものすごく苦労した。

しどろもどろで説明していたら、途中から高橋さんがしれつと「ストレスで一時的に見えなくなつてたのかもしませんねー。家で愚痴きいてたらいきなり見えるようになつて、どうしてもお姉さんの様子が気になるつていうんで連れてきたんです」とか「まだ落ちついてないみたいですし、ちょっと気分転換させてから家まで送つておきますよ」とかその他いろいろ助け舟をだしてくれて、それを聞いている内に母は納得したようで、最後には「暗くなる前に帰つてきなさいよ」とかいつていた。

高橋さんつて頼もしいけど、敵に回したら恐ろしい事になる気がする。

病院を出てから、だいたい一時間半くらいたつたころ。
そこそこ大きな神社へついた。

たしか観光名所にもなつてている所で、私もお正月に一度だけ来たことがある。この天氣のせいで人気は少ないもののちらほら参拝客がいて、境内はすんだ空氣で満ちていた。奥へ進み、神主さんの住居スペースらしい所へ入ると白髪のおじいさんがこちらへ歩いてくる。

私とそう変わらないくらいの、小柄な人だ。

けわしい表情でしかめつ面なのに、目が優しそうだからか不思議

と愛嬌があつて怖くない。私服姿で、白い紙袋を抱えていた。

「それ以上入つてくんじゃねえ。また厄介事もつてきやがつたな。素人のくせに出しゃばるからだ」

高橋さんが苦笑する。

「悪い。こんどお礼すっからさー」

「しばらく」き使つてやる」

おじいさんぐつと眉をつり上げるが、なんだか親しそうだ。以前いつていた神社やつてる親戚つてこの人だろつか。

「この子の姉ちゃんなんだよ」

高橋さんが私の頭をぽんぽんたたく。

おじいさんがちょっと表情をゆるめ、それからわざとらしく怖い顔をした。あんまり怖くない。

「嬢ちゃん、こいつのいうことなんか信用すんじゃねえぞ。こいつはな、修行もせずに勝手に見聞きして覚えて生意氣いいやがるし、そのくせたまに間違つてつから腹が立つ」

「は、はあ」

たぶん、高橋さんの師匠みたいな人なんだろうな、このおじいさん。

おじいさんは持つていた紙袋を斎藤さんに手渡した。

「人形には人形だ。清めてあるから上手く使え。酒と菓子も入れてある。あんたが持つた方がいいだろ?」

「ああ」

斎藤さんが短く答える。

この二人も顔見知りなんだろうか。

「事情を話してあつたの?」

「つそり問うと、高橋さんが投げやりに答えた。

「いや。このジジイ、いつ来てもこうなんだ」

車内にもどると、斎藤さんが紙袋から人形をとり出した。陶器でできたおかっぱ頭の市松人形で、群青色の綺麗な着物をきている。大きさはだいたい50センチくらいだろうか。おつとりと優しそうな顔立ちだ。

斎藤さんが手馴れた手つきでその人形の服をぬがして、ぎょっとした。

どきりとするほど精巧に作られたまつ白な人形の肌があらわになり、マジックペンをわたされる。

「背中に姉の名前を書け」

身代わりにするんだろうと察しがついて、ほつとする。

人形など、こういった人を模したものは人にふりかかる厄災を身代わりに引き受け、人が無事に過ごせるよう祈つて作られたものでもあると以前高橋さんがいっていた。

「なんかエッチなこと考えた？」

高橋さんにささやかれてカツと顔が熱くなつた。

「ち……ちょっとドキッとしただけ」

こんな綺麗な人形を身代わりにするなんてもつたいたいけれど、姉の命には代えられない。

「ごめんね。お願いします。」

心の中でこつそり祈つて名前を書くと、斎藤さんが人形の着物を着つけていく。人間の着物と同じくらい着せるのが難しそうなのに、完璧に元通りになつっていた。なんて器用な。

その人形をもつてまた車で1時間ほど移動し、大きくて古そうなお寺へついた。

こんな場所があるとは知らなかつたが、人形供養で有名な場所らしい。木と瓦でできた門をくぐるとたくさん庭木が植えられた境内に大きな石塚があり、花や水、お菓子などが供えられている。台風

の前のような空模様のせいか庭木に影がかかり、えもいえぬ雰囲気がただよっている。ぜつたい夜にはきたくない場所だ。

斎藤さんが奥へ入つて声をかけると、和服姿のおばさんが出できた。

少々白髪の混じつた黒髪をきちんと結いあげ、簡素だが上質そうな着物を上品に着こなしている。

キツネのような切れ上がつた目をした、色っぽい女性だ。「どないしはつたん、お人形みたいな女の子つれて。あら、イケメンさんもあるやん。入り入り」

きやつと笑う。

第一印象と違つてかわいい感じの人みたいだ。

和室に通され、温かいお茶までいたいたあと彼女がいった。

「わたしここの住職の娘で、藤田公恵ふじた きみえいうねん。斎藤くんとは5、6年くらい前からの知り合いかな。別に弟子でも身内でもなんでもないねんけど、この子忘れたころにきはるからなー。縁つてやつがあんねやろなあ。あ、あんたちは？」

私と高橋さんが名乗つたあと、イライラしたように斎藤さんが問う。

「高校生くらいのガキが人形の首おとしたりしなかつたか」

藤田さんの表情がくもる。

「……あんたらの知り合いか。人形は怒つたら怖いからイタズラしたらあかんよ、つて何度もいうたんやけどなあ」

お姉ちゃんのバカ。

本当にそんなイタズラをしたのだとしたら、意識がもどつたあとしばらく説教してやる。

申し訳なくて頭が下がつた。

「えらい贔屓にしてくれるとこのお嬢さんがお友達と見たい、いうから特別にあの人形みせたげてん。あ、あの人形いうのはちょっと難儀なやつでな。うちで毎年人形供養しての知つてる？ それできちんとやつてんのに未だにオチてくれへんいわくつきの子なんよ。

しゃーないから奥にしまつて、毎日お念佛あげてんねんけど」

「いそいでんだ要点だけ話せ」

斎藤さんがガンを飛ばすと、藤田さんは負けず怒らずの迫力でにらみ返した。

「人形蔵の大掃除やつてもらおか。あとこの前の台風で瓦とんだからそこもよろしくな。なんかまた台風きそうやし。それと運んで欲しい荷物がいくつかあんねん。ああ、怖てさわれれへんから人形とりにきて欲しいっていう檀家さんもいてたなあ」

「うつと斎藤さんが面倒くさそうな顔をする。

「事が片づいてからな」

「今週の土日にやつて」

チツと大きな舌打ちが響いた。

おお、斎藤さんがいい負かされた。なんかすうい。

「私も手伝います」

ぺこりと頭を下げるが、藤田さんと高橋さんが同時にしゃべった。

「なにいうてんのー。ぜんぶ力仕事やしオバケいっぺい出のしお嬢ちゃんにはムリよ。男にやらせとき」

「俺のときには手伝うつていわなかつたのに酷くねえ?」

「た、高橋さんのももちろん手伝うよ」

「おまえにはムリ。足手まとい」

斎藤さんが事もなげに告げる。

そんなにハツキリきつぱりいわれると少しショックだ。力仕事はできなくとも、雑用くらいはと思うのだが。

返す言葉もなくて大人しくしていたら、斎藤さんが少しだじりいだよくなまなざしを向けてきた。

「……なんか、いい返せよ」

「いや、事実だし」

情けない顔をしてしまって田舎を合わせられないでいると、ぽんぽんと高橋さんに頭をなでられた。

「えらい気に入られてるなあ」

と藤田さんが笑つた。

学生の子たちにいわくつきの人形を見せてあげたらそそくさと逃げ帰り、怪しいと思つたら人形の首がとれてしまつていた。

修理して丁重に供養したが、見学にきた5人の学生の内3人が怪我や病氣に遭つた。

あわてて謝りにきたその子たちのお祓いをしたが、住職の手応えはいまいち。

その後、彼らと連絡がとれないのでもしかして……と思つていたと藤田さんは語つた。

「わたしは普段お世話しるから平氣やけど、高橋さんと保円ちゃんはここでまつといたほうがええと思うわ。昔、靈能者さん呼んで頼んだこともあんねんけど、その人帰り道に事故で亡くなつてしまつたし。できるだけ見んほうがいい」

「はい」

うなずいたが、

「いや、俺らも行きます。なんかもう日本つけられてるみたいなんで。ついてつたほうが安全そうです」

と高橋さんがふすまを指した。

藤田さんがちょっと眉をあげ、ふすまを開ける。

うす暗い廊下に髪が不ぞろいにのび、ぼさぼさになつた日本人形が立つていた。

ぱつと見ただけで背中がぞくつとくるような不気味な表情をしていて、今にも動き出しそうだ。さつき廊下を通つたときにこんなものはなかつたし、他のだれかが置いていつた気配などなかつた。まさか自分で歩いてきたのか。

「うわ……ほんまやなあ……この子もつれてこか」

藤田さんはひょいと人形を抱え、廊下を先導した。

なんでこの人たちだれも動搖しないの？

慣れきっている感じのその様子がちょっとだけうすら寒く、三人のあとをあわてて追いかける。あちこちの物陰に人形たちがいて、それらがじいつとこちらを観察しているような錯覚が襲う。

この建物は異様な気配に満ちていた。

広く開かれた本堂では、住職さんらしい年配のお坊さんがお経を上げていた。

つるりとした坊主頭のおじいさんで、袈裟とかいう黒い着物をきてる。年のわりに体格はがつしりしていて、お腹がぽつこりモチのようにふくらんでいる。

その対面には緑の着物をきた、短いおかっぱの市松人形。ちらりとその顔を見たとたん、「あ、生きている」と思つてしまつた。

おだやかにほほえむそれは明らかに人形の顔ではない。あどけない5歳くらいの女の子がほほえんでいるようにしか見えないのだ。そうとしか思えないくらい生氣にあふれている。目が合つてしまつてじわりと冷や汗をかいていたら、いきなりポロリと人形の首が落ちて転がつた。

「ひツ！？」

反射的に高橋さんの腕をつかむと、彼がぽつりといつた。

「さすがに迫力が違うな」

「おお？ お客さんか？ こんな天氣によつきたなあ

住職さんがふり返る。

「客やけど客ちゃうで」

藤田さんがもろもろの事情を説明し、斎藤さんが紙袋から人形とお菓子、お酒をとりだして住職さんにわたす。

「そらこっちもVIPの子供が巻きこまれとるし、これ以上人死にみたくないしでなんとかしたいのはやまやまなんやけど……お！ ええもん入つとるやん。これで機嫌なあるかなあお嬢」

住職さんは斎藤さんがもつてきた群青色の着物の人形を抱えると、

緑の着物をきた、首のとれた人形のまえへさし出した。

直後、もつてきた人形の首がとれた。

あどけない顔が転々と床をはね、ごろんと高橋さんの前で止まる。

「あかんか。こんだけお経あげてお供え物もいっぱいして、よーしてるんやからそろそろ機嫌なおしてもええんちやう？」

と住職さん。

新品同様だつた人形の首がとつぜんとれる理由がまつたくわからなくて、私はただ言葉を失つていた。それ以上に不気味なのが、住職さんが完全に人形を人間の子供あつかいしていて、周囲もそれを当然のように受け入れていることだ。あれはそういう人形なのだと、頭では理解していても感情がなかなか追いつかない。

この空間では私が異端なのだ。

「こんど新しい着物を買ってやるから。見逃してやつてくれ」
聞いたこともないような、おだやかで優しい声音で斎藤さんがささやいてドキリとした。

乱れた人形の髪をそつとクシですき、首をはめて着物も整える。
不意に耳元で、

「あお……」

かすれるような女の子の声がして全身の毛が逆立つた。
ぱつと横を見るが、そこにはなにもいない。

周囲のみんながほつとしたような顔でほほえんでいるのが不思議だつた。

「そーか、青い着物が欲しいんか。知らん子が綺麗なべべきどるからうらうらやましくなつたんやなあ。……よつしゃ！ ほな着物代はうちで立て替えたるから、頼むで斎藤くん」

「ん」

斎藤さんが人形を住職さんに返し、神社からもつてきた群青色の着物をきた人形を庭でお焚き上げした。

これはもう役目を終えたのでいいらしい。残しておくとかえつて変なものが入つてよくないとか。

住職さんと藤田さんに丁重にお礼と謝罪をして、私たちはお寺をさつた。

家に連絡を入れたので大丈夫だとは思うが、空はすっかり黒くそまってしまっている。

時計をみると、すでに七時を回っていた。

「上手くいった……んだよね？」

なんだか実感がわからなくて帰りの車内でたずねると、高橋さんが笑つた。

「交渉成立したからなー。まだ油断できないけど大丈夫だと思ひ。てか、斎藤のタラシ声に寒気がした」

「私もびっくりした」

田つきが凶悪だが顔だちは整つているし、男前つて感じの魅力があるのと優しく声をかければコロッといく女性は多そうだ。
「勝てねーから下手に出るしかなかつただけだ。あのガキいつか燃やしてやる」

斎藤さんが毒づく。

なにこの豹変ぶり。ずっとさつきみたいにしていればいいのに、もつたいたい。

「二人とも本当にありがとう。お姉ちゃんのためになん時間もかけて移動したり、いろんな人に頭下げ……下げてはなかつたような気がしなくもないけど。すごく嬉しかつた。大したお礼はできないけど、私にできることあつたらいつてね。なんでもするから」
まだ姉の意識がもどつたわけではないので安心できないけれど、例え意識がもどらなくてもここまでしてくれた事実がありがたい。

「馬鹿」

なぜか斎藤さんに怒られた。

高橋さんはだまつてほくそ笑んでいる。

「できる範囲で、に訂正しつけ馬鹿。大馬鹿」

「え、じゃあそうする。訂正で」

よくわからないが、助言を聞いておいたほうがよさそうだ。

高橋さんが意味深に笑う。

「別にいーよ。セリフだけでも十分おいしい」

意味がわからないが、彼はちょっと変態っぽい気がしてきた。

斎藤さんがあきれたようにぼやく。

「おまえ、一度というなよ。一生というなよ」

その意味に気づいたのは、家について彼らと別れてからだった。

グロ注意です。

グロ注意です。

夜というか朝というべきか迷う、深夜2時44分。姉が目を覚ましたと病院から電話がきて、身支度もそこそこに家族総出でかけつけた。

医師と看護士の会話だけがひびく病室で、彼女は白いベッドに腰かけ、足を組んでぼうっと天井をみつめている。短い黒髪は汗ばみ、体にはまだ脈拍計や点滴がつながれたままで、パジャマからのぞく素肌には包帯や絆創膏がはられていて痛々しい。けれど、その表情には生気がもどっている。

「お姉ちゃん！」

よぶとこちからに田をやつて、気まずそうに笑つた。

「ああ……なんか悪いね。心配かけたみたいで」

医者によると二日後には退院できるそうだ。

詳しい話を聞いたあと病室で一時間くらい家族でいろいろ話していくが、朝になると父はそのまま会社へ行つた。私と母は家に帰つていつたん仮眠をとり、昼に出直してそれからずっと姉につきそつていた。また学校を休んでしまつたが、非常事態だし日も治つたばかりだからと両親からは二つ返事でOKがでた。

そして、おやつ時くらいのこと。

母がまた親戚や学校への対応で席を外している間。

検査が終わつて脈拍計も外れ、ベッドでじろじろしながら姉が事の顛末を語りだした。

夏休み中、友達の家に泊まりに行つて遊んでいたら、近くに怖い場所があるから見に行こうという話になつた。

古くなつた人形を供養する人形寺という所で、友達の親が龜戻にしているから、そこに保管されているいわくつきの人形を見せてもらえるのだという。

それで人形を見て、きやあきやあいいながら写真を撮つたりして

ふざけている内に友達のひじが当たり、人形を落としてしまった。

衝撃で首がとれてしまい、怖くなつて逃げ帰つた。

けして最初からイタズラするつもりではなかつたのだと姉は念押しした。

信じてなかつたわけではないけれど、高橋さんたちがいつていたことが本当に当たつていたのだと改めておどろく。

「素直に謝ればよかつたのに」

つぶやくと、彼女はフンと鼻を鳴らした。

「同じ状況ならあんただつて逃げるよー ゼッたい
いばるな。

「だつてさー、落とした張本人は半泣きでまつ先に逃げちゃつたし。残りの3人も早く退散しよーつて感じだつたし。高そうな人形だつたからね。弁償なんてできないし、あたし一人が責任とらされたら嫌だし、つい……まさか死んじゅうとは思わなかつたな

「えつ」

「あたしこのまえお葬式行つたでしょ」

人形を落とした子が、駅のホームから転落して亡くなつたのだそ
うな。

自殺ではないかという噂もあるが、姉はそう思つていらないらしい。

一緒に人形を見に行つた3人も自転車で崖から落ちたり、高熱が下がらなかつたり、調理中にありえない角度から包丁が飛んできて腕に刺さつたりと次々不幸に襲われた。

「靈とか信じてないけど、あたしにもなんかあるかもとは思つたね
ー。さすがに。まあこうしてケガだけで済んだわけだけども！」

だからどーしてそんな偉そなのか。

ふつと一瞬むなしそうな表情を浮かべて、姉が枕の下からなにか
をとりだした。

「みて」

大量の黒い髪の毛。

「きつ！？」

きもちわるつ。

彼女の抜け毛かと思つたがそれにしても短いし、姉は茶髪に染めている。

「なにそれ
つい身構えると、彼女はポツリとつぶやいた。

「戦利品

は？

車にひかれてから病院でめざめるまでの間。

姉は長い夢をみていたそうだ。

おばあちゃんちみたいな古くて大きな家の座敷で、小さな女の子がお手玉で遊んでいる。5・6歳くらいのおかっぱ頭に緑の着物姿。白田のないまつ黒な瞳で終始ほほえむその顔を見て、座敷わらしだと思った。

「いちかけ、にいかけ、さんかけ」

座敷わらしはわらべ歌に合わせてぽんぽんとお手玉を投げている。落としもせず器用なものだとながめているうちに、それは小豆を包んだ布などではなく人間のパーツだと気づいて全身がぎくりとこわばつた。そわそわと冷たい悪寒が背中を逆なでし、声すらあげられない。

「姉さん姉さん、じこゆくの」

宙をまっているのは葬式でみたばかりの友達の顔。生首だ。おびえてひきつったそれと目があつて身震いする。胴体もないのにまだ生きている。身をすべて削がれて骨だけになつても生きている、活き造りの魚のようだ。

いっそ殺してやつてくれ。

「切腹なされし父様のお墓まいりにまいります」

思い切りさけんで逃げ出したいのに体が動かない。

次に飛ぶのは女のうで。包丁が刺さった友達のうでだと直感した。ならば隣の目玉は崖から落ちて片目を失つた少女のものだろつ。お手玉にされているのはその三人。

高熱で寝こんでいた友達は助かったのだろうか。

「お墓の前で手を合わせ、南無阿弥陀仏ととなえます」

歌が終わり、座敷わらしが手を止めた。

「次はお姉ちゃんの番」

さあ、と生首と腕と田玉をさしだしていく。

断つたら自分もお手玉にされるのだろうか。

空気がねばつこことこつか重いといつが、まとわりつゝみつで仄
持ち悪い。無意識に肩がふるえ、冷や汗がだらだらと背筋を流れる。
田玉を手のひらにのせられそうになつて、よつやく声がでた。

「てか、あんただれ?」

座敷わらしはほほえんだまま、だまつている。この表情しかでき
ないのではないだろうか。わつわから少しも顔が動かない。

「知らない子とは遊ばない!」

「知らない子じやないよ。前に遊んだよ」

「あんたなんか知らない」

「どうしてそんなことこいつの?」

こきなり至近距離につめ寄られて後ずたる。けれども生首たちが
視界の隅に入つて、カツと頭に血が上つた。

「こんなガキに殺されてやるものか。

座敷わらしの頭をつかみ、髪をむしつてむしつて無我夢中で引き
ちぎりまくつてやつた。途中で首に激痛が走り、視界がぐるつと回
転して青い着物をきた自分の胴体が目に映り「首を切られた! ち
くしょくしょの野郎ちくしょくしょくしょ!」と怒り狂つたといふで、
病室のベッドで田玉が覚めた。

「そしたら手に髪の毛つかんでてやー。みてよこれキモイつたら」
がははと姉が笑う。

私は両手で顔をおおつていた。

なんかもう、どこからつこめばいいのか。

「……無事でよかつたよ」

「うん! ありがと」

「それとまことに、無謀すぎ。無茶しすぎ。夢とはいえないでそんな危ない場面でそーいうことしちゃうの。本当に死んでたらどうするつもりなの？だからお姉ちゃんは昔からケガばっかしてるんだよ。

女の子なのに殴り合いでケンカとかするし」「だつて友達をあんな風にオモチャにされたらムカつくじゃない。機嫌とつて生きるより噛みついて死んでやるわ。死んでなんかやらないけど」

そんな風にいわれたら怒れないではないか。

「座敷わらしはいい妖怪だから、それとは違うと思うよ。その女の子って、お姉ちゃんの友達が壊しちゃった人形じゃないの？」

高橋さんと斎藤さんが助けてくれたこと、人形寺の人たちも困つていたことなどを話すと、彼女は小馬鹿にしたように笑つた。

「あんたいつかツボ買わされるよ」

できれば姉も一緒に彼らへお礼をいって欲しかつたのだが、この顔を見るかぎりやめたほうがよさそうだ。

「もしそれが本当なら……その人形が身代わりになつてくれたからあたしの首は無事だつたつてことになるね」

そんなつぶやきにドキリとする。

「あ。そっか、時間差はあるけどあのとき人形の首が落ちたのは……そういうことだったのかも」

単に着物の柄を妬んで首を落としたのかと思つていた。だとしたら、身代わり人形を作るのがあと少し遅れていたらどうなつていたんだろう。

急にまた不安になつてきて、明るい話題に切り替えた。

それからしばらく後に聞いた話だが、高熱で寝こんでいた姉の友達も同じ夢を見ていたそうだ。

古くて大きな座敷で着物姿の少女にお手玉をせがまれ、泣く泣くグロテスクなお手玉で遊んでいた。

途中で嫌になつて「帰りたい」と訴えると「ダメだよ。お姉ちゃんはずつとここにいるの。ずっとずっと遊ぶんだから」と告げられ

てもう発狂しそうだつた。熱が下がつた今はその夢を見ることもなく、元気に暮らしている。

けれど、もう一生日本人形は見たくないといつているらしい。

後日、休日の昼ざがり。

直接お礼がいいたくて、高橋さんのマンションへむかおうとしていたら、出がけに母が「これ親戚に送つたやつの余りだけど、もつて行きなさい」とお茶菓子をいくつかくれた。

「友達の家に遊びに行つてくる」としか説明していないのだが、なにかいいたげな顔でみつめられる。

「咲月がおきない時にね、何度か気持ち悪い影を見たんだけど、いつのまにか見なくなつたんだよね。あんたなにか知らない?」

明里や高橋さんほどではないが母にも靈感があり、勘がするどい。高橋さんたちのことを話そうかと迷つたが、やめておいた。

姉は当事者だからいいが、それ以外の人に話すと高橋さんが嫌がりそうだと思つたからだ。病院で母と会つたときも靈の話はかくしていだし……今思い返すと、明里と沙也に話していたと知つたときも彼はひそかに嫌がつていた気がする。特に口止めもされていないし、出会つてしまもないころの私に軽く話したくらいだからわりと他人に話しているのかと思っていたが、そうでもないのだと最近ようやくわかつってきた。

「知らない」

とだけ答えて、家を出た。

マンションには斎藤さんも訪れていて、ちょづどよかつたので一人にお茶菓子をわたすと共に礼を告げた。

「力仕事は無理だけど、掃除とかお使いくらいなら手伝えるからいくらでもいいってね」

「じゃ、来週の土日てつだつてもりおつかな。ついでにジジイを紹

介してあげよう。あれでなかなか面白い人だから」と高橋さん。

「うん。土日あけておくね」

「斎藤もくるか?」

「俺は俺でいそがしい」

心なしか疲れているようだ。午前中に一仕事おえてきたのかもしない。

「あ、肩もむよ」

手伝いを押し売りしても鬱陶しいだろう、このまづがいいだろう。

斎藤さんが一瞬「は?」といつ顔でこちらをにらんだが、けっきょくなにもいわなかつたので気にせず手をのばした。

「意外とこつてないね」

マッサージ素人だが、たまに母や姉ともみあいつこしているのでこつているかどうかくらいはわかる。

幅の広い肩はしつかり筋肉がついていて分厚く、つかむのに苦労した。

「なんで斎藤には自分からさわる……?」

高橋さんが恨みがましげにつぶやく。

「犬でもネコでも、追いかけ回されると逃げたくなるものだよ高橋さん。他意はないしね」

「そして逃げられると追いたくなるといつ無限ループに陥るわけだ。俺の肩ももん」

「あと2分」

私の代わりに斎藤さんがぼつりといった。

お気に召したらしい。

ちなみに、高橋さんの肩はガチガチにこつていた。

「じゃあな」

用事が済んだらしく、斎藤さんが帰ろうとする。

「高橋さんの家だから私がいうのもなんだけど、斎藤さんもたまにはゆっくりしていけばいいのに」

まだ午後三時にもなっていない。

何気なくいって、斎藤さんが靴をはきながら横田で一いつ朶を見た。切れ長の瞳に私の顔が映る。

「殴つて欲しいか？」

「え！？」

「あいつ」

ちらりと視線を高橋さんに動かす。

高橋さんはじとーっとした目で静観している。

「つひん、別に」

どうしてそういう話になるのか。

首をふると、彼は黙つて出ていった。

バタンと無情にドアが閉まる。

もしかして、高橋さんと私がちょっと微妙な空気になつてこないに気づいていたんだろうか。

「えーっと、じゃ、私もそろそろ帰

「なんで？ まだ来たばっかじやん

するりと腰に腕が回される。

後ろから抱きすくめられて、顔が熱をもつた。

「……こういう流れになるかと思ったからだよ」

「わかつて来たんだ？ 期待には応えないとなー

耳たぶをかむんじやない。

確かに姉の言葉で「いいかな」とは思ひ切ったけれど、やっぱりちょっとござるとなるとひるむというか、斎藤さんがいてホツとし

ていたのに。

「寝不足なら大人しく寝てなよ」

「昨日は薬なしで寝れたし平氣」

「え？ 眠れるよつになったの？」

「ん？ 前から薬飲まなくても眠れるときはあるよ。眠れないときはのほうが多いっていうだけで」

「へー」

いつか治ればいいのに。

なんて思ついたら大きな手のひらが胸にふれてきて、体がこわばる。

「俺けつこーつくしてると思つんだけど。『J. 優美くれない？』いちいち言い方がはずかしいのはなんとかならないのか。ああもう、頭が混乱してきた。」

「高橋さんは好きだよ。でも今つき合つと恩があるから嫌々つき合つたみたいで変つていうか」

「変じやない変じやない。ひなは本氣で嫌なことはハツキリ断るつて知つてるし」

彼は笑つて正面にまわると、顔を近づけてきた。

「……」

かなりかなりかなりかなりはずかしかつたけれど、大人しく目を閉じる。

熱をもつた感触に背筋がぞくりとした。

ふれるだけのキスなのに頭がぼーっとしてしまって、そのままところともたれていたらテーブルに置かれた高橋さんのケータイから着信音が高らかに鳴り響いた。

電話のようだ。

ぽんやり我に返ると、服を着たままブラのホックが外されていて、スカートの中で太ももをなぞられていた。

「んん……ー？」

いつのまに。

おどろきながら唇をはなすと、再び口づけられそうになる。ケータイはずっと鳴り続けている。

「な、鳴ってるよ」

「無視だ無視」

「緊急かもしれないでしょ」

私のパンツをずり下ろそうとしていた手をへしと払いのけると、彼はがくつとうつむいた。

「しようもない用件だつたら殺す……！」

彼が電話に出たとたん、回線の向こうの声がかすかにこちらまで聞こえてくる。

内容はよくわからないがひどくあせつてているようだ。

重要な用件らしく、高橋さんが眉根をよせる。

「……なんかいそがしそうだから帰るね」

そそくさと乱れた服をもどし、小声で告げて私は部屋を出た。

まだ明るいのに、外は冷たい風が吹いている。

さわられていた感触がまだ生々しく残っていて顔から火が出そうだったから、ちょうどよかつた。

「また今度つづきしよ

「……」

帰宅すると同時に届いた高橋さんからのメールに返信できないまま数日が過ぎ、家庭教師の日になつた。

彼がやってきて、いつも通り私の部屋でテキストを広げる。

さすがに授業中は怪しい雰囲気になることもなく、むしろちよつとスバルタ気味に勉強が進んだ。怒鳴つたりキツイ言葉を吐かれたことは一切ないが、ちよつとトゲのある言葉が入つたりお説教が長引いたりする。すでに志望校の合格圏内の成績なのだから現状維持でいいじゃんと思つただけれど、それが彼にとつては「もつ

「たいない！」らしい。受験シーズンが迫ってきたからってそんなに気合入れてくれなくていいのに。

「そうそう、神社の手伝い土曜日になつたから。朝むかえに行く」
一息入れたとき、コーヒーに口をつけて高橋さんがいった。

「うん。なにすればいいの？ 掃除とか？」

彼はニヤリと笑う。

「面白いもんが見れるよ」

あれ、ちょっとヤな予感。

「こ」

怖いのは嫌なんだけど、といおうとするときちゅうとキスされて心臓がはねる。

「さ、勉強勉強」

高橋さんが楽しげに机に向き直る。

話をそらされた気がしなくもない。

約束していた土曜日の朝。

霜が降りたせいか、辺りには白くもやがかかっている。風景がはつきり見えないからか、まだ頭がしゃつきりしていないせいか夢の中のようだ現実感がない。

そんな中、移動中の車内で高橋さんが問う。

「寝言に返事しちゃいけないって話、知ってる？」

「聞いたことがある。おきられなくなるとか、死ぬとか「迷信だとは思うけれど、とても試す気にはなれない。

「じゃ、寝言とケンカして負けちゃいけないってのは？」

「ケンカ！？ 寝てる人とケンカなんてするの？」

「できるみたいなんだ、それが」

ある所に同棲中の大学生カップルがいた。

女のほうは普段から寝言が多くて、男はたまに話しかけたりして

いた。寝ているのにおきてこむとあとと変わらない返事をするのが面白かったらしい。

ある夜。

同棲しているマンションでいつもおり眠る女に話しかけていたら、つまらないことでケンカになつた。確か女が男友達と遊びに行つたけど、男も女友達と合コンに参加してたとか、そんなことで。「俺からしたらお互いにさもじょんつて感じなんだけど、気が弱いえに口下手な男だつたらしくてさ」

女は男友達とちょっと昼食を一緒に食べただけだが、合コンは明らかにそういう目的の場所だし恋人がいる身で行くべきじゃない。男のほうが悪い。

そう押し切られて負けてしまった。

さすがに不愉快に思い、男も布団にもぐつて目を閉じた。

直後、女が布団から半身をおこす。

なんだ、途中からおきていたのか。

そう思つたが様子がおかしい。

上半身をおこしてまつすぐ前を見つめたまま、一言も口を利かないのだ。

寝ぼけているのか？

肩をゆすつて名前を呼んでも反応しない。目を開いているのにも見ていない。よく知つている彼女ではなく、言葉が通じないにかと向かい合つているようで身の毛がよだつ。そのままずっと話しかけていたら、バタンと倒れるようにまた眠つた。

翌朝、問いただしてもケンカしたことも上半身だけおこしたことも覚えていない。

けれどそれから女は変になつた。

おきている間は普通なのだが、夜中の「1時」になるとこつも上半身だけおこしてじつと前方を見つめる。そつしていのときは呼びかけても返事をせず、まばたきもしない。だいたい5分くらいするとバタツと倒れるようにまた眠るのであまり気にすることもないか

と思つていたが、それだけではすまなかつた。

一週間くらいしたころ。

まだ空が暗い早朝に物音がして男が目を覚ますと、玄関から女が入ってきたところだつた。

夜中にどこかへ出かけていたのか。

たずねるより先にぎょと目を疑う。

女は全裸だつた。

汚れた素足で室内へ上がる彼女に声をかけてもまるで反応がない。目は開いているのにぼうっとした顔で寝室へ行こうとする。だれかに暴行されたんじゃないかと心配になつてほおをたたくと、今日が覚めたというように我に返つた。

「痛い！ なにすんの！」

「そんな格好でどこに行つてたんだよ…」

「格好つてな……！？ なんであたし裸なの？」

女はなにも覚えていなかつた。

暴行を受けたような形跡はなかつたので少しだけ安心しつつ、事と次第を説明する。

「おまえどうしちやつたんだよ。おかしいよ」

ため息をついた直後。

「つるせえな」

まったく知らない男の声で女がいつた。

「えつ」

とつさに後ずさつたときには女はいつもおりに床ついて、不思議そうな顔をしていた。

それからも女は毎晩夢遊病のじとく歩きまわり、今も精神病院に通院している。

「精神病院は行つたほうがいいと思つけど、お祓いにも行つたほうがいいんじや……」

怖い話だとつぶやくと、高橋さんが満面の笑みで告げた。

「うん。だから今日くるんだ」

え。

「ちょっとー!? 今日つて今から行く神社に? お祓いしに? え。

「まだ雑用とか掃除とかするつも、つもりでつ

「面白いもの見れるつていつたろ

「バカー! 私怖い話は好きだけど心霊スポット行つたり自分が怖い目にあつたりするのは嫌いなんだつてば。このまえはうちのお姉ちゃんを助けてもらうためだつたから我慢してたんだよつ

なにが楽しいのか彼は爆笑している。ひどい。

「大丈夫。見るだけ見るだけ。ひなはなにも怖くないつて。最近は俺のマンションから一人で行き帰りできるようになつたし、幽霊にもなれてきただろ?」

「……マンションはちょくちょく行くから、なれたといえбаなれたけど。エレベーターとかはともかく、まだ玄関がちょっと怖いかな」「あ、うん。エレベーターのやついなくなつたんだ。少し前に引っこしてきた5階の人についてる」

「やめてマンションの話は聞きたくない」

「ただでさえ寒いのに。」

「高橋さんつて私を怖がらせて面白がつてない?」

「うん。楽しい。怒らせるのも好き」

即答だ。

「……私は優しい人が好きだな」

「いつも二コ二コしていく、なにをいつても怒らないような感じが理想だ。

「ん? 僕優しいだろ?」

「うわ、自分でいつた。

「優しいけど、ちょっと意地悪

「嫌い?」

「このまえ伝えたはずだ。

はずかしいからあまり口にしたくないのだけれど、予想外に真剣な顔で見つめられてドギマギした。

「すすき」

すすきってなんだ。囁んだ。

ぎやあああと赤面していたら、

「俺も」

とキスされそうになつて、つい両手で彼の顔を押しもどした。

「前見てて。運転中でしょ」

「いま信号まちだし」

「見られたらどーするの」

「だれもよその車内なんか見ないつて」

「やだ」

高橋さんがようやく身を引いた。

「シャイだなー、ひなは」

シャイでけつこう。外でべたべたするのはどうかと思つ。ひそかに憤慨していたら、彼が話をもどした。

「心靈スポットとか除霊見学とかつてさ、一人で行つてもつまんないんだ」

「斎藤さんと行けば?」

なんだか微妙そうな顔をする。

「三人ならともかく、あいつと一人で行つても全然面白くない。誘つてもたぶんこないし」

仲がいいのか悪いのか、よくわからない一人だ。

「一緒におがみ屋みたいなことしてゐるくらいだし、仲いいんじゃないの?」

「いや、別に嫌いじゃないけど好きでもないというか。お互いたりの一致で手くんてるだけだから」

「……」

聞くんじやなかつたかもしれない。

男の友情に対するあこがれみたいなもので、ほんの少しヒビが入つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4345u/>

カテキヨ怪談

2011年10月10日03時12分発行